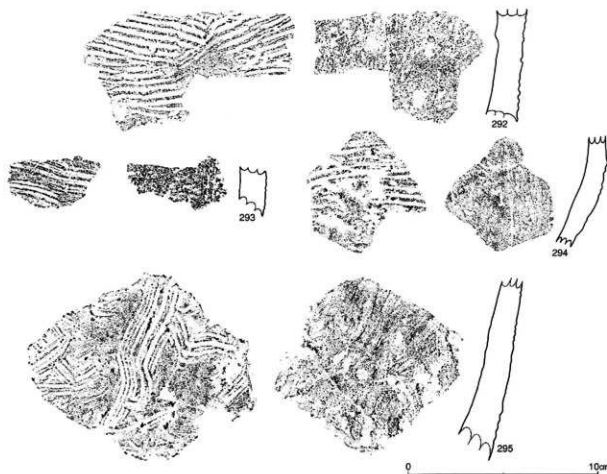


第47図 V類土器 3



第48図 V類土器 4

第11表 V類土器観察表

種図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	解石	その他				
第 44 図	260	L-5	V	黄褐色	灰オリーブ色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	完形
	261	B-6	IV	灰オリーブ色	灰オリーブ色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	262	B-6	IV	赤褐色	灰オリーブ色		○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	263	A-5	IV	黄褐色	黄褐色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	264	C-5	IV	黄褐色	黄褐色		○		金雲母	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	265	D-6	IV	黄褐色	黄褐色	○	○		金雲母	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	

第12表 V類土器観察表 1

種図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	解石	その他				
第 45 図	266	C-6	IV	赤褐色	暗赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	267	C-6	IV	赤褐色	赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	268	㊦㊧			赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	269	3 T	IV	赤褐色	赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	
	270	㊦㊧			赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	
	271	C-6	IV	黄褐色	黄褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	272				黄褐色	黄褐色		○	○	良	沈澱文	ケズリ後ナデ	
	273	C-5	IV	赤褐色	赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	274				赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	275	B-5	IV	橙 色	橙 色		○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	276	7 T	IV	浅黄色	浅黄色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	277		IV	暗灰黄色	暗灰黄色		○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	

### Ⅴ類土器 (第49図)

296は口縁部から胴部下半部までつながる資料で、口径は31cmを超える。残存資料から推定すると、底部から胴部にかけてやや膨らみ、胴部から頸部にかけて委んだ形状が頸部から口縁部に向けて若干反する器形である。口唇部直下の幅8cm程度の口縁部文様帯に、8本程度の貝殻条痕が押し引きの名残が小刻みに揺れながら横走し、胴部は無文である。

外面調整については、無文部分はケズリ後ナデの調整を施してある。口唇部や口縁部内面には丁寧な指ナデを施し、胴部内面はケズリ後にナデで仕上げてある。胴部上半は粗いナデであるが、下半部はナデが丁寧である。

胎上の状態は焼が極めて多く含まれ、長さ1cm程度の大きな罫が数多く確認される。

297と298も基本的には296に類似した特徴を有しており、いずれかの組み合わせにより同一個体である可能性もある。

### Ⅴ類土器 (第50～53図)

この土器群は、回転施文具により文様が施されるもので、押型文土器及び摺糸文土器と総称される一群である。文様形態や施文具の違いから3つに分類して詳述することとする。

### Ⅴ-a類土器 (第50・51図)

この類は、楕円押型文の一群であり、299～319が該

当する。299～301は口縁部の破片であるが、いずれも表面に施文がされているのが特徴である。299・300は内面口唇部直下に原体条痕が施され、その下位には楕円押型文が2条～4条横方向に施文されている。301は、内面口唇部直下に約1.5cm幅の楕円押型文が横方向に施文されている。299・301の口縁部片は、胴部から口縁部にかけて器壁が徐々に薄くなっている。303は先述の299・300から推定して口縁部下部の資料と思われる。貝殻条痕部もしくは器壁工具により1.5cm幅の縦位の押し引きが横方向に連続して施してある。

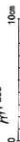
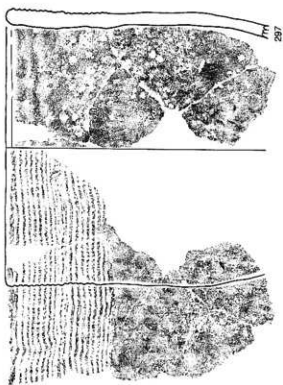
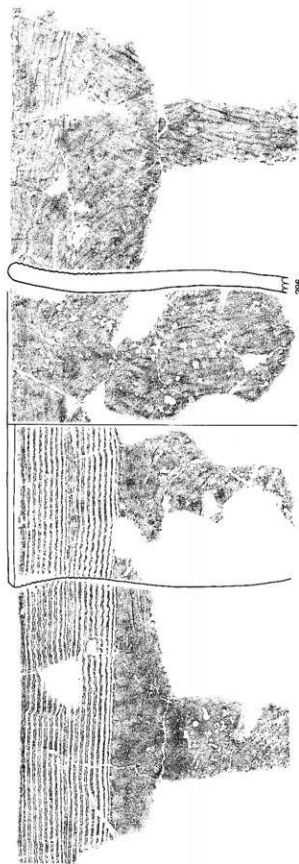
### Ⅴ-b類土器 (第51・52図)

この類は、山形押型文の一群であり、321～335が該当する。

321は胴部上半部に横方向の施文、下半部に縦方向の施文がされている。322は口縁部が直行し口唇部の断面観が三角形を呈する。口唇部直下から口縁部において原体を横方向に転がし、胴部において縦方向に転がして施文している。口縁部裏面上半部に横方向への押型施文が見られる。323は底部から胴部にかけてつながる資料である。底径9cm弱で胴部に向けて大きく膨らむが、器形の側面観は左右非対称で歪みを呈する。底部付近はもともと無施文なのか施文後のナデ消しによるものかは定かではない。底部外面には磨きを確認され、底部内面はほとんど平面を有しない。

第13表 Ⅴ類土器観察表 2

神岡 番号	遺物 番号	南市区	層位	色 調		胎 土		焼成	外 面	内 面	備考	
				外	内	石英	長石					燧石
第 46 図	278	D-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	◎	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	279	C-6	Ⅴ	赤褐色	赤褐色	◎	○	良	無文	ケズリ後ナデ		
	280	C-6	Ⅴ	暗灰黄色	黄色	○	○	良	無文	ケズリ後ナデ		
	281	B-5	Ⅳ	赤褐色	灰褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	282	C-6	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	283	B-6	Ⅳ	暗赤褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
第 47 図	284	B-6	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	285	B-6	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色	○	○	良	貝殻条痕文	ナデ		
	286	B-6	Ⅳ	明赤褐色	黄褐色	○		良	貝殻条痕文	ナデ		
	287	D-8	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○	ガラス	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	288	L-5	Ⅴ	棕色	棕色	◎	◎	良	貝殻条痕文	ナデ		
	289	7 T	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
第 48 図	290	B-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	291	C-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ナデ		
	292	B-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	293	D-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ナデ		
	294	B-6	Ⅳ	棕色	棕色	◎	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	295	C-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		



第49図 VI類土器

334は器壁が薄く、口縁部から口唇部にかけて大きく外反している。口縁部から胴部にかけて縦方向に原体を転がしている。口縁部裏面上半部に2cm幅の横方向への押型施文が見られる。336は胴部から底部にかけての資料であるが、胴部から底部に至るまで縦方向に施文されている。底部周辺側面部分及び底部の表裏面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

#### V c 類土器 (第51図)

この類は、燃糸文土器の一群であり、320の1点の

み出土している。口縁部が大きく外反し、口唇部断面観は舌状を呈する。口縁部内外面ともに燃糸文が右下がりの斜位に施文され、口唇部の平ら面にも燃糸文が確認できる。

#### Ⅷ類土器 (第53図)

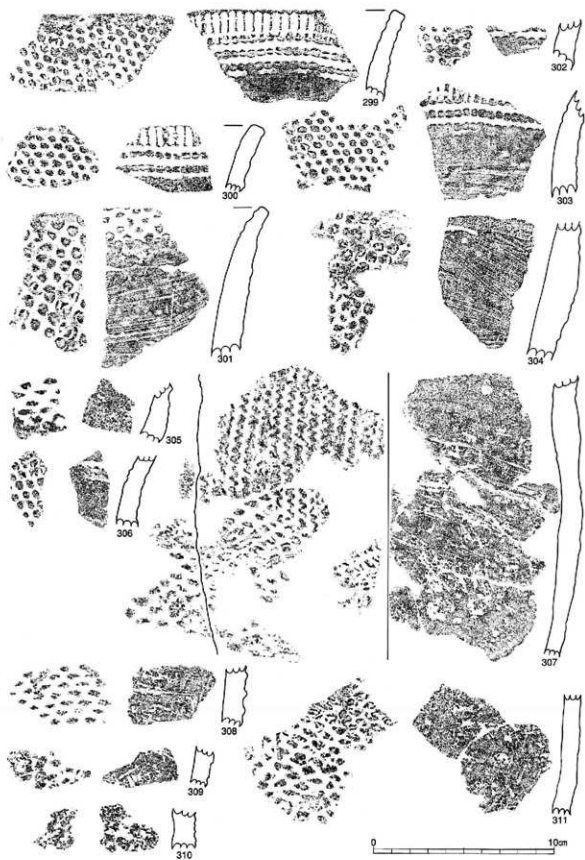
無文土器であるが、出土層がⅣ層のアカホヤ下層であり、底部径が約2.5cm程度の円形で胴部にかけて大きく膨らむ器形から、早期後葉の上器ではないかと考えられる。底周辺を指ナデしてあるのが確認できる。

第14表 VI類土器観察表

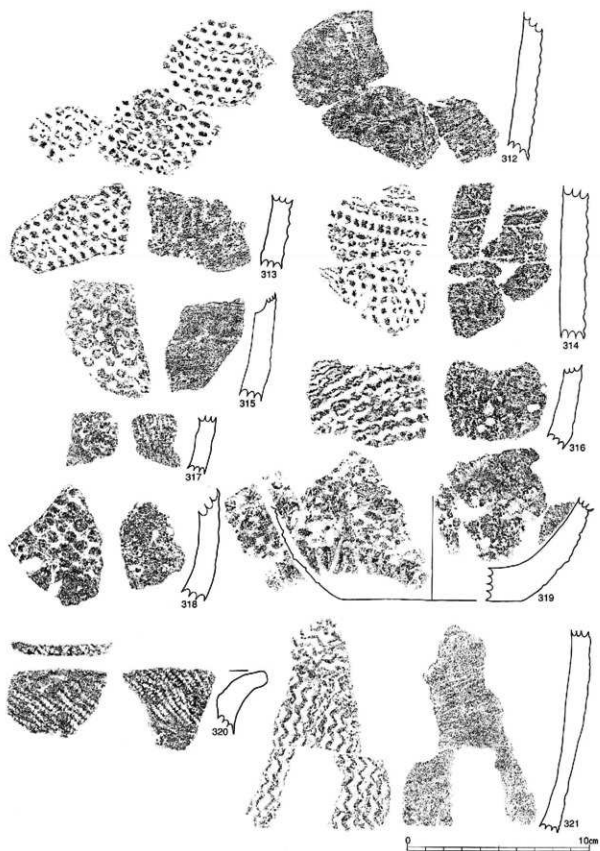
柳田 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	胎土	その他				
第 49 図	296	C-5	Ⅳ	橙 色	橙 色			○	○	良	貝殻条痕文	ナデ	
	297	C-5	Ⅳ	浅黄 色	橙 色			○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	298	C-5	Ⅳ	明黄褐色	黄 褐色			○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	

第15表 VII類土器観察表 1

柳田 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	胎土	その他				
第 50 図	299	B-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	300	A-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	301	C-6	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	302	C-5	Ⅲ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	303	A-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	304			褐色	暗灰黄色					良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	305	C-5	Ⅲ	橙 色	黄 褐色	○		○	○	良	楕円形押型文	ケズリ	
	306	C-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	307	C-5	Ⅳ	橙 色	橙 色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ上部をナデ	
	308	C-5	Ⅳ	橙 色	灰黄褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
第 51 図	309	C-5	Ⅳ	橙 色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	310	C-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	311	C-5	Ⅳ	橙 色	灰黄褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	312	B-5	Ⅳ	黄 褐色	灰黄褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	313	C-6	Ⅳ	橙 色	灰黄褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ	
	314	B-6	V	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	315	B-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	316	B-6	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	317	C-5	Ⅳ	橙 色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	318			黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
第 52 図	319	C-5	Ⅳ	橙 色	黄 褐色			○	○	良	楕円形押型文	ケズリ	
	320	おつ		橙 色	橙 色			○	○	良	燃糸文	ケズリ後ナデ	
	321	C-5	Ⅳ	橙 色	黄 褐色			○	○	良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	322	J-4	V	褐色	灰黄褐色	○		○	○	良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	323	J-4	V	橙 色	灰黄褐色					良	山形押型文	ナデ	
	324	B-5	Ⅳ	橙 色	黄 褐色				○	良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	325	おつ		黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	326	C-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色			○	○	良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	327	C-5	Ⅳ	橙 色	橙 色			○	○	良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	328			表土	黄 褐色			○	○	良	山形押型文	ケズリ後ナデ	



第50图 VII类土器 1

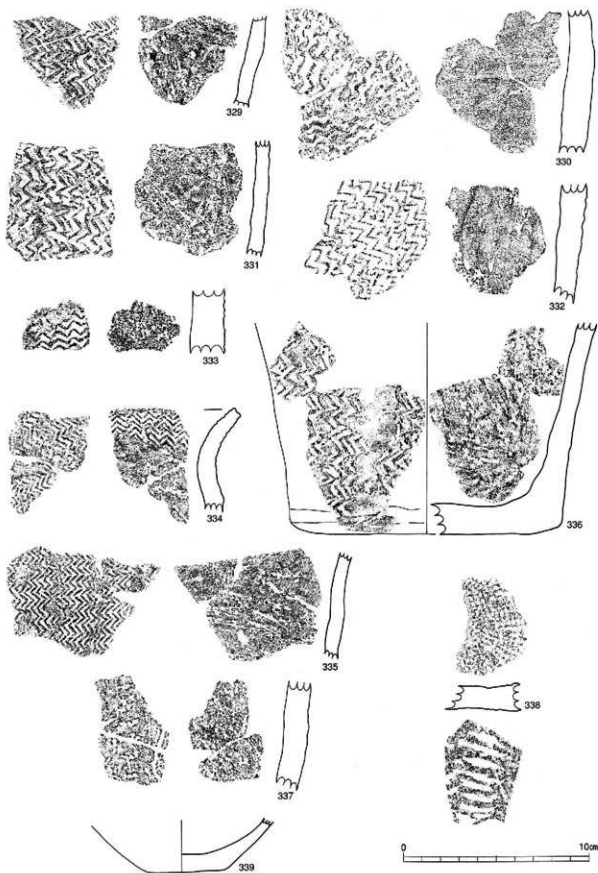


第51圖 VI類土器 2



第52图 VI类土器 3





第53图 VI·Ⅷ類土器

第16表 VII・Ⅷ類土器観察表

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土			焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	角石				
第 53 図	329	B-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	330	C-5	Ⅳ	褐色	褐色	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	331	C-6	Ⅳ	褐色	褐色	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	332	C-5	Ⅳ	黄褐色	黄褐色	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	333	J-4	V	黄褐色	黄褐色	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	334	K-4	Ⅳ	黄褐色	暗灰黄色	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	335	K-1	Ⅳ	褐色	暗灰黄色	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	336	B-6	Ⅳ	明赤褐色	明赤褐色	○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	337	J-4	V	黄褐色	黄褐色	○	○		良	刺突文	ケズリ後ナデ	
	338	K-4	V	浅黄色	暗灰黄色	○	○		良	無文	ケズリ後ナデ	
	339	B-6	Ⅳ	黄褐色	黄褐色	○	○		良	無文	ケズリ後ナデ	

## 石器

石器は、土器と同様にⅡ層・Ⅲ層上面で出土した。中でも、Ⅱ層とⅢ層に多く出土する。

7層の大半は2地点からの出土であるが、2地点ではⅡ層及びⅢ層の地積が薄く、Ⅲ層からⅡ層の上層が不明瞭であったことから、Ⅱ層から出土した石器類についても、縄文時代早期に該当するものと考えられる。

ここでは集石内出土石器とⅡ層の石器、Ⅲ層以下の石器との3つに分けて報告したい。

## Ⅱ層出土石器（第54～56図）

Ⅱ層出土遺物は、石槍、スクレイパー、打製石斧、石斧整形剥片、磨石、敲石の29点が出土した。

## 石槍・スクレイパー（第54図）

頁岩及びホルンフェルス素材とする。340は扁平な縦長剥片の主要剥離面を上下面に大きく残し、胴部両側縁部を細かく剥離加工し刃部を作出するもので、石槍に類すると考えられる。341は縦長剥片の上面を中心に剥離加工が施される。左側縁部を刃部とし右側縁部を基部とするスクレイパーと考えられる。342は上縁部を基部とし下端部を刃部とするスクレイパーである。刃部周辺を微細な押圧剥離により整形を施している。343はスクレイパーであらう。上面胴部左側縁部を両面からの細かな押圧剥離により刃部を作出し、右側縁部は上に上面側からの剥離により丁寧に基部を作り出している。

## 打製石斧（第55図）

Ⅱ層から出土している石斧は5点である。石材は全て頁岩製で上面観が短筒形の形状を呈し、欠損部分も

考慮に入ると、本来の長軸幅は10cm～15cm程度の大ききの資料が多い。

横長剥片を利用したのは344～346で、縦長剥片を利用したのは348である。明らかに両刃を有すると思われる資料は見られず、346・348については欠損のため、刃部の存在の有無は確認できない。

344は平坦面中央部の影らみ部分に擦痕が確認できるが、磨痕によるものかは定かでない。本類資料の殆どは刃部が丸みを帯びるのに対し、347の刃部は直線的である。刃部の欠損後に、敲打剥離により再度刃部を作出した二次加工製品であることによるものと思われる。胴部側縁部を磨りにより滑らかに仕上げている。

348は周縁部を大まかに剥離整形した後、胴部側縁部に磨りを施している。

## 石斧整形剥片（第55図）

349～361は、石斧製作過程における整形剥片である。いずれも石材は、頁岩である。

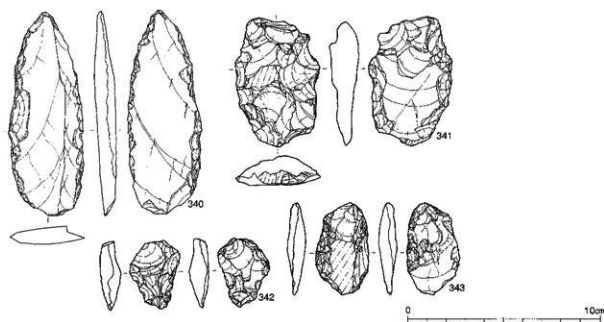
349、354、359は側縁に、350は下縁に剥離調整を施し、スクレイパーとして転用している。353には大小の調整剥離面が確認できるが、刃部形成に至らず、石斧等の製作途中もしくは石核の可能性も考えられる。

## 磨石・敲石（第56図）

磨石や敲石・凹石については、使用痕の形態により2種類に分類された。

## I類（第56図）

363は、全面的に磨面を有する。上面観は長楕円に近く若干の歪みを呈し、短軸断面観は三角形状である。右側縁部を中心に全面的に磨面を有する。



第54図 縄文時代早期出土石器 1 (Ⅷ層出土)

Ⅱ類 (第56図)

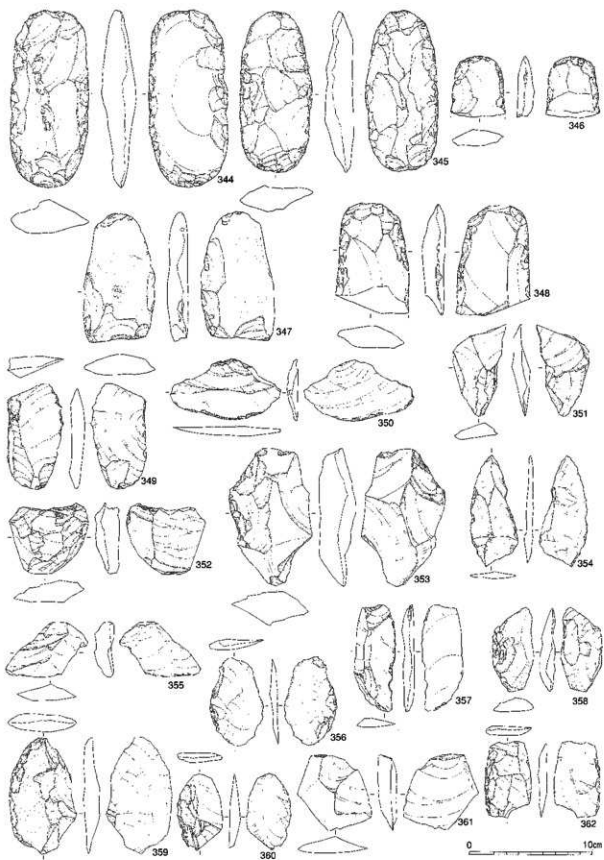
364～368は、全面的に磨面を有し、上下面や側縁部に敲打痕が見られる。概ね楕円形に近似した上面観であるが、366のみ変形した四角形状を呈している。

364にはいずれの平坦面にも磨面があり、側縁部の隅丸の頂部3点に集中して敲打痕が見られる。365は下面のみに磨面があり、側縁部2か所に敲打痕が確認できる。366はどの平坦面にも磨面があり、特に使用頻度が多かった部位に凹みは、凹みが明瞭に形成さ

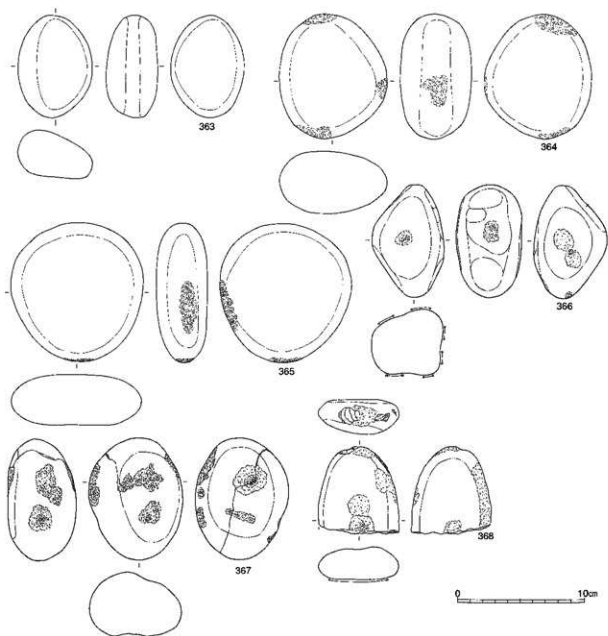
れている。隅丸の長軸両端部2か所には、敲打痕が確認できる。367には全面的に磨面が見られ、側縁部には敲打痕が3か所程度に集中的に残されている。上下面には明瞭な凹みが3か所あり、敲打を受けた頻度が高かったと思われる。368は半分ほど欠損しているが、下面に磨面があり、上面中央部には幅1cm程度の凹みが隣接して2か所確認できる。側縁部には凹むように敲打痕が残される。

第17表 Ⅷ層内出土遺物観察表

種別番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第54図	340	K-4	Ⅷ	ホルンフェルス	11.0	3.9	1.0	46.5	石槍
	341	J-5	Ⅷ	頁岩	6.5	4.3	1.5	44.0	スクレイパー
	342	K-4	Ⅷ	頁岩	3.5	2.4	1.0	8.1	スクレイパー
	343	K-4	Ⅷ	頁岩	4.8	2.7	0.9	11.3	スクレイパー
	344	K-4	Ⅷ	頁岩	14.7	6.4	2.7	282.0	打製石斧
	345	K-3	Ⅷ	頁岩	13.4	5.9	2.0	210.2	打製石斧
	346	K-4	Ⅷ	頁岩	5.1	4.4	1.3	38.3	打製石斧
	347	K-5	Ⅷ	頁岩	10.5	5.9	1.7	136.1	打製石斧
	348	K-5	Ⅷ	頁岩	9.1	5.9	1.8	127.0	打製石斧
	349	K-4	Ⅷ	頁岩	8.7	4.5	1.7	53.4	石斧整形剥片
第55図	350	K-4	Ⅷ	頁岩	5.1	8.9	0.8	32.0	石斧整形剥片
	351	K-4	Ⅷ	頁岩	6.9	4.0	1.4	24.8	石斧整形剥片
	352	K-5	Ⅷ	頁岩	5.4	6.4	2.0	62.9	石斧整形剥片
	353	K-4	Ⅷ	頁岩	11.4	6.6	3.0	202.5	石斧整形剥片
	354	K-5	Ⅷ	頁岩	9.1	4.8	1.2	19.0	石斧整形剥片
	355	K-5	Ⅷ	頁岩	4.4	4.8	1.4	33.6	石斧整形剥片
	356	K-4	Ⅷ	頁岩	7.2	4.3	0.9	20.2	石斧整形剥片
	357	K-4	Ⅷ	頁岩	8.8	3.2	0.8	29.3	石斧整形剥片
	358	K-5	Ⅷ	頁岩	6.7	3.3	1.1	26.3	石斧整形剥片
	359	K-4	Ⅷ	頁岩	9.6	5.4	1.5	65.9	石斧整形剥片
	360	K-4	Ⅷ	頁岩	6.3	3.6	0.8	17.7	石斧整形剥片
	361	K-4	Ⅷ	頁岩	6.2	5.7	1.4	52.0	石斧整形剥片
	362	J-4	Ⅷ	頁岩	6.2	3.8	0.8	22.3	石斧整形剥片



第55図 縄文時代早期出土石器 2 (Ⅷ層出土)



第56図 縄文時代早期出土石器3 (Ⅶ層出土)

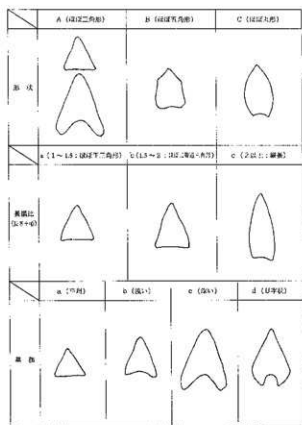
第18表 Ⅶ層内出土遺物観察表

種別 番号	遺物 番号	出土区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第 56 図	363	B-5	Ⅶ	安山岩	8.4	5.9	3.8	260	磨石
	364	K-4	Ⅶ	安山岩	10.2	8.5	5.0	695	磨石
	365	K-4	Ⅶ	安山岩	11.3	10.3	4.1	750	磨石
	366	K-4	Ⅶ	砂岩	9.3	5.2	5.4	357	凹石
	367	K-4	Ⅶ	砂岩	10.0	7.4	5.1	520	凹石
	368	K-4	Ⅶ	砂岩	7.1	6.3	2.7	173	凹石

石鏃 (第59~62図)

石鏃では、磨製石鏃が1点、打製石鏃が63点出土し、これらを図化した。石鏃の形状は、ほとんどが正三角形や二等辺三角形に施され、原型のままで出土したものが多い。他にも五角形で施されているものが8点ある。

石鏃石材分析状況 (第58図) から、頁岩が41%で最も多く使用され、次に安山岩、黒曜石が19%である。下記のとおり打製石鏃を類別に細分化したが、類別に定まった石材を使用せず、どの類も多種な石材が使用されている。



第57図 石鏃の分類図

石鏃の出土区ごとの個体数を分析してみると(第58図) B-1やC-1を中心とする1地点の北部や、J-1、K-1とする2地点の中央部がもっとも多い。類別に出土状況を比較したが、特に著しい特徴は見られなかった。

#### 磨製石鏃(第59図)

369は磨製石鏃であり、全体的に1等な研削が施され薄くしてある。

#### 打製石鏃(第59~62図)

打製石鏃は、形状、長幅比、基部を分類図(第57図)のとおり細分し、10類に分類した。

#### I類 A-a-a(第59図)

370~382は、長幅比が1~1.5で形状がほぼ正三角形を呈し、基部は平坦である。

#### II類 A-a-b(第59・60図)

383~395は長幅比が1~1.5で形状がほぼ正三角形である。基部は浅い抉りが施されている。

#### III類 A-a-d(第60図)

396は長幅比が1~1.5で形状がほぼ正三角形である。基部はU字状に施されている。

#### IV類 A-b-a(第60図)

397・398は長幅比が1.5~2で形状はほぼ二等辺三角形である。基部は平坦である。

#### V類 A-b-b(第60図)

399・405は長幅比が1.5~2で形状がほぼ二等辺三角形である。基部に浅い抉りが施されている。

#### VI類 A-b-c(第60・61図)

406~411は長幅比が1.5~2で形状がほぼ二等辺三角形である。基部に深い抉りが施されている。

#### VII類 A-b-d(第61図)

412~414は長幅比が1.5~2で形状がほぼ二等辺三角形である。基部がU字状に施されている。

#### VIII類 A-c-b, d(第61図)

長幅比が2以上で縦長の二等辺三角形である。415と416は、基部に浅い抉りが施されている。417と418は、基部がU字状に施されている。

#### IX類 B全般(第61図)

形状がほぼ五角形を呈している。419は、長幅比が1~1.5であり、基部に浅い抉りが施されている。

420と421は、長幅比が1.5~2であり、基部に浅い抉りが施されている。422と423は、長幅比が2以上である。422の基部は平坦であり、423はU字状に施されている。

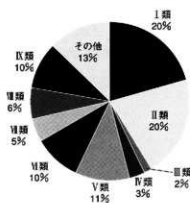
#### X類 その他(第62図)

425~428は、基部が凸状に施されている。

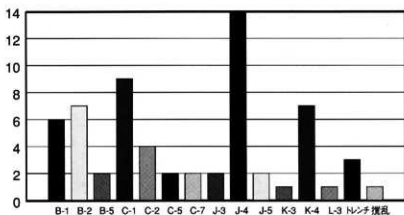
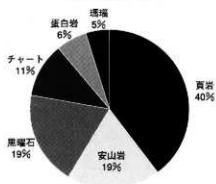
石鏃を分類別に個数の割合を分析してみると、I類とII類が最も多く、長幅比が1~1.5の石鏃が全体の5分の2を占めていることが分かる。次に長幅比が1.5~2の石鏃が約3分の1を占めている。

また、基部から分析すると浅い抉りが施されている石鏃が最も多く、II類、V類、VIII類合わせると全体の3分の1以上を占めている。

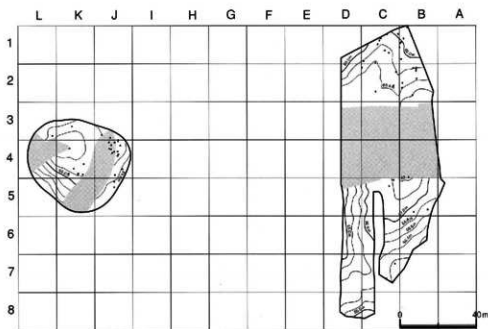
打製石鏃類別個体数



石鏃石材分析図

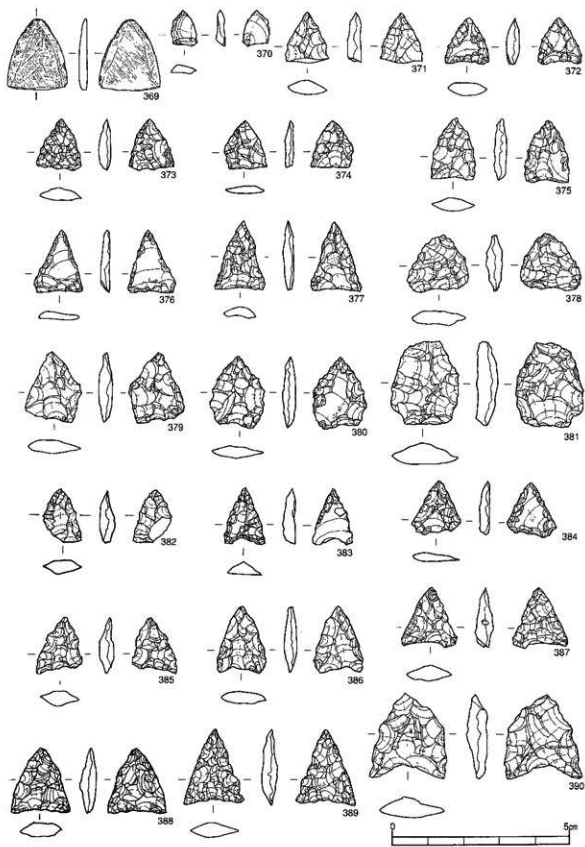


石鏃出土区ごとの個体数



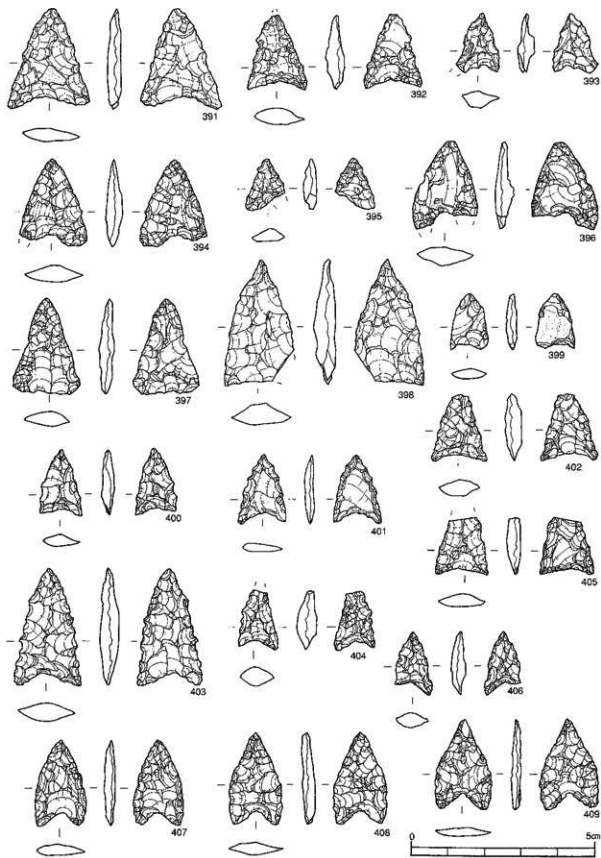
石鏃分布図

第58図 石鏃分析・分布図

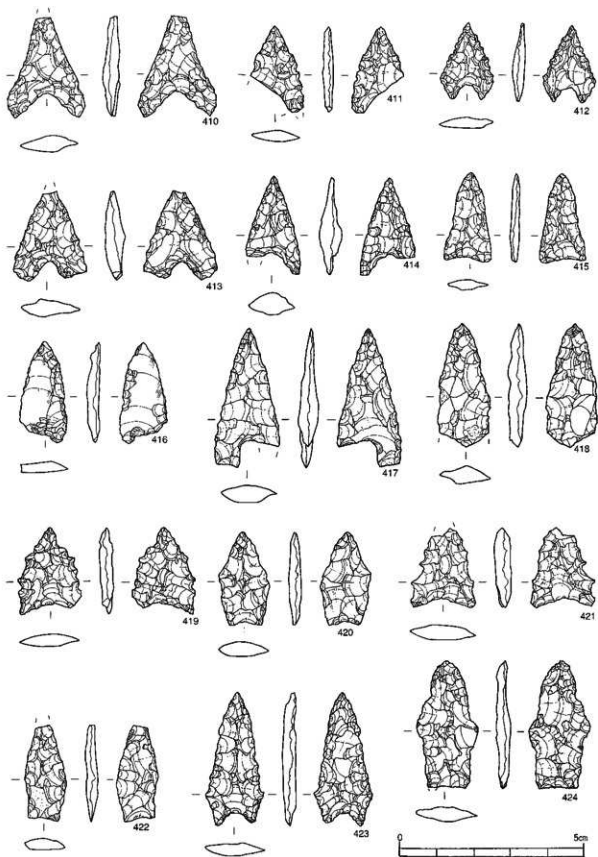


第59図 縄文時代早期出土石器4（石鏃）

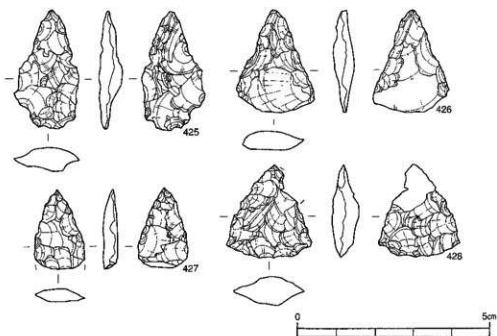




第60図 縄文時代早期出土石器5(石鏃)



第61図 縄文時代早期出土石器6 (石鏃)



第62図 縄文時代早期出土石器7 (石鏃)

第19表 石鏃観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第 59 図	369	3T	Ⅲ	頁岩	1.98	1.66	0.22	0.90		
	370	C-1	V	チャート	0.98	0.65	0.22	0.13		
	371	C-1	V	チャート	1.37	1.18	0.38	0.52		
	372	K-4	V	頁岩	1.26	1.20	0.32	0.42		
	373	J-4	V	黒曜石	1.23	1.16	0.32	0.42		
	374	K-4	V	チャート	1.27	1.06	0.21	0.29		
	375	C-1	V	頁岩	1.72	1.20	0.32	0.67		
	376	J-5	V	頁岩	1.64	1.29	0.23	0.47		
	377	B-5	V	黒曜石	1.92	1.36	0.24	0.53		
	378	C-1	V	頁岩	1.54	1.64	0.43	1.01		
	379	J-4	V	漂白石	1.92	1.42	0.34	0.88		
	380	B-1	Ⅳ	瑪瑙	2.00	1.48	0.33	0.90		
	381	J-4	V	漂白石	2.33	1.83	0.56	2.56		
	382	J-3	V	チャート	1.45	0.88	0.39	0.50		
	383	K-3	Ⅳ	黒曜石	1.38	1.04	0.33	0.41		
	384	K-4	V	黒曜石	1.50	1.23	0.27	0.43		
	385	B-2	Ⅳ	頁岩	1.51	1.25	0.36	0.44		
	386	K-4	V	頁岩	1.77	1.27	0.33	0.64		
	387	C-1	V	黒曜石	1.65	1.45	0.43	0.75		
	388	C-2	Ⅳ	頁岩	1.83	1.64	0.48	0.82		
	389	B-5	Ⅳ	安山岩	2.06	1.54	0.44	1.01		
	390	C-1	Ⅳ	安山岩	2.32	2.12	0.55	2.42		
	第 60 図	391	K-4	V	安山岩	2.70	2.06	0.34	1.65	
		392	I-3	Ⅳ	安山岩	2.01	1.55	0.48	1.13	
		393	C-1	V	安山岩	1.62	1.15	0.44	0.50	
		394	B-2	V	安山岩	2.40	1.72	0.38	1.25	
		395	J-4	V	黒曜石	1.42	0.94	0.33	0.33	
		396	J-4	Ⅳ	黒曜石	2.40	1.70	0.54	1.50	
397		カクラン		チャート	2.59	1.74	0.33	1.24		
398		C-2	Ⅳ	頁岩	3.47	1.80	0.60	3.24		
399		B-1	Ⅳ	頁岩	1.50	1.00	0.27	0.39		

### 石匙・石槍 (第63図)

ほとんどが頁岩で、一部硅質頁岩やチャートが含まれる。431のみ槌型剥片の利用であり、それ以外は縦型剥片を利用し、上下両面からの大小の剥離加工により側縁部や先端部を整えている。

429は石匙で、側縁部に明瞭な抉りが施されつまみ部が形成されている。先端部は鋭利で、両側縁に細かな調整剥離が見られる。430~438は石槍。432は長軸長3.5cm、短軸長2.6cmと長軸短軸の小さな小資料である。着柄痕が確認できない点や小資料による着柄の困難さからスクレイパーの可能性も考えられるが、全面的に微細な押し剥離が施されることから石槍とした。433は基部寄りの両側縁が若干の抉りを呈し、着柄によると思われる磨りが確認される。434は長軸長17.1cm、最大短軸長4.9cm、器厚3.3cm程度と本器種中最大で器厚も大きい。436は両面側からの丁寧で微細な剥離調整が両側縁部に確認できる。両端部が大きく欠損した石槍の残存資料と考えられる。438は、長軸長10.8cmに対し短軸長は2.4cm程度と細長い器形である。細かい両面側からの剥離により整形した後、磨りによ

り加工を施したと思われる。上下両面と左側縁部には平坦面が形成され、擦痕が認められる。

### 石斧整形剥片 (第64~67図)

頁岩がほとんどであり、硅質頁岩や黒曜石、蛋白石が含まれる。石器の形状と主要な敲打の方向の関係、刃部等の調整の有無から、以下の3種類に分類して特徴をとらえた。

#### I類 (第65・66図)

459・461・466~468・475~477・484・487・488は主要剥離面のリングの方向性が横長の剥片である。

器厚は扁平である。

#### II類 (第64~66図)

440・445・460・480・481・489は主要剥離面のリングの方向性が縦長の剥片である。

469は若干厚みを呈するが、その他は扁平な器厚をもつ。

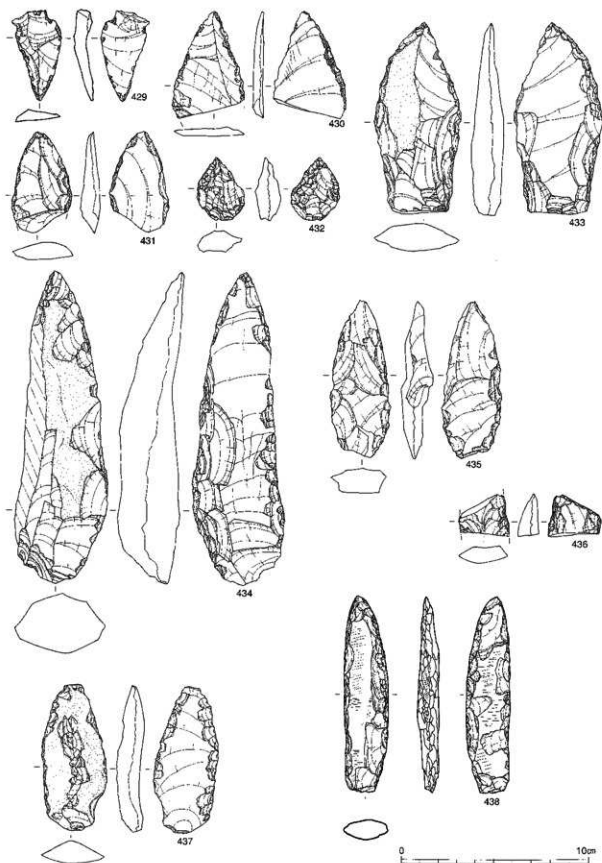
#### III類 (第64~67図)

剥片の二次加工により刃部が形成される一群である。

439は上下両面に丁寧に研磨された面を残すところ

第20表 石鏡観察表

検出 番号	遺物 番号	出土区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第 60 図	400	B-1	IV	頁 岩	1.75	1.07	0.34	0.57	
	401	C-1	IV	安山岩	1.92	1.27	0.27	0.56	
	402	K-4	V	頁 岩	1.83	1.50	0.44	1.04	
	403	B-2	IV	安山岩	3.20	1.76	0.52	2.34	
	404	J-4	IV	安山岩	1.64	1.07	0.51	0.75	
	405	C-1	IV	チャート	1.57	1.42	0.34	0.81	
	406	B-1	IV	頁 岩	1.75	0.83	0.47	0.49	
	407	J-4	V	瑪 瑙	2.33	1.36	0.24	0.81	
	408	C-2	IV	蛋白石	2.47	1.43	0.33	0.98	
	409	C-2	IV	チャート	2.44	1.48	0.24	0.81	
	410	C-7	IV	安山岩	2.77	2.03	0.36	1.46	
	411	B-1	IV	頁 岩	2.33	1.22	0.33	0.72	
	412	C-7	V	頁 岩	2.13	1.42	0.29	0.64	
	413	C-5	IV	頁 岩	2.39	1.93	0.56	1.92	
	414	B-2	IV	黒曜石	2.64	1.43	0.61	1.35	
	415	B-1	Ⅴ	頁 岩	2.40	1.20	0.35	0.64	
	第 61 図	416	J-3	V	頁 岩	2.75	1.20	0.27	1.11
417		C-5	IV	安山岩	3.83	1.77	0.44	2.25	
418		J-4	V	瑪 瑙	3.27	1.35	0.44	1.93	
419		B-2	IV	黒曜石	2.24	1.66	0.36	1.27	
420		J-4	V	頁 岩	2.53	1.25	0.32	0.98	
421		J-4	IV	安山岩	2.12	1.73	0.43	1.48	
422		J-4	V	頁 岩	2.58	1.05	0.34	0.97	
423		B-1	IV	安山岩	3.60	1.48	0.35	1.71	
424		J-4	V	頁 岩	3.48	1.62	0.39	1.70	
425		J-4	V	頁 岩	3.17	1.63	0.58	2.24	
第 62 図	426	J-5	V	頁 岩	2.80	1.94	0.52	2.16	
	427	J-4	V	瑪 瑙	2.09	1.24	0.34	0.97	
	428	K-4	V	安山岩	2.44	2.05	0.66	2.65	



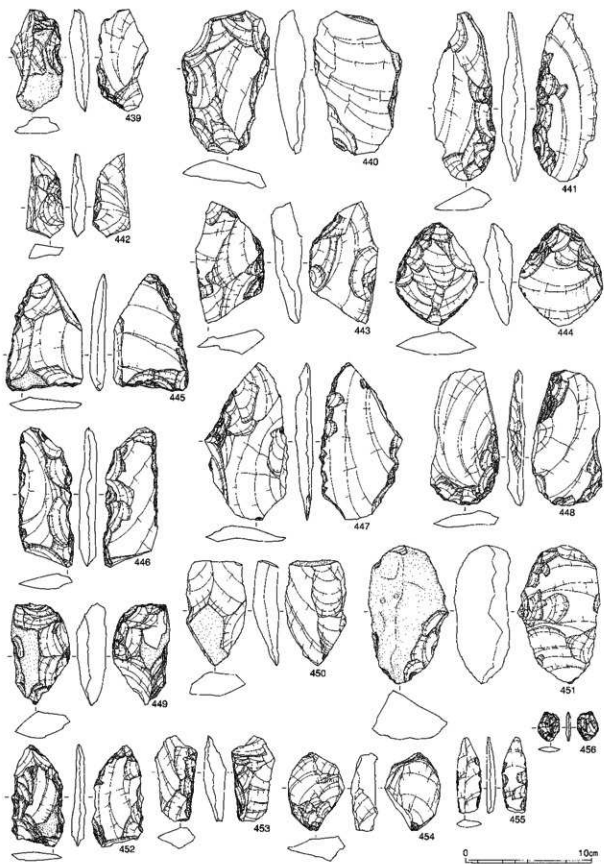
第63圖 縄文時代早期出土石器 8 (石匙・石槍)

から、磨製石斧の使用後または破損後に、側縁部を片側面からの剥離により刃部及び基部形成を行なった可能性が考えられる。441は上下両面側からの大小の剥離により基部形成を丁寧に行っている。刃部調整痕は確認できず、使用痕剥片に類すると思われる。443は刃部整形加工が部分的に伺えるが、刃部先端部が潰れており使用痕と思われる。444は菱形を呈する器形である。上部頂点部周辺を丁寧に基部整形し、下部頂点部を上側面からの微細な剥離により刃部形成を施してある。446はナイフ状の器形を呈する。上面左側縁部を両面側からの微細な剥離により基部を仕上げ、上面右側縁部を大小の剥離により刃部を作出している。448は上面下端部を細かな剥離により刃部に仕上げ、下面左側縁部を下面側からの剥離により基部として作出している。449は、研磨された面が上下両面に残される。破損等により使用できなくなった磨製石斧を、再度剥離整形した二次加工品と思われる。450は細かな剥離面が見られないことから、石器製作途中の資料の可能性がある。451は短軸断面が三角形状である。下面を中心的に加工してある。上端部の鋭利な頂部を敲打により潰し、下面左側縁上部を下面側からの細かな剥離により基部として仕上げている。下端部は、下面側からの大きな剥離により刃部として作出している。452はナイフ状の器形である。刃部形成は明瞭でなく、基部・刃部の部位特定は困難である。453は上面左側縁部を両面側からの剥離により細かく基部形成を施しているが、刃部調整痕は認められない。大きな剥離により作出された鋭利な縁辺部を、刃部として利用した使用痕剥片と思われる。454には鋭利な刃部形成部位が認められず、大き目の剥離面が複数残される。石核の可能性が高い。456は、掲載遺物中最小の資料である。周縁部を丁寧な押圧剥離により加工し、縁辺全体を刃部とする。457は上面観が三角形状を呈する。上面右側縁部を両面側からの大小の剥離整形により刃部を作出している。部分的に側縁部の鋭利な箇所を潰し、基部として利用したと考えられる。458・459・467は部分的な調整剥離により刃部を形成している。458は側縁部両面側から整形を施し、微細な剥離により刃部を作り出している。459は、上面左側縁部を両面側からの部分的な細かな剥離により刃部形成を施している。基部に細かな調整痕は確認できない。462は長軸でも4cmに満たない小さな器形である。上面左側縁部を両面側から微細な剥離を施して刃部とし、右側縁部には細かな調整を施さず基部としている。467は、主要敲打点周辺を細かな剥離により基部形成している。下端部においては主要剥離面により作出された鋭利な部位を生かし、極部分的な押圧剥離により刃部を作り出している。465・469・471～473・499は自然面

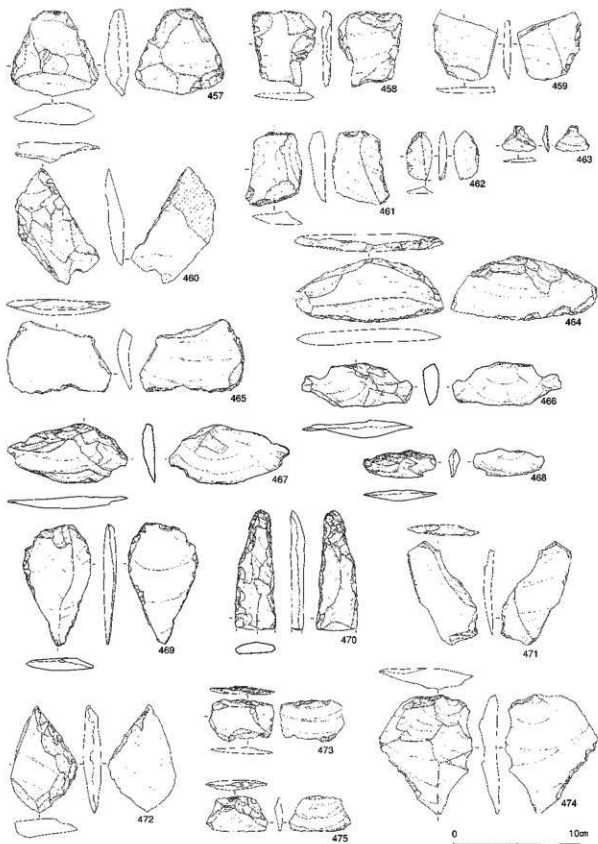
や主要剥離面を大きく残し側縁部を細かく整形加工し、465・471～473は刃部のみを、469・499は刃部・基部ともに両面側から丁寧に剥離整形してある。

464・474は主要な敲打点側の器厚を生かし、大小の剥離により基部形成を施し、刃部を微細な剥離により丁寧に整形している。479・482は主要敲打点周辺を上側面側からの剥離を中心として加工して基部を作出、刃部には細かな調整痕は確認できない。483は器厚が3.4cm、長軸12.5cmと大きめの資料である。両面側から加工が施され、刃部形成が見られる。使用痕も確認できる。485は上面左側縁部の自然面を生かして基部とし、上面右側縁部に部分的な微細な剥離により刃部を作出している。486は敲打点周辺部を大小の剥離により基部整形し、刃部側にはわずかな調整剥離が確認できる。490は扁平な素材を生かして周縁部を剥離加工し、上端上面側を基部整形し、上面右側縁部を微細な剥離により刃部としている。491は、大きく3面の剥離面により整形がなされている。上面観は基部が半円状を呈し、尖頭部が頂点を成す石錐と考えられる。493は下面には雑皮面が多く残される。上面右側縁部から下端部にかけて細かな剥離により刃部形成を意識したと思われる加工がなされている。直線的な鋭利な縁辺形成に至らず刃部としては不適当であり、製作途中の可能性も考えられる。494は三角形状の器形を呈している。底辺部の平坦な自然面を基部として生かし、斜辺2辺を上側面側からの大小の剥離により刃部を形成している。495は、両側縁下半部から下端部にかけて円弧状に細かく剥離を施し、刃部形成している。雑表皮に擦痕が認められることから、磨斧等の二次加工品の可能性も考えられる。496は側縁部がきれいに切断され、上面観が正三角形を呈している。底辺部には、大小の押圧剥離による直線的な刃部が形成されている。

498は器厚4mmと極薄で、五角形状の特徴的な器形を呈している。底辺部を両面側から押圧剥離し刃部を形成し、他の側縁部には剥離等の加工の痕跡は見受けられない。上下両面には擦痕が残される。499は厚みを有する主要敲打点周辺を大小の剥離により基部整形し、上面下端部の鋭利な縁辺を生かし、極微細な押圧剥離により刃部を作出している。

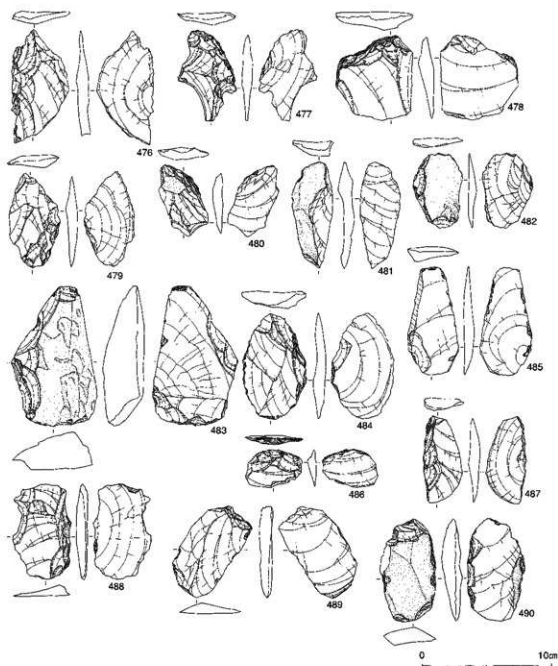


第64圖 縄文時代早期出土石器9 (石斧整形剥片)



第65図 縄文時代早期出土石器10 (石斧整形剥片)

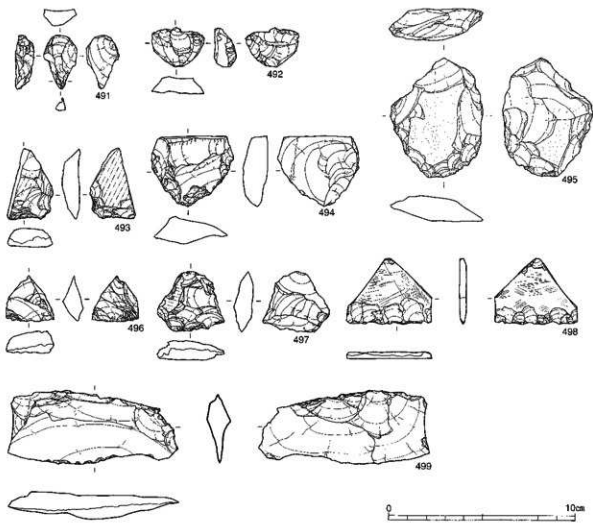




第66図 縄文時代早期出土石器11（石斧整形剥片）

第21表 石匙・石槍観察表

検出 番号	遺物 番号	出土区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第 63 図	429	J-5	V	頁 岩	4.9	2.4	0.9	6.6	石匙
	430	J-4	V	頁 岩	5.4	3.9	0.5	10.8	石槍
	431	K-4	V	頁 岩	5.5	3.2	0.9	15.9	石槍
	432	K-3	V	瑪 瑙	3.5	2.6	1.1	10.1	石槍
	433	K-4	V	頁 岩	10.6	4.7	1.7	86.1	石槍
	434	K-4	V	頁 岩	17.1	4.9	3.3	265.3	石槍
	435	K-4	V	頁 岩	8.4	3.2	1.4	38.4	石槍
	436	C-1	IV	頁 岩	2.2	2.7	0.9	6.5	石槍
	437		I	頁 岩	8.1	3.3	1.3	35.9	石槍
	438		I	頁 岩	10.8	2.4	1.2	36.4	石槍



第67図 縄文時代早期出土石器12 (石錐・石核・スクレイパー)

第22表 石斧整形剥片観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考	第 64 図
	439	C-2	V	頁 岩	8.5	3.8	1.5	46.9		
	440	L-6	V	頁 岩	11.6	7.1	2.4	175.0		
	441	K-4	V	頁 岩	14.1	5.0	2.0	116.1		
	442	J-4	V	硅質頁岩	6.4	3.0	1.2	2.7		
	443	K-5	V	頁 岩	10.1	5.5	2.2	99.2		
	444	J-4	V	頁 岩	8.7	6.8	2.4	111.4		
	445	K-4	V	頁 岩	9.4	6.1	1.8	74.2		
	446	K-4	IV	頁 岩	10.6	4.2	1.4	74.0		
	447	K-5	V	頁 岩	13.1	6.6	1.4	104.2		
	448	K-4	IV	頁 岩	11.1	5.5	1.3	103.3		
	449	L-5	V	頁 岩	8.2	4.5	2.2	85.1		
	450	C-6	IV	頁 岩	8.2	4.9	2.0	76.1		
	451	K-3	V	頁 岩	11.5	6.4	4.3	36.6		
	452	K-4	V	頁 岩	7.9	4.1	0.7	32.6		
	453	K-5	V	頁 岩	7.1	3.3	1.7	32.5		
	454	K-3	V	硅質頁岩	6.5	4.5	2.0	58.9		
	455	J-4	V	頁 岩	6.2	2.0	0.7	8.9		
	456	J-4	V	頁 岩	2.3	1.6	1.5	1.6		

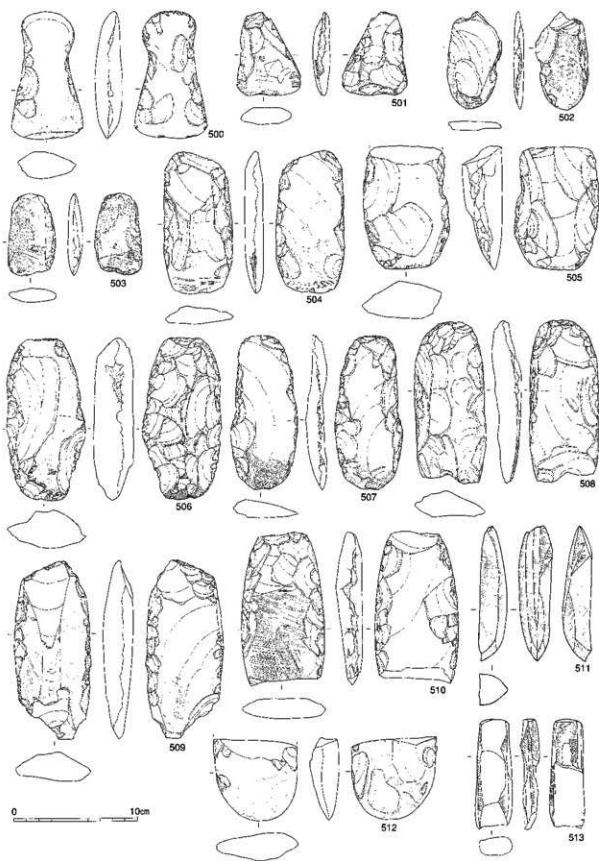
#### 磨製石斧（第68図）

頁岩製が多く、一部は蛇紋岩製である。503は定角式石斧と思われ、両側縁及び頭部が円念に研磨され、断面が隅丸方形を呈している。刃部形成面所が欠損している。器面全体に擦痕が確認される。511は長軸方向に欠損し、512は短軸方向で大きく欠損し、損失部位は確認されていない。ともに胴部上半部の側縁の丸みを帯びた断面が、刃縁部にかけて鋭く尖ってくる鋸刃の刃縁であり、全体的に擦痕を有する。511が丁寧に研磨され、きれいな平坦面を有するのに対し、512は素材の凹凸面が大きく残される。513は平面観が丸ノミ状を呈し、基部側縁の断面は隅丸方形である。刃縁部の形状等は欠損のため定かでない。全体的に磨りが確認でき、特に胴部側縁部に他の擦痕とは深さや太さが異なり明瞭である。

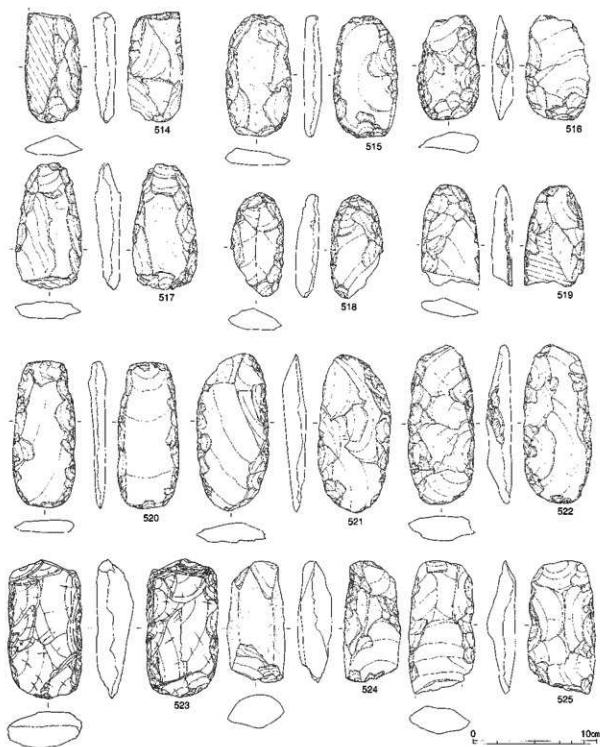
#### 打製石斧（第69～72図）

ほとんど頁岩製である。短冊形に類する資料がほとんどであり、500は分銅形、501は楕円形に比定される資料と思われる。多くが長径10cm～15cm、短径が6cm～7cm、器厚5cm程度の範囲に収まる。531・547は他より大きくかつ分厚いが、それらを除く資料は、分割あるいは粗削した薄手の剥片を素材にする打製石斧である。500は、下面の整形が粗いのに対して上面の整形が丁寧であり、刃縁部は研磨により鋭い刃が形成されている。胴部側縁の挟りには敲打による剥離面が明瞭に残され、2つの挟りを結ぶ上面中央部には磨りが確認できることから着柄痕の可能性が高い。全体的に、擦痕が確認できる。501は刃縁部が丁寧に研磨されるのに対して、胴部側縁部には大小の粗い剥離面が残されている。剥離面により整形した後、刃縁部に磨きを施したのと考えられる。上下両面の上の稜線には擦痕が確認できる。502は器厚8mm程度と極薄であり、特に刃縁部が鋭利に整形されている。下面の刃縁部周辺は、磨きにより丁寧に仕上げられている。504～510・514～523・526～532については、主要剥離面や自然面を大きく残しつつ部分的には磨きも見られる。いずれも側縁部を上・下面側もしくは一部片面側からの剥離整形により刃部形成を施してある。524は片刃もしくは両刃の磨製石斧の欠損品を素材とし、上面の大部

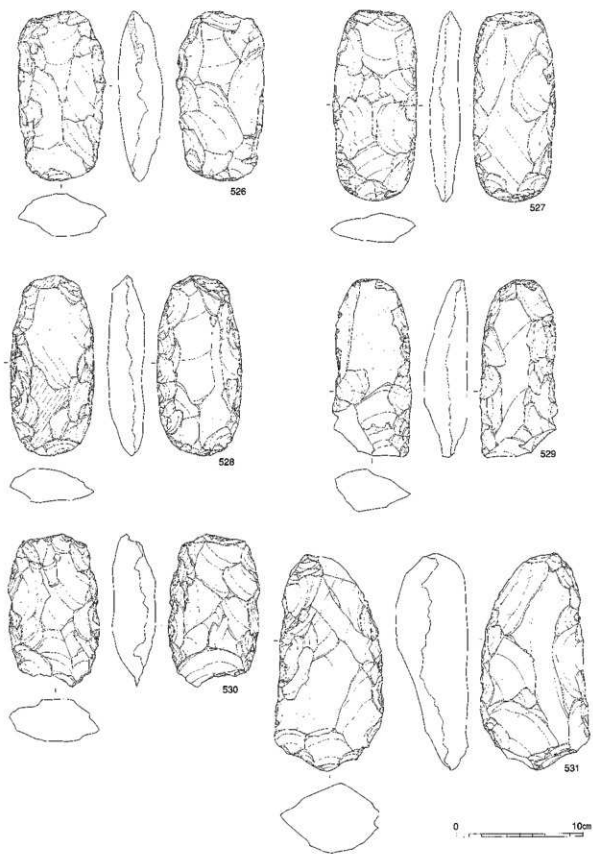
分や下面の一部に磨面が残存している。明瞭な刃部形成部位は確認できず、二次加工中途品の可能性も考えられる。525は側縁部の中央部付近において剥離による挟りが作出され着柄目的が想定されるが、自然風化による磨耗が激しく擦痕等は確認できない。530は刃縁部が丁寧に研磨されるのに対して、胴部側縁部には大小の粗い剥離面が残されている。剥離により整形した後、刃縁部に磨きを施したのと考えられ、上下両面の上の稜線には擦痕が確認できる。533は側縁部に大小の剥離面が確認できることから、打製石斧が欠損した資料と考えられる。534は上端部に切断面を有する。側縁部を微細な剥離により丁寧に仕上げ、下端部は粗めの剥離で整形してある。側縁部や下面の一部には丁寧に研磨された部分が認められる。535は左側縁部の平坦面に敲打痕が確認できる。右側縁部には剥離調整が施されており、刃縁部としての使用も想定できる。536は上面に擦痕が残されることから、破損した磨製石斧の刃縁部の剥離部位を刃部として二次利用した可能性が考えられる。上面左側縁部には、擦痕を有する挟りと右側縁部には平坦面が作出されている。自然によるものか着柄を目的としたものかは定かでない。537～545は、刃縁部に使用によると思われる刃の漬れが確認できる。538は、長軸長が6cm程度と本類資料としては極めて小さい資料である。546は下半部が欠損しているが、長軸方向に細長い器形である。残存する上端部の器厚が薄く刃部形成が確認できないことから、上端部は頭部と考えられ、下端部の刃縁部は欠損しているものと推定される。547は、長軸20cm・短軸9cm・器厚5cm程度の大形の石斧である。548は上面左側縁部に剥離による擦痕を有する明瞭な挟りが作出されているが、右側縁部には挟りが確認できず、上下両面には明瞭な着柄の痕跡は伺えない。550は、横長剥片の上端部にわずかな剥離と磨りを施して頭部とし、下端部を大まかな剥離により刃部として仕上げたものである。551は、擦痕の認められる自然面を残すもので打製石斧の破損品と思われる。両側縁部に挟りの形成が確認できる。



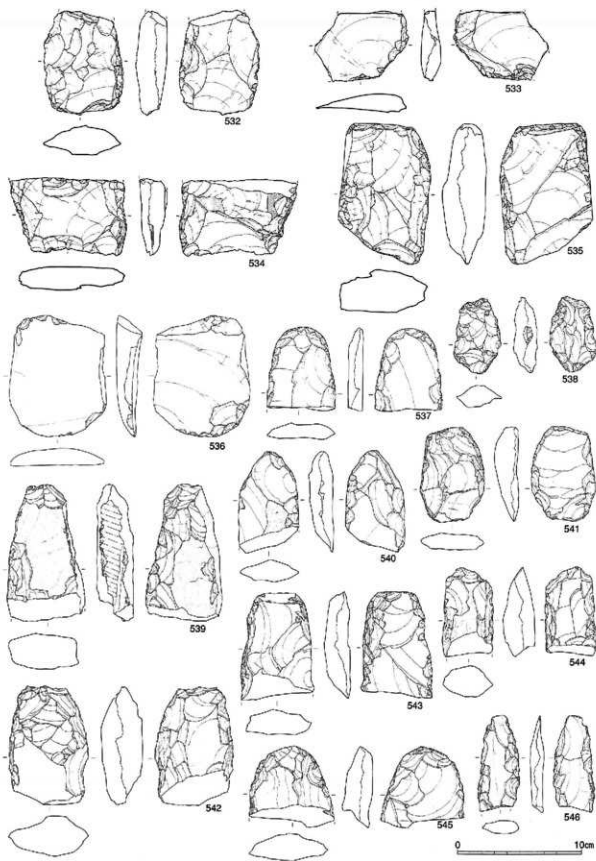
第68図 縄文時代早期出土石器13 (石斧)



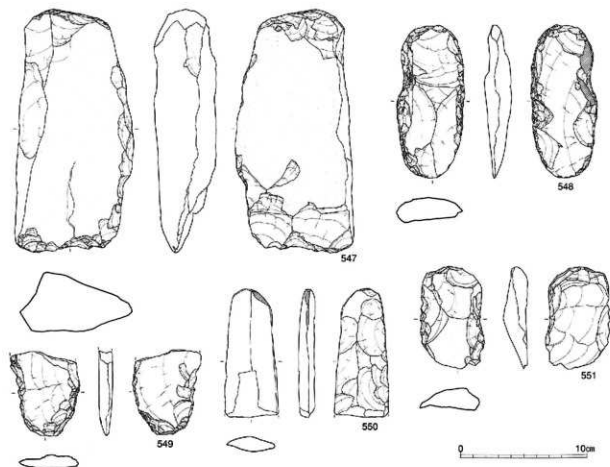
第69図 縄文時代早期出土石器14 (石斧)



第70圖 縄文時代早期出土石器15 (石斧)



第71圖 縄文時代早期出土石器16 (石斧)



第72図 縄文時代早期出土石器17 (石斧)

#### 磨石・敲石・凹石(第73~81図)

磨石や敲石・凹石については、使用痕の形態により次のように分けた。

#### I類 (第73~81図)

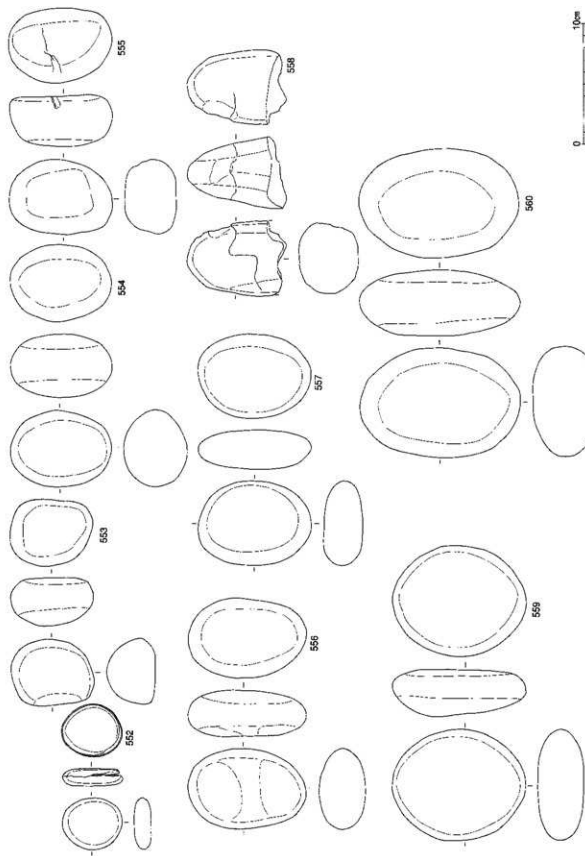
552~563・565・570~573は、全面的もしくは部分的に磨面のみを有する。砂岩製がほとんどであり、頁岩製や安山岩製、花崗岩製が少数見られる。ほとんどの資料の上面観は円形や楕円形及びその類似形を呈しているが、568は長軸側面観が三角形状で、570は上面観が台形状である。553は、側縁部一か所に磨りによる凹みがあり、使用頻度の高さが伺える。570は自然の直線的な側縁部に明瞭な磨面を有し、平坦面より側縁部の磨耗度が高い。

#### II類 (第74~81図)

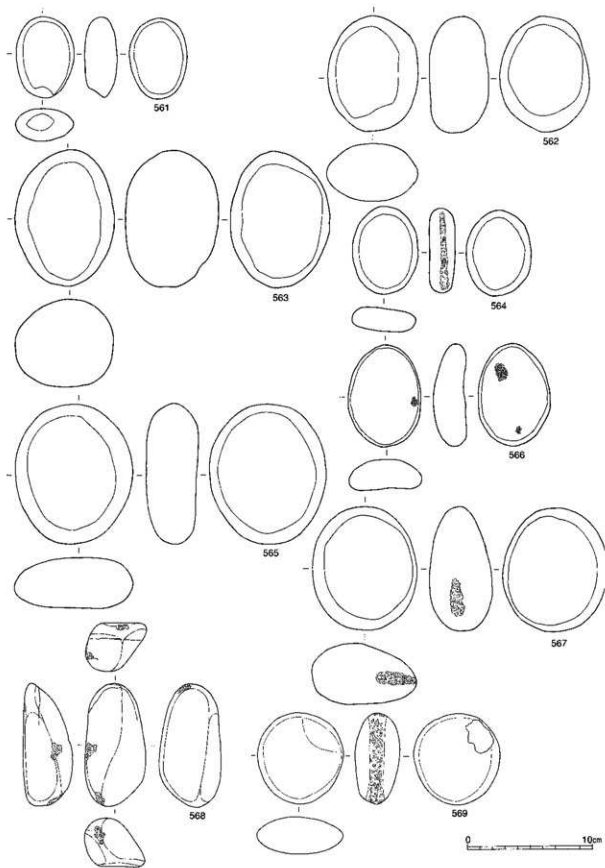
564・566~614は、全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁部に敲打痕が見られる。砂岩製が多く、ついで安山岩製や花崗岩製がある。ほとんどの資料の上面観は円形や楕円形、もしくはそれらに類する器形であるが、607が長方形状、609は三角形状、613~615は棒状を呈した上面観である。いずれの資料も、上下両面や側縁部に磨面があり、側縁部や一部平坦面に敲打痕が見られる。平坦面の中央付近に集中的な敲打による凹みを有するのが597・599・602・603・605~611・614である。特に605は幅5cm程度、深さ5mm程の顕著な凹みが見られる。

561~564・567・594・595・598~601は、攪乱で出土されたが、縄文時代早期相当として捉えた。

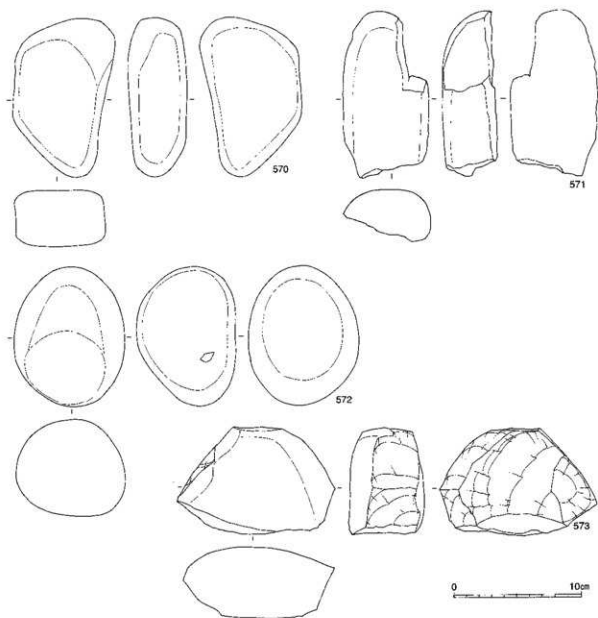




第73図 縄文時代早期出土石器18 (磨石)



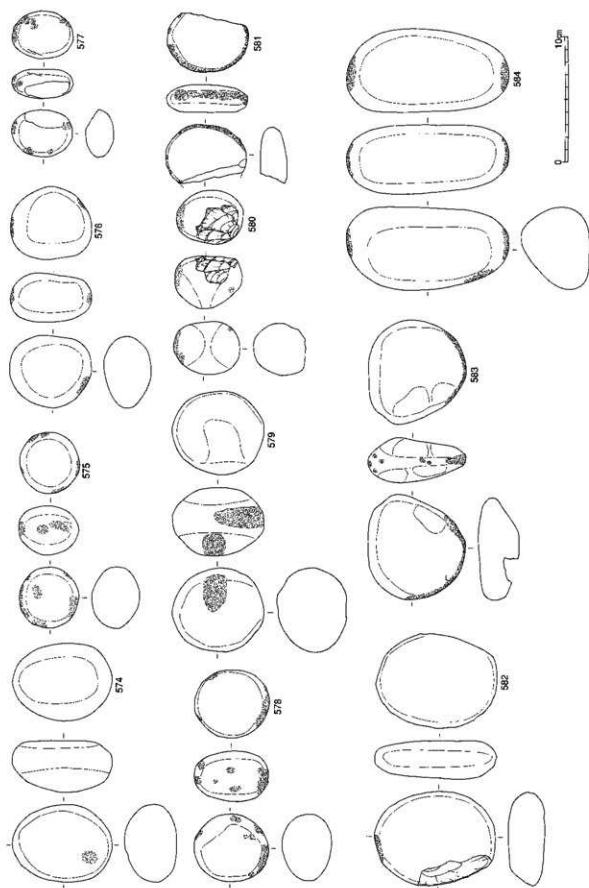
第74図 縄文時代早期出土石器19 (磨石・敲石)



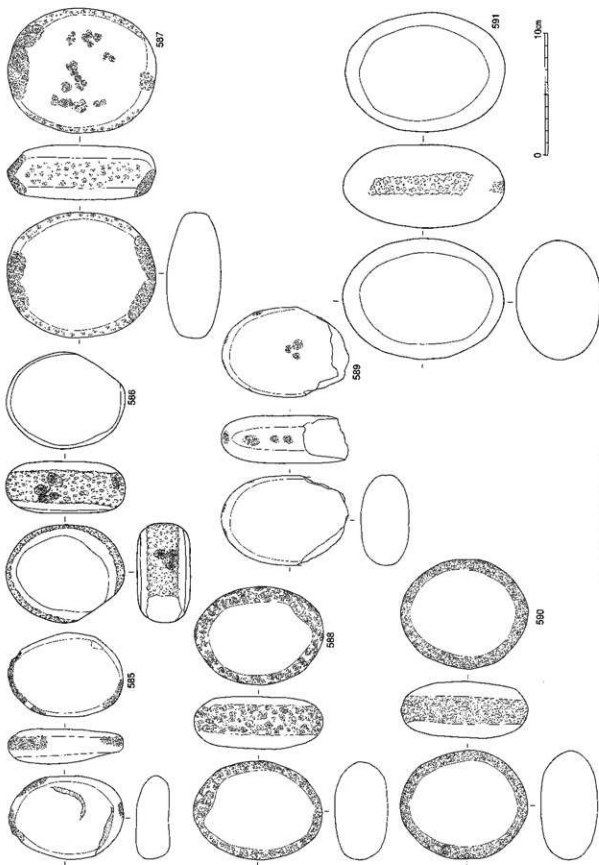
第75図 縄文時代早期出土石器20（磨石）

第23表 石斧整形剥片観察表

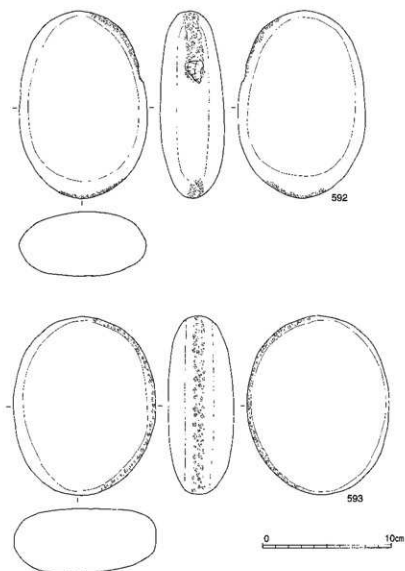
插图番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第65図	457	D-6	IV	頁岩	7.1	7.1	1.9	83.3	
	458	B-1	V	頁岩	6.1	4.9	0.6	24.8	TR
	459	K-5	V	頁岩	4.9	5.2	5.0	22.2	
	460	J-4	V	頁岩	8.2	5.2	1.3	49.9	
	461	B-1	V	頁岩	5.9	4.0	1.1	40.1	TR
	462	J-4	IV	頁岩	4.0	2.0	0.6	4.6	
	463		III	頁岩	2.1	2.8	0.3	1.1	
	464	L-5	V	頁岩	5.3	11.8	1.1	101.8	
	465	C-1	V	頁岩	6.0	8.2	0.9	57.9	
	466		I	頁岩	3.6	8.9	1.5	37.4	
	467		I	頁岩	5.0	9.7	1.1	43.0	
	468		I	頁岩	2.3	5.8	0.9	9.0	
	469		I	頁岩	11.0	5.5	1.1	46.6	



第76図 縄文時代早期出土石器21 (磨石・敲石)



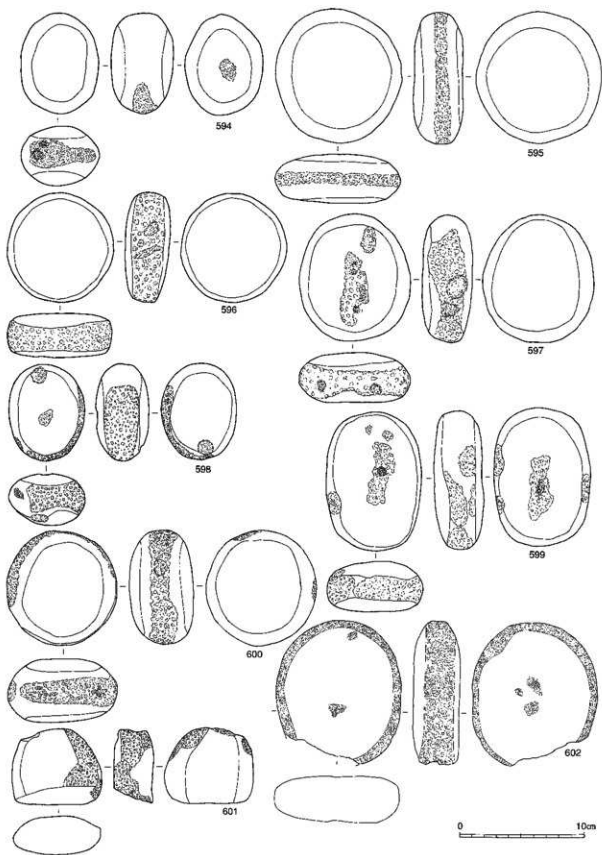
第77図 縄文時代早期出土石器22 (磨石・敲石)



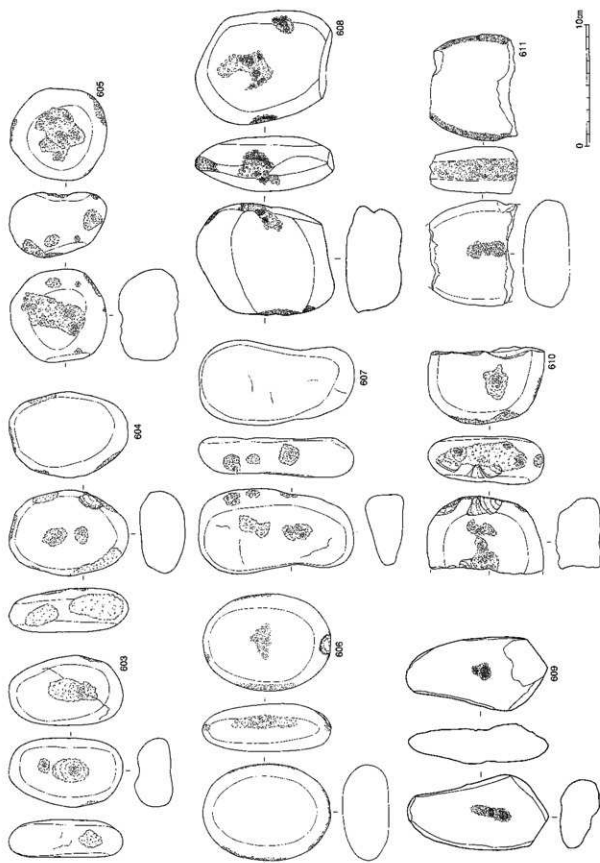
第78図 縄文時代早期出土石器23 (磨石)

第24表 石斧整形剥片観察表

種別 番号	遺物 番号	出土区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
第65 図	470		I	頁岩	8.9	3.3	1.2	37.6	
	471	J-4	V	頁岩	6.8	4.4	0.9	29.5	
	472	K-4	V	頁岩	8.9	5.2	1.4	67.3	
	473	K-5	V	頁岩	3.4	5.3	0.6	11.4	
	474	K-4	V	頁岩	9.9	7.5	1.7	101.2	
	475	K-3	V	頁岩	2.9	5.0	0.8	11.1	
	476	J-4	V	頁岩	9.9	5.2	1.1	50.0	
	477	J-4	V	頁岩	8.2	5.2	1.2	33.7	
	478	J-4	V	頁岩	7.6	7.0	1.7	69.5	
	479	J-4	V	頁岩	8.5	4.6	1.2	41.0	
	480	C-1	V	頁岩	5.6	3.7	1.1	27.1	
	481	K-4	V	頁岩	10.0	3.7	1.3	38.9	
	第66 図	482	K-3	V	頁岩	7.0	4.4	8.5	23.6
483		C-5	IV	頁岩	12.9	7.3	3.4	382.0	
484			I	頁岩	9.8	5.7	1.0	60.0	
485		K-3	V	頁岩	10.1	4.6	1.3	51.9	
486		L-4	IV	頁岩	3.5	4.9	0.8	12.64	
487		K-3	IV	頁岩	8.2	3.5	1.0	31.8	
488		L-4	IV	頁岩	8.9	5.1	1.0	45.4	
489		K-3	IV	頁岩	7.8	5.7	1.0	55.9	
490		K-4	IV	頁岩	9.4	5.1	1.4	73.7	

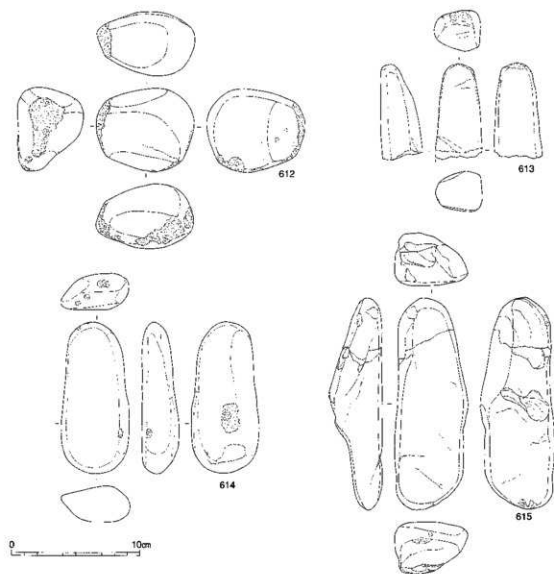


第79図 縄文時代早期出土石器24 (磨石・敲石・凹石)



第80図 縄文時代早期出土石器25 (磨石・敲石・凹石)





第81図 縄文時代早期出土石器26（磨石・敲石・凹石）

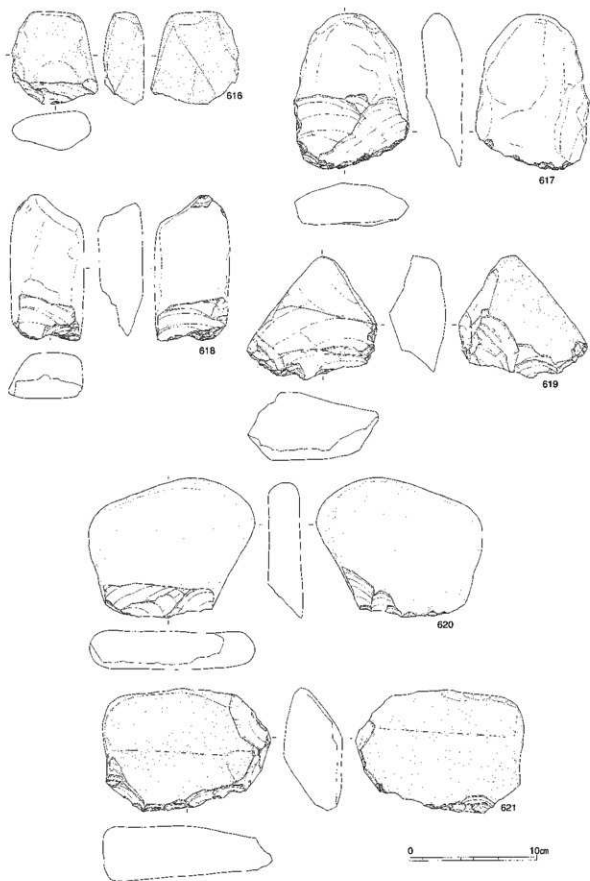
石器（第82・83図）

いずれも自然面を多く残す礫を素材とするもので、616～618は、縦長で下面に粗い剥離が認められる。619は片面のみ自然面を残す三角形状である。620・621は横長である。620は下面に、621は下面及び側縁部に剥離が認められる。622～625は不正形な自然礫に大きな剥離を施し刃部とするものである。626は下面に剥離が認められる。

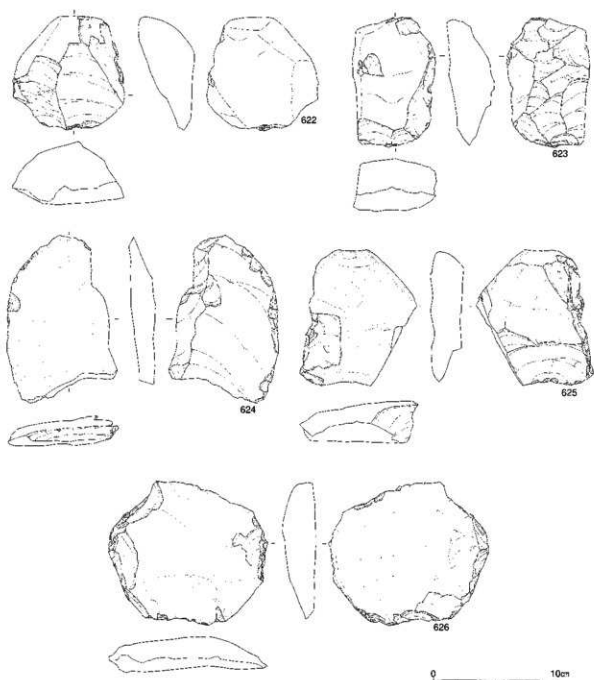
石皿（第84図・85図）

砂岩質が多く、ついで火山岩が多い。平坦面が使用

のため磨滅し凹んだものが627・629・632であり、磨面はあるがほとんど凹みが見られないのが628・630・631・633～638である。欠損していない面に関しては、いずれの石皿にも磨面が見られる。628については、平坦面に敲打された痕跡が多数残されている。631と634、633と635は石材の種類や素材石の器厚、使用痕の状態からそれぞれ同一個体だと考えられる。また、631・634は被熱により赤く変色し、631は煤も付着している。



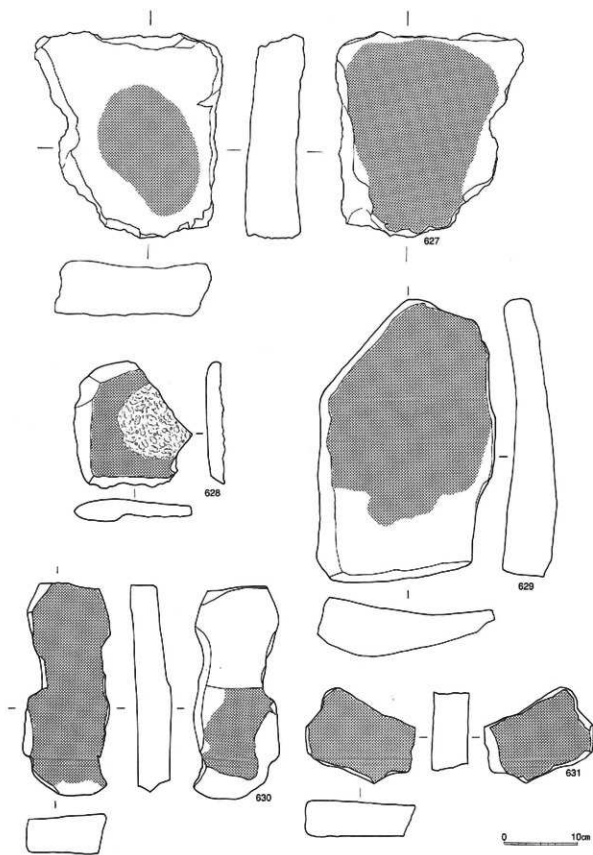
第82図 縄文時代早期出土石器27 (碟器)



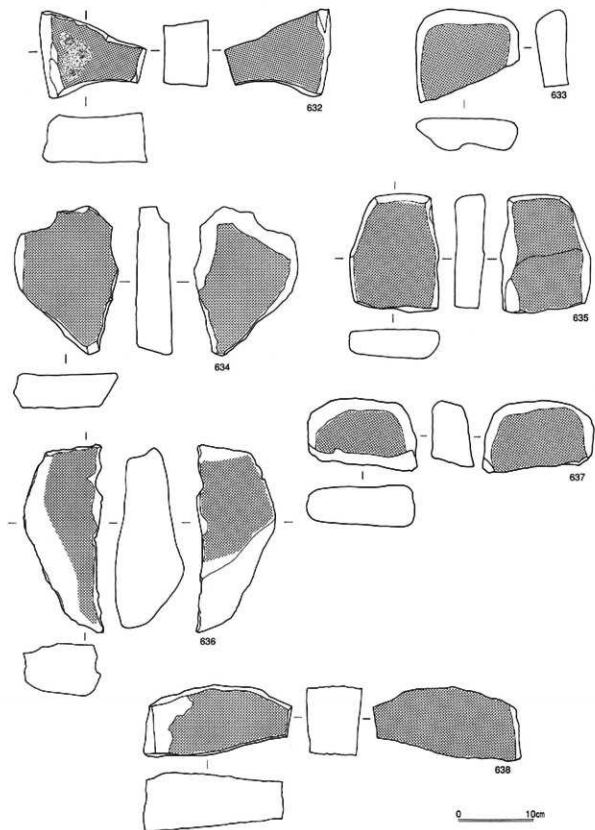
第83図 縄文時代早期出土石器28 (石器)

第25表 石錐・石核・スクレイパー観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第67図	491	B-6	IV	黒曜石	2.9	1.8	0.8	4.5	石錐
	492	C-1	IV	頁岩	2.2	2.8	7.5	6.7	石核
	493	J-4	V	頁岩	3.7	2.1	0.9	9.6	スクレイパー
	494	C-1	IV	頁岩	3.8	4.3	1.4	23.4	スクレイパー
	495	J-4	V	ホルンフェルス	6.5	4.9	1.3	56.4	石核
	496	C-1	IV	チャート	1.5	2.5	1.0	6.0	スクレイパー
	497		カクラン	蛋白石	3.2	3.3	1.0	11.0	スクレイパー
	498		カクラン	硬質頁岩	3.6	4.5	0.4	6.8	スクレイパー
	499		カクラン	ホルンフェルス	4.0	9.2	1.3	47.2	スクレイパー



第84図 縄文時代早期出土石器29 (石皿)



第85図 縄文時代早期出土石器30 (石皿)

第27表 石斧観察表

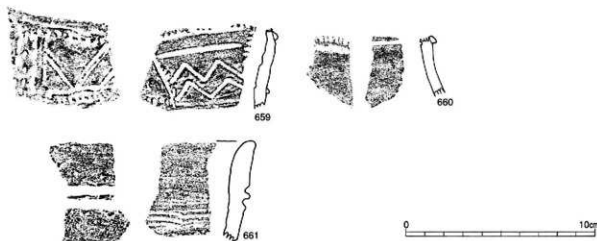
採回番号	遺物番号	出土区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第68区	500	K4	IV	頁 岩	10.7	5.7	2.3	156.3	
	501	C-3	V	頁 岩	6.8	5.1	1.4	51.2	
	502	J-4	V	頁 岩	8.0	4.3	0.8	35.8	
	503	D-8	IV	蛇 紋 岩	6.8	3.8	1.7	44.5	
	504	J-4	V	頁 岩	11.9	5.6	1.5	147.5	
	505	J-4	V	頁 岩	10.3	6.8	3.1	281.3	
	506	C-6	IV	頁 岩	13.5	6.4	3.2	355.2	
	507	J-4	IV	頁 岩	12.8	5.5	1.5	123.4	
	508	K-3	IV	頁 岩	13.5	5.8	2.2	214.5	
	509	J-4	V	頁 岩	14.8	6.3	2.4	262.2	
	510	K-5	V	頁 岩	12.3	6.8	1.7	252.6	
	511	I	I	頁 岩	11.1	2.3	2.5	83.7	磨製
	512	K-4	IV	頁 岩	6.8	6.9	2.2	130.9	
513	I	I	頁 岩	9.9	3.0	1.5	60.4	磨製	
第69区	514	K-3	IV	頁 岩	9.2	4.6	1.8	85.7	
	515	K-3	IV	頁 岩	10.2	5.3	1.3	104.4	
	516	K-4	V	頁 岩	8.7	5.1	1.6	88.9	
	517	K-4	V	頁 岩	10.5	5.3	1.5	122.1	
	518	K-4	IV	頁 岩	8.7	4.4	1.9	73.1	
	519	J-4	V	頁 岩	8.6	4.8	1.7	75.5	
	520	J-1	V	頁 岩	12.3	5.1	1.5	102.3	
	521	K-3	IV	頁 岩	13.1	5.9	1.9	145.8	
	522	K-4	V	頁 岩	13.2	5.6	2.1	185.4	
	523	3T	V	頁 岩	11.6	6.0	3.1	252.0	
	524	K-3	V	頁 岩	10.2	4.7	2.7	162.5	
	525	K-5	V	頁 岩	11.0	5.5	2.3	139.4	
	第70区	526	J-4	V	頁 岩	13.8	6.9	3.6	378.0
527		K-4	V	頁 岩	15.4	5.6	2.3	295.8	
528		K-5	V	頁 岩	14.5	6.6	2.8	342.0	
529		K-4	V	頁 岩	14.2	6.3	3.5	330.6	
530		K-4	IV	頁 岩	12.2	7.3	3.4	345.0	
531		K-3	V	頁 岩	17.3	8.6	5.5	900.0	
532		K-5	IV	頁 岩	8.7	6.5	2.6	164.0	
第71区	533	3T	IV	頁 岩	5.8	7.7	1.7	69.1	
	534	K-4	V	頁 岩	6.5	9.5	2.2	168.0	
	535	B-5	IV	頁 岩	11.7	7.6	3.6	400.0	
	536	K-3	V	砂 岩	10.2	7.8	1.4	219.4	
	537	K-3	IV	頁 岩	6.7	5.5	1.3	63.3	
	538	K-3	V	頁 岩	6.2	3.7	1.3	48.2	
	539	K-5	V	頁 岩	11.4	6.2	3.0	289.3	
	540	J-5	V	頁 岩	8.0	4.8	1.7	82.8	
	541	K-4	IV	頁 岩	7.8	5.2	1.3	89.2	
	542	K-3	IV	頁 岩	9.9	6.4	3.4	245.0	
	543	K-4	V	頁 岩	8.6	5.6	2.1	134.0	
第72区	544	C-1	V	頁 岩	7.3	4.1	2.6	92.8	
	545	3T	V	頁 岩	6.2	6.8	2.2	107.7	100 (3T)
	546	J-4	IV	頁 岩	7.5	3.3	1.1	34.2	
	547		カクラン	頁 岩	19.6	9.4	4.9	1045.0	
	548		カクラン	頁 岩	12.4	5.4	2.2	141.2	
	549		カクラン	頁 岩	6.8	5.4	1.1	49.2	
	550		カクラン	頁 岩	10.3	4.3	1.4	75.4	
	551		カクラン	頁 岩	8.2	5.2	1.8	86.8	

第28表 磨石観察表

採回番号	遺物番号	出土区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第73区	552	J-4	V	砂 岩	4.9	4.4	1.5	40.0	
	553	K-4	V	砂 岩	6.7	5.6	4.0	225.0	
	554	K-4	V	砂 岩	8.3	6.4	5.3	400.0	
	555	K-4	V	砂 岩	8.4	6.2	4.3	310.0	
	556	K-4	V	砂 岩	9.7	6.7	3.8	382.0	
	557	B-2	V	頁 岩	9.3	7.0	3.2	315.0	
	558	K-4	V	安山岩	7.9	6.3	4.8	355.0	
	559	K-4	V	安山岩	11.1	9.2	3.7	670.0	
	560	C-1		安山岩	13.3	9.1	5.9	1040.0	



第86圖 IX類土器



第87図 X類・XI類土器

### 3 縄文時代前・中・後期の調査

#### (1) 遺構

遺構は、検出されなかった。

#### (2) 遺物 (第86～89図)

遺物は、土器、石製の石器が出土している。

#### 土器 (第86～87図)

##### Ⅹ類土器 (第86図)

639～643は、口縁部資料である。639は口縁部が大きく外反し、640～643は外反が小さい。639～643には、口唇部に棒状工具による1条の刺突列点文が施文されている。639～643は口縁部に棒状または篋状工具による横位の沈線を4条から5条施している。639及び640は口縁部内面において、外面と同様に4条から5条ほどの横位の沈線を施し、641～643については口縁部内面に篋状工具による列点状の刺突を横方向に施文してある。

内面調整は、いずれもケズリ後ナデである。644～658は胴部の破片資料であるが、篋状工具による横位や縦位、斜位の直線的な沈線を中心に一部曲線を組み合わせて羽状文や縦列横線文、複合文などを構成している。器壁は薄く、ケズリ後丁寧にナデ消しが施されている。胎土の状態は、礫が殆ど含まれず、滑石が混入している。

##### X類土器 (第87図)

659・660は口唇部を欠損しているが、残存する文様形態から口縁部から頸部に至る資料と推定される。

659は、粘土紐を貼付することによって矩形的文様帯の枠組みを構成し、棒状(篋状)工具による連点や沈線で幾何学的な文様を形成している。内面も外面と同様な施文法により、連点文や鋸歯文等を施してある。660には、連点による刻み状の跡を残す粘土紐が貼付してある。ともに、内面をケズリ後ナデ調整し、仕上

がりが丁寧に器壁は大変薄い。胎土は、砂粒や礫が殆ど含まれず緻密である。

##### XⅠ類土器 (第87図)

661が本類に該当する。直行ないし緩やかに外反する口縁部の資料と思われる。

口唇部の断面観は、外面側は直行し内面側は弧を描きながら口唇部外端部にいたる半月円弧状である。篋状工具による太目の横位の沈線が2条平行に施されている。

内外面ともに丁寧にケズリ後ナデ調整を施しているが、口縁部内面下部には貝殻条痕が確認できる。

##### 石器 (第88～89図)

石器は、Ⅱ・Ⅲ層内において、石鏃4点、石槍3点が出土している。

##### 石鏃 (第88図)

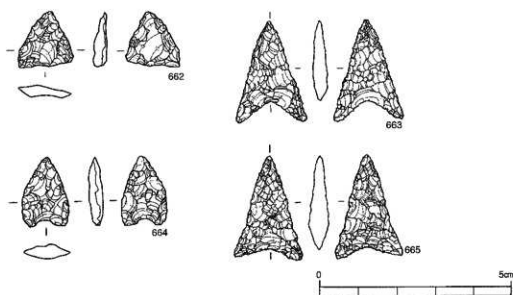
662は、形状がほぼ正三角形を呈し、基部は平坦でありⅠ類に属する。663・665は縦長の三角形状で、浅い抉りが施され、Ⅴ類に属する。664はほぼ五角形状を呈し、浅い抉りが施され、Ⅳ類に属する。

##### 石槍 (第89図)

666は頁岩製で縦長刺片を使用し、両側縁部を両面側から細かく剥離調整し形を整えてある。また、使用痕を有している。

667は頁岩製であり、両側縁を両面側からの細かな剥離により丁寧に調整加工してある。上面観がきれいな三角形形状を呈し、基部が欠損している。

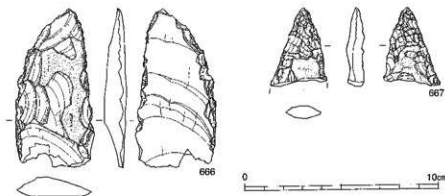




第88図 II層・Ⅲ層出土石鏃

第29表 磨石・敲石観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第74図	561	カクラン	砂岩	6.5	4.5	2.5	100.0		
	562	カクラン	砂岩	9.3	11.2	4.7	480.0		
	563	カクラン	砂岩	11.1	7.9	7.1	842.0		
	564	カクラン	砂岩	7.1	5.1	1.9	106.0		
	565	カクラン	花崗岩	11.4	9.9	4.1	635.0		
	566	カクラン	安山岩	8.2	5.8	2.4	165.0		
	567	カクラン	砂岩	10.0	8.3	5.0	528.0		
	568	C-7	Ⅳ	砂岩	10.0	4.8	4.0	220.0	敲石
	569	K-4	Ⅴ	砂岩	7.5	6.9	3.1	260.0	
	第75図	570	C-6	Ⅳ	砂岩	12.8	7.6	4.6	730.0
571		K-4	Ⅴ	安山岩	13.1	6.7	4.1	500.0	
572			Ⅰ	砂岩	11.3	8.6	8.0	995.0	表採
573		J-4	Ⅴ	砂岩	8.6	12.0	5.7	850.0	
574		K-4	Ⅴ	砂岩	7.9	6.2	4.1	335.0	
第76図	575	J-3	Ⅳ	花崗岩	4.7	4.9	3.9	120.0	
	576	K-3	Ⅳ	砂岩	6.4	5.7	3.8	200.0	
	577	J-5	Ⅴ	砂岩	4.8	3.8	2.2	50.0	
	578	J-4	Ⅴ	安山岩	5.9	5.4	3.9	175.0	
	579	K-4	Ⅳ	安山岩	7.2	6.7	5.5	340.0	
	580	J-4	Ⅴ	安山岩	5.2	4.2	4.2	125.0	
	581	K-4	Ⅴ	砂岩	6.3	4.6	2.1	83.0	
	582	3T	Ⅳ	安山岩	9.6	7.5	2.9	320.0	
	583	J-5	Ⅴ	砂岩	7.7	8.3	3.2	240.0	
	584	L-4	Ⅳ	砂岩	12.8	6.6	5.4	675.0	
第77図	585	K-4	Ⅴ	砂岩	9.3	6.8	2.8	250.0	
	586	B-5	Ⅳ	砂岩	9.4	8.1	4.2	485.0	
	587	B-6	Ⅴ	砂岩	11.9	10.3	4.4	862.0	
	588	3T	Ⅳ	安山岩	10.5	8.1	4.3	548.0	
	589	K-3	Ⅳ	安山岩	10.3	7.4	3.9	460.0	
	590	J-4	Ⅳ	花崗岩	10.5	8.9	4.5	605.0	
	591			砂岩	12.8	9.8	6.7	1155.0	
	592	K-3	Ⅴ	花崗岩	15.1	10.0	5.2	1090.0	
	593	J-4	Ⅴ	安山岩	14.4	11.2	5.2	1330.0	



第89図 Ⅱ層出土石器

第30表 磨石・敲石・凹石観察表

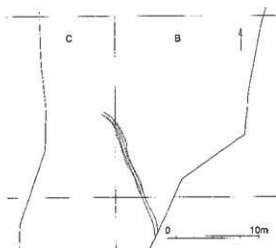
採出 番号	遺物 番号	出村区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第79 回	594		V	安山岩	8.3	6.2	5.1	365.0	
	595		V	安山岩	11.0	10.1	4.0	690.0	
	596		I	安山岩	9.1	8.5	3.1	425.0	
	597		IV	花崗岩	10.5	8.9	4.2	575.0	
	598		V	砂岩	7.9	6.1	4.3	280.0	
	599		V	砂岩	11.4	7.7	4.1	560.0	
	600		V	安山岩	9.5	8.8	5.3	670.0	
	601		V	安山岩	6.3	7.1	3.2	225.0	凹石
	602		V	安山岩	11.7	10.0	3.9	825.0	
	603	3T	V	砂岩	9.3	5.7	3.1	240.0	凹石
第80 回	604	J-4	V	安山岩	9.8	7.1	3.6	365.0	
	605	C-6	IV	安山岩	7.8	7.5	4.9	430.0	凹石
	606	C-6	IV	安山岩	10.4	8.0	3.9	475.0	
	607	K-5	V	砂岩	12.7	6.9	3.1	362.0	凹石
	608		I	砂岩	10.4	9.0	4.4	595.0	凹石
	609		I	砂岩	11.3	6.1	3.1	315.0	凹石
	610	L-3	IV	安山岩	9.4	6.0	3.6	340.0	凹石
	611	J-3	IV	安山岩	6.8	8.7	3.8	350.0	
	612	J-4	V	砂岩	6.7	7.8	5.2	325.0	
	613	L-4	V	砂岩	7.6	3.7	3.2	120.0	凹石
第81 回	614	J-4	V	砂岩	12.2	5.4	3.0	250.0	
	615	D-2	V	砂岩	17.0	5.7	4.3	465.0	

第31表 礫器観察表

採出 番号	遺物 番号	出上区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第82 回	616	K-3	V	頁岩	7.5	6.4	3.1	200.0	
	617	K-4	V	頁岩	12.6	8.9	2.9	420.0	
	618	K-5	V	頁岩	11.8	5.8	3.5	340.0	
	619	J-4	V	頁岩	9.5	10.0	4.4	460.0	
	620	J-4	V	砂岩	10.8	13.0	2.7	714.0	
	621	B-6	V	砂岩	9.7	13.3	4.4	760.0	
第83 回	622	C-1	IV	頁岩	9.4	9.1	4.1	427.0	
	623	C-1	V	頁岩	10.6	6.8	3.5	350.0	
	624	C-7	IV	砂岩	12.8	8.3	2.0	260.0	
	625	C-1	IV	頁岩	11.3	8.8	2.6	395.0	
	626	B-2	IV	頁岩	11.4	13.0	2.7	445.0	

第32表 石皿観察表

採出 番号	遺物 番号	出村区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第84 回	627	B-2	IV	安山岩	27.0	25.5	7.3	6700.0	
	628	C-1	V	安山岩	16.7	20.0	3.0	650.0	
	629	J-4	V	砂岩	38.2	24.7	8.0	8900.0	
	630	J-3	V	砂岩	28.5	11.5	0.6	2750.0	
	631	J-1	V	砂岩	11.0	17.5	4.8	1354.0	
	632	K-4	IV	砂岩	11.7	14.2	6.6	1410.0	
第85 回	633	C-5	IV	砂岩	11.6	13.7	4.4	1016.0	
	634	J-5	V	砂岩	20.0	13.8	4.9	1662.0	
	635	C-5	IV	砂岩	16.0	12.1	3.1	1440.0	
	636		溝内出土	安山岩	25.4	10.2	6.7	1765.0	
	637	K-5	IV	安山岩	9.0	14.5	5.5	1232.0	
	638	K-4	V	砂岩	9.4	19.2	7.3	2400.0	



第90図 古道遺構



第91図 中世・近世遺構配置図

#### 4 中・近世の調査

##### (1) 遺構 (第90図)

遺構では、古道と思われる溝が検出された。

##### 古道遺構 (第90図)

中・近世の時期と考えられる古道がⅢ層上面に検出された。B-7区から古道が北北西方向に1.5mほどのびた地点で暗黒褐色土の埋土がみられ、幅約0.5-

0.8m、厚さ3cm程度の相長い硬化面が検出された。山の斜面に位置し、山の麓と頂上をつなぐ古道と推定される。

##### (2) 遺物

掘り込み内には、土師器の破片が数点出土したが、小破片のため図化できない。また、時期確定も難しい。

第33表 K類土器観察表

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	胎土	その他				
	639			黄褐色	黄褐色			○	○	良	横位沈線文	ケズリ後ナデ	
	640			灰オリーブ色	灰オリーブ色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	641			黄褐色	黄灰色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	642	カ77		明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	643			明赤褐色	明赤褐色			○	○	良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	644			黄褐色	黄褐色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	645			黄褐色	黄灰色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	646			黄褐色	浅黄色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	647			黄褐色	黄灰色	○				良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	648	カ77		カ77強色	カ77弱色			○	○	良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	649			明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	650			灰オリーブ色	灰オリーブ色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	651			明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	652	C-1		明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	653			褐色	褐色			○	○	良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	654			黄褐色	黄褐色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	655			灰オリーブ色	灰オリーブ色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	656	2 T	Ⅲ	灰オリーブ色	黄褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	657	2 T	Ⅲ	褐色	褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	658	カ77		赤褐色	灰オリーブ色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	

第34表 X類土器観察表

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	胎土	その他				
第87図	659	2 T	ⅡC	黄褐色	黄褐色			○	○	良	短沈線文	ケズリ後ナデ	
	660	2 T	Ⅲ	黄褐色	黄褐色	○	○			良	短沈線文	ケズリ後ナデ	

第35表 XI類土器観察表

検出 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 上		焼成	外 面	内 面	備 考
				外	内	石英長石	胎上				
874	659	2T	II C	黄褐色	黄褐色	○	○	良	短沈線文		ケズリ後ナデ

第36表 II・III層出土石器観察表

検出 番号	遺物 番号	出土区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第 88 ・ 89 団	662	B-2	III	黒 曜 石	1.4	1.4	0.3	0.5	石鏃
	663	2T	II	頁 岩	2.7	1.7	0.3	1.0	石鏃
	664	B-2	III	蛋 白 石	1.8	1.5	0.3	0.7	石鏃
	665	2T	III	黒 曜 石	2.7	1.8	0.5	1.2	石鏃
	666	3T	III	頁 岩	8.4	4.1	1.0	35.5	石槍
	667	B-2	III	頁 岩	3.8	3.0	0.7	7.5	石鏃

## 第3節 小 結

窪見ノ上遺跡では、1地点・2地点に分けて調査をしたが、出土した土器は縄文時代が主体である。縄文時代の土器は11類に分類され、表にまとめた。

2地点においては縄文時代早期の最古段階と思われる土器（I類土器）が多く出土したため、I類土器について若干の考察を試みた。

## 縄文時代土器分類表

分類	項 目	概 要
I類 13～186	器 形	口縁部が、ほぼ直線的に立ち上がる円筒形を基本とする。底部は平底である。
	文 様	口唇部及び口縁部下に貝殻腹縁による連続刺突文をめぐらす。円筒土器の一部には、口縁部下文様の下に貝殻腹縁による刺突文を網目状に施すものもある。胴部はほぼ全面に斜位（一部横位）の貝殻条痕を施し、底端部には縦位の連続刺突文をめぐらす。
	口唇部形態 土器型式名	外面が高く内面が低い形態のものが多く、平坦なものもみられる。 岩板式土器
II類 187～202	器 形	器形は、円筒形と角筒形が存在する。円筒形は、口縁部から底部に至るまで直線的な胴部を有し、口縁部が直立あるいは緩やかに外傾もしくは内湾している。底部は平底である。
	文 様	口唇部には連続した浅い刻みを施す。口縁部下に貝殻腹縁部による横位の刺突文を1～2段めぐらす。その下位にクサビ形の貼付文を施すものもある。胴部を貝殻腹縁による縦位および横位の刺突文を施している。貝殻腹縁部による刺突文や貝殻背面による押圧文を組み合わせて施すものもある。
	備 考	口縁部下にクサビ形の貼付文を施すものもある。底端部には縦位の連続刺突文をめぐらす。
	土器型式名	胴部文様の貝殻刺突文に縦位と横位がある。これらを同一型式土器で扱うについてはまだ不確定要素が多い。 前平式土器～加堅山式土器
III類 203～259	器 形	口縁部が緩やかに外傾あるいは直立するもので、口縁部が山形になり2か所（推定）の瘤状突起をもつものもある。底部は平底である。
	文 様	口縁端部に連続した浅い刻みを施すものもあるが無文のものも多い。口縁部に貝殻腹縁部による刺突文を横位・縦位・斜位に施すものでそれらを組み合わせたものもある。胴部全体に綾杉状の貝殻条痕を施すものであるが、底部付近では横位の貝殻条痕となる。同様に胴部文様帯のないものもある。
	土器型式名	石板式土器

分類	項目	概 要
Ⅳ類 260～265	器形	口縁部がゆるやかに外傾あるいは直行するもので、口縁部が山形になり2か所(推定)の瘤状突起をもつものもある。 底部は平底である。
	文様	口唇部は無文である。胴部全体に貝殻敷縁による刺突文や先端の鋭利な工具による網沈線を施すものである。多くは綾杉状に施文されている。底部付近は横位の貝殻設条を施すものもある。
	上器型式名	下割序式上器
Ⅴ類 266～295	器形	口縁部が緩やかに外傾しバケツ状を呈するものである。器壁では、口縁部が最も薄い。口唇部がやや内弯意味の部分もある。 底部は平底である。
	文様	口縁部下にクシ状工具による横位の条痕を1ないし2段施し、胴部には同一施工具による鋸歯状の条痕文を施すものである。 底面には広葉樹の木葉片痕がみられるものもある。
	上器型式名	桑ノ丸式土器
Ⅵ類 296～298	器形	円筒形深鉢の平底の器形である。底部から口縁部まで、やや外反もしくは直行する。単一の文様帯で、口縁部から胴部上面に至るまで貝殻敷縁による条痕文で施文され、胴部から底部に至るまでは無文である。器面全体的に、ケズリ調整を施している。
	調整	口縁部内面はケズリ後ナデ整形を施し、胴部以下はケズリもしくはケズリ後ナデの調整である。
	土器型式名	中原式土器
Ⅶ類 299～336	器形	底部からの立ち上がりが大きく開き口縁部に至るまで直行する器形や底部から胴部まで膨らみ・口唇部でしばみ、口縁部にかけて強く外反する器形が見られる。 底部は、平底である。
	文様	施文原体を回転させて、山形押型文もしくは楕円押型文が施文される。口唇部や口縁部内面に押型文が施文されるものも見られる。
	土器型式名	押型式土器
Ⅷ類 337～339	器形	口縁部が緩やかに外傾あるいは直行するもので、口縁部が山形になり2か所(推定)の瘤状突起をもつものもある。 底部は平底である。
	文様	浅い貝殻設条を施すことにより文様効果を意識している可能性もあるが、多くは明瞭な文様をもたないものである。
	備考	無文や胴部のため、型式等は不明である。
Ⅷ類 629～658	土器型式名	
	器形	器形は円筒状で深鉢丸底が基本である。口縁部は直行あるいは外傾する。 外面のほぼ全面と、内面の一部に細い篋状、棒状施工具、あるいは槓物の某を横断した篋状の施工具を用いて、刺突文・網罟文・平行線文・綾杉文などを連続的に組み合わせる幾何学的文様を施している。
	上器型式名	曾根式土器
Ⅹ類 659～660	器形	胴部から胴部へ内傾し口縁部は内弯したキャリバー状を呈する。底部は上げ底をなす。
	文様	粘土紐をはりつけ渦文・曲線文などを形成し口縁部に刻みを施してある。はりつけた隆起部上に重点を施し、この粘土紐と共に沈線文を施し美麗な文様を構成している。 貝殻によって調整した条痕を有している。
	型式	春日式土器
Ⅺ類 661	器形	口縁部が直行するものや胴部がわずかに内傾して頭部が弱くしまり口縁部で外反するものがある。口縁は波状をなす。
	文様	口唇部は波状口縁の頂部にキザミ目を施し、裏面に渦巻文のものもある。口縁部は2本の平行線により長靴形・山形・三角形・曲線的な楕円など多彩な文様を形成する。沈線間に貝殻刺突によって擬似縄文とするものもある。文様が胴部にいたるものもある。
	型式	指宿式土器

本遺跡では、Ⅰ類土器が多数出土した。その出土状況から伺える傾向について考えてみたい。ただし、耕作による視乱や地層の横転域が多く存在したことから、

視乱層出土遺物の割合も多いことを記しておきたい。Ⅰ類土器は、ほとんどが2地点よりの出土で、分布的偏在が明白である。

グラフ1で見られるように、Ⅰ類土器はV層を中心として、Ⅱ層(チョコ層)にいたるまで出土しているが、2地点においては傾斜の強い地形と地層が盤然としていないことに由来するものと思われる。

グラフ2によって、口唇部及び口縁部の文様を分類してみると、口縁部を横位の貝殻刺突で施したものが全体の35%を占めもっとも多いが、その他は15%から10%弱程度の範囲におさまる。口縁部を横位の貝殻刺突で施した資料が量的に突出しており、他の資料には大きな量的な隔りは見られないと言えよう。

口唇部に貝殻腹面部による押圧を施し、その直下に貝殻刺突文を施した資料は、Ⅰ類土器の前段階の資料として捉えられている水迫式土器<sup>1)</sup>の特徴を残すものと考えられているものである。また、隆帯文土器からの系譜をうたわれる岩本式土器古段階<sup>2)</sup>の一部と考えられてきた横位の施文刺突の出土層を見ると、Ⅱ層出土土器形態の半分を占め、本類土器の成立期の文様形態であるとの説を補強するものとする。ただし、施文形態は横位から縦位への変化の方向性を指摘する考えもあるが、横位刺突文の文様形態資料中に占めるⅣ層出土資料が20%程度であることを考えると、本遺跡の資料では横位から縦位への文様形態の変容を捉えることはできない。本遺跡では、成立期に発生した横位の貝殻刺突文は縦位や斜位、その複合文様体を生み出しつつ、並存した可能性が高いと考える。

本遺跡におけるⅠ類土器の口唇部内面の段の有無等について考察してみたい。ただし、口唇部内面の段の有無や傾斜の緩急の分類については、各人の見方により分類の曖昧さを内包していることを記しておきたい。

Ⅱ層では段なしが最も多く、Ⅲ層段階では段が明瞭につき資料の割合が激増し、Ⅳ層段階では段ありと段なしが同程度になる。

Ⅰ類土器の古段階から新段階への形態変容のひとつとして、口唇内面の明瞭な段が次第になくなっていく方向性が述べられているが、本遺跡において、図3に見られるように時代ごとの段の有無や緩急に変容の方向性や規則性を捉えることはできなかった。

石器では、磨面や敲打痕を有する磨石・敲石・凹石

の大部分が2地点に集中して出土している。後述するように、同地点において3基の集石遺構が検出されていることとあわせて、調理場の可能性が高いと考えられる。

2地点では、早期相当層のV層から石斧整形剥片も多量に出土している。石斧の完形品も数多く見られ、完形品と剥片の石材や石質等が類似していることから、本地点は石器製作場であった可能性が高いと考えられる。また、石斧整形剥片の中には、縁辺部に調整痕をもつ資料も見受けられ、スクレイパーとしての用途を有していた可能性を指摘しておきたい。

本遺跡全体では集石遺構が6基検出されているが、いずれの集石遺構の確にも赤化が見られ、調理施設としての機能を有していたと考えられる。集石の礎数は多いところで122点であり、規模的には特に大きくはなく、礎層も厚くない。遺構としては集石遺構以外に丸みを帯びた礎(磨石)で構成される集積遺構が1基検出された。

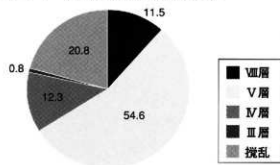
遺物の出土範囲を見てみると、Ⅱ層からⅣ層にかけての遺物は2地点に多く見られ、Ⅴ層上面から上位層については1地点に遺物出土が多く見られ、生活領域の変遷が伺える。

窪見ノ上遺跡における縄文時代の遺構としては、集石・集積遺構以外に目立った遺構等は確認されていないが、今後、農業開発総合センター遺跡群内の他の遺跡の報告書刊行等により窪見ノ上遺跡の性格がより詳細に明らかになることを期待する。

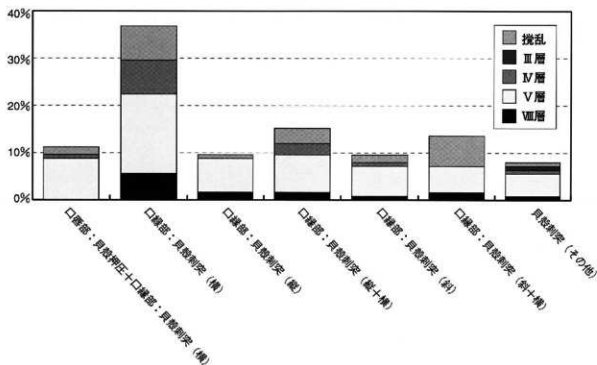
## 註

- 1) 指宿市教育委員会 2001 「水迫遺跡1」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書。(34)
- 2) 鹿嶋市教育委員会「上統川遺跡群」鹿嶋市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 3) 田代町教育委員会 2001 「ホケノ畑遺跡」田代町埋蔵文化財調査報告書
- 4) 分類表等の作成にあたり、南九州縄文研究会 2003「南九州縄文集成2 南九州貝殻文系土器Ⅱ」も参考にした。

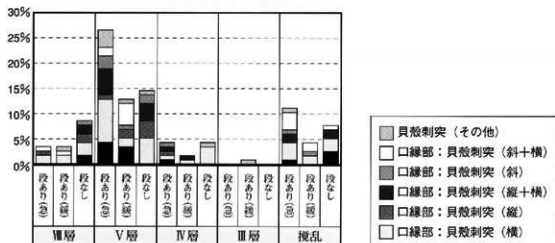
グラフ1 出土層別Ⅰ類土器出土数



グラフ2 出土層別Ⅰ類土器文様形態



グラフ3 口唇部内面の段差状況



## 第V章 建石ヶ原遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1 遺跡の立地及び調査概要

##### (1) 遺跡の立地

吹上町大字和田字建石ヶ原に所在し、農業大学校学生寮の建設地、農業開発総合センター内の幹線道路が国道と交差する国道取付部である。標高55mの台地にあり、南側は大野原台地へ続き、西側は古里遺跡と隣接し、北側は標高差23mをもって谷水田となっている。東側は、国道270号線が南北に走り、東側の台地と分断されているが、以前は一部がつながっていたと考えられる。東側の台地も広大で、その東側を堀川が流れ、現在は堀川の河岸段丘に集落が発達している。

##### (2) 調査の概要

I層(表土)は重機で掘削し、II層(黒色土)、III層(黄褐色土)を人力で掘り下げた。II層には古墳時代以降の遺物は全くなく、主となる生活面は確認できなかった。しかし、古代～中世にかけての方形周溝(竃)が検出され、当時の集落などの生活空間から離れた場所であったことが明らかとなった。

II層の下部からは、弥生時代中期の土器片が少量出

土し、当時の土坑や弥生時代終末期から古墳時代にかけての竃住居跡1基を検出している。III層上面では、中世のものと思われる溝跡が検出された。また、同じくIII層上面で南側から続く縄文時代晩期のもものと見られる遺跡が検出され、晩期の人佐式土器が出土した。アカホヤ下層のIV層では、縄文時代早期の遺物(桑ノ丸式、石器等)が出土した。更に幹線道路建設による削平が予定されている部分なので、重機でV層(黄褐色火山灰：薩摩火山灰)まで掘削し、VI層(茶褐色粘質土)から縄文時代早期の土器、石器、フレイク、チップ等が出土し、更に下層では旧石器時代の土坑が検出され、マイクロブレッドや三稜尖頭器、チップ、フレイク等が出土した。

##### 2 遺跡の層序

本遺跡の層位は、農業センター遺跡群全体の基準となっている台地部分の層位と基本的には変わらない。第3図はC-8～12区北側、C-F-10区西側、H-I-8区の西側土層断面図である。

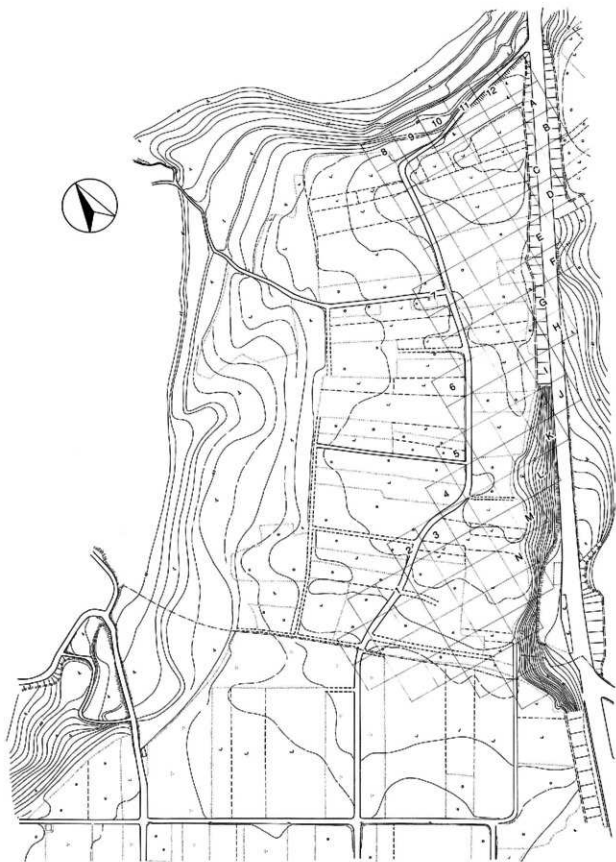
表土は、かなり攪乱されている。

遺物包含層はII-V・VI-V層で、全面調査はV層まで行い、部分的にⅢ-V層の調査を行った。下層確認はⅩ層まで行った。

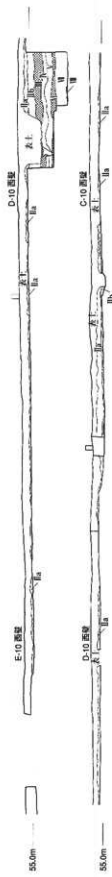
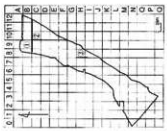
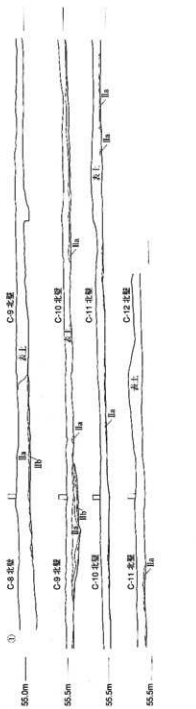


第1図 建石ヶ原遺跡位置図(1/25,000)



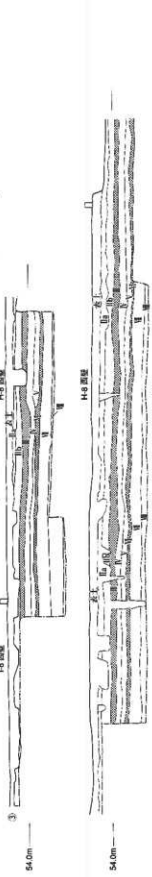


第2図 建石ヶ原遺跡地形図及びグリッド図



東丘・西郷土層断面表

層名	厚	色	質
A 1層	1.5m	黄褐色	粘土
B 1層	1.5m	黄褐色	粘土
C 1層	1.5m	黄褐色	粘土
D 1層	1.5m	黄褐色	粘土
E 1層	1.5m	黄褐色	粘土
F 1層	1.5m	黄褐色	粘土
G 1層	1.5m	黄褐色	粘土
H 1層	1.5m	黄褐色	粘土
I 1層	1.5m	黄褐色	粘土
J 1層	1.5m	黄褐色	粘土
K 1層	1.5m	黄褐色	粘土
L 1層	1.5m	黄褐色	粘土
M 1層	1.5m	黄褐色	粘土
N 1層	1.5m	黄褐色	粘土
O 1層	1.5m	黄褐色	粘土
P 1層	1.5m	黄褐色	粘土
Q 1層	1.5m	黄褐色	粘土
R 1層	1.5m	黄褐色	粘土
S 1層	1.5m	黄褐色	粘土
T 1層	1.5m	黄褐色	粘土
U 1層	1.5m	黄褐色	粘土
V 1層	1.5m	黄褐色	粘土
W 1層	1.5m	黄褐色	粘土
X 1層	1.5m	黄褐色	粘土
Y 1層	1.5m	黄褐色	粘土
Z 1層	1.5m	黄褐色	粘土



第3図 遺跡土層断面図

## 第2節 発掘調査の成果

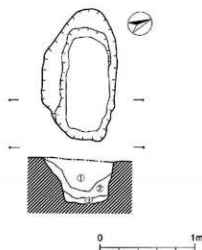
### 1 旧石器時代（Ⅶ～Ⅷ層）の調査

旧石器時代の遺構・遺物はⅦ層・Ⅷ層より出土・検出するもので、B-10-12において黒曜石・頁岩のフレイク・チップを含む石器製作址と思われるブロックが1基検出された。ブロック内には第7～8図の遺物番号1～19の石器が検出された。

#### (1) 遺構（第4図）

##### ① 土坑

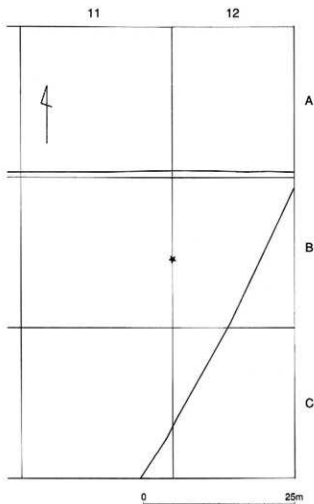
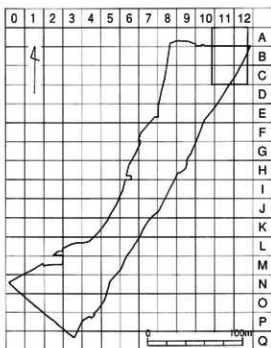
平面プランは長径138cm、短径75cmの楕円形である。深さは検出面から48cmである。各層とも遺物・炭化物は見られず壁面はしっかりしている。壁面、底面ともにピットは確認できなかったため用途は判然としない。本来の立ち上がりはⅦ層中位と考えられる。



第4図 Ⅶ層検出土坑

#### 1号土坑層序観察表

①	遺跡と同じ層位層
②	Ⅱに骨子シラス（瓦層）が混じる。粘性弱。
③	わずかに礫を混じる。Ⅱにからりシラスが混じる。粘性ほとんどなし。



第5図 Ⅶ層遺構配置図

(2) 遺物 (第7～8図 遺物番号1～19)

Ⅴ層出土の遺物総数は820点であった。出土遺物中、黒曜石製と頁岩製のチップが大半を占めた。

① 三稜尖頭器 (1～5)

1～5は上牛鼻産黒曜石製の三稜尖頭器である。いずれも厚手の剥片を素材とし、剥片を縦位に利用している。一面加工、二面加工、三面加工が存在する。1は大型の有茎三稜尖頭器で最大長5.4cm、最大幅2.35cm、厚さ1.5cm、重さ13gである。両側縁に鋸歯状の二次加工が施され、基部においては腹面への加工が認められる。

2は最大長2.7cm、最大幅1.6cm、厚さ1.2cm、重さ4gで、不純物のため欠損しており、製作途中での基部の欠損と考えられる。右側縁のみに加工が施され、顕著な稜上加工も確認される。

3は最大長3.5cm、最大幅1.3cm、厚さ1.0cm、重さ3.2gである。断面が菱形を呈する一面加工の三稜尖頭器である。右側面の一部にも簡易な鋸歯が施される。

4は最大長3.1cm、最大幅1.7cmと小型で中高の三稜

尖頭器である。厚さ1.35cm、重さ6.2cmである。基部が欠損している。

5は最大長3.5cm、最大幅1.4cm、厚さ1.35cm、重さ4.6gの二面加工の三稜尖頭器である。腹面への加工が認められる。

② 尖頭器 (6)

6は上牛鼻産の黒曜石製尖頭器である。薄手の剥片の周辺に急角度の調整を施し、先端部を作り出している。

③ 細石刃 (マイクロブレード) (7～13)

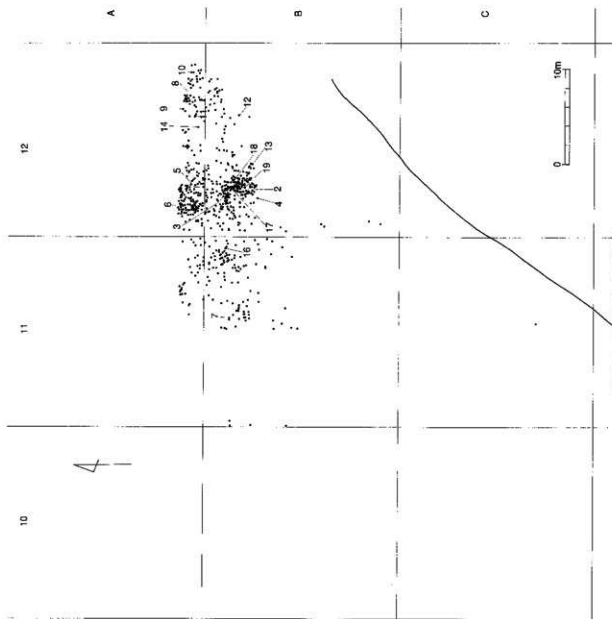
7～13は頁岩製もしくは硬質頁岩製の細石刃 (マイクロブレード) である。

7は裏面右側面の中間部に、12は表左側辺部の頭部から尾部にかけて輪浅形細部調整が見られる。また、7・9は打面を上下に転移し剥離されている。

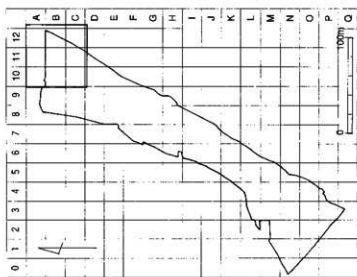
7～13は全て切断が観察できる。7・8は尾部末端部、9～12は尾部が切断されている。また、13は頭部・尾部とも切断されている。

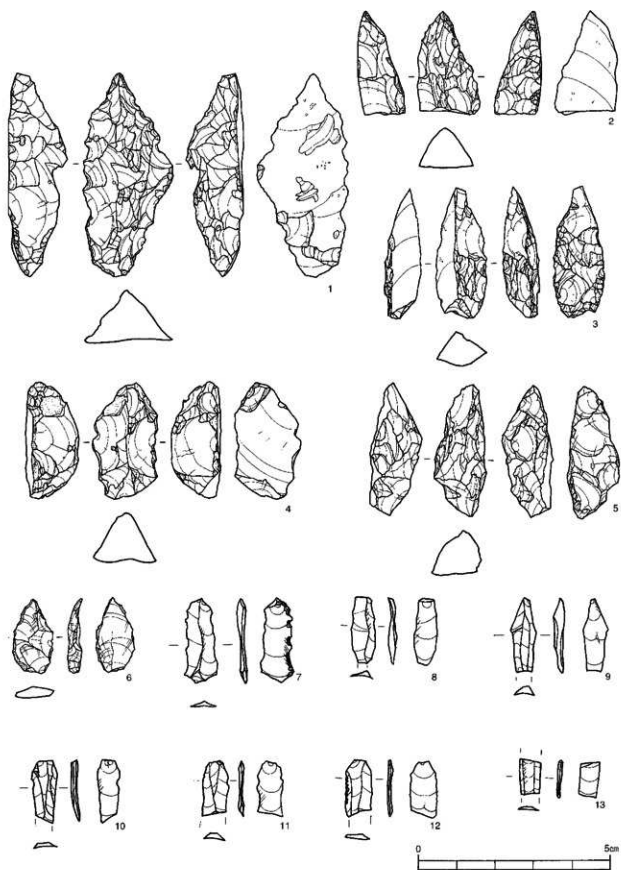
建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ		厚さ		備考
						cm	cm	cm	g	
第7図	1	Ⅴ	三稜尖頭器	H-8	黒曜石	5.4	2.4	1.5	13	上牛鼻産
	2	Ⅴ	三稜尖頭器	B-12	黒曜石	2.7	1.6	1.2	4	上牛鼻産
	3	Ⅴ	三稜尖頭器	B-12	黒曜石	3.5	1.3	1	3.2	上牛鼻産
	4	Ⅴ	三稜尖頭器	B-12	黒曜石	3.1	1.7	1.35	6.2	上牛鼻産
	5	Ⅴ	三稜尖頭器	A-12	黒曜石	3.5	1.4	1.35	4.6	上牛鼻産
	6	Ⅴ	尖頭器	B-11	黒曜石	2	1	0.4	0.6	上牛鼻産
	7	Ⅴ	細石刃	B-11	頁岩	2.3	0.9	0.15	0.4	
	8	Ⅴ	細石刃	A-12	硬質頁岩	1.8	0.7	0.2	0.17	
	9	Ⅴ	細石刃	A-12	硬質頁岩	2	0.7	0.25	0.32	
	10	Ⅴ	細石刃	A-12	硬質頁岩	1.7	0.7	0.15	0.21	
	11	Ⅴ	細石刃	A-12	硬質頁岩	1.5	0.7	0.2	0.16	
	12	Ⅴ	細石刃	B-12	硬質頁岩	1.5	0.8	0.15	0.21	
	13	Ⅴ	細石刃	B-12	硬質頁岩	1	0.6	0.1	0.06	
第8図	14	Ⅴ	石鏃	A-12	瑪瑙	3.7	1.8	0.4	2	
	15	Ⅴ	石鏃	F-8	頁岩	2.4	1.7	0.5	1.46	
	16	Ⅴ	スクレイパー	B-11	黒曜石	2	1	0.55	0.8	上牛鼻産
	17	Ⅴ	打面再生剥片	B-12	黒曜石	1.6	2.9	0.4	1	上牛鼻産
	18	Ⅴ	石核	B-12	黒曜石	1.6	1.8	2.1	4.4	上牛鼻産
	19	Ⅴ	叩石	B-12	砂岩	7	7.8	3	236	

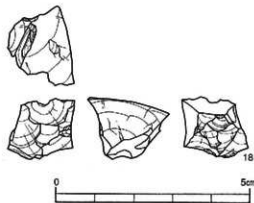
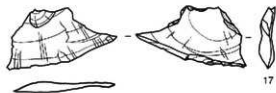
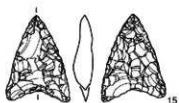
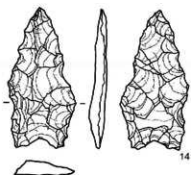


第6圖 VII層遺物出土狀況





第7图 旧石器实测图1



#### ④ 石鏃 (14・15)

14は瑪瑙製、15は頁岩製の石鏃である。

14は最大長4.2cm、最大幅2.6cmで長幅比1.61のほぼ五角形鏃である。両側面ともに鋸歯状の仕上げが見られ、基部の挟りはやや浅い。

15は最大長2.4cm、最大幅1.7cmで長幅比は1.41でほぼ三角形を呈する。鋸歯状の仕上げは見られず、挟りも浅い。

#### ⑤ スクレイパー (16)

16は上牛鼻産黒曜石製である。側縁部に二次加工が見られる為、スクレイパーに分類した。欠損面に不純物が観察されるため、製作途中で破棄したものと思われる。

#### ⑥ 打面再生剥片 (17)

17は上牛鼻産黒曜石製の石核の打面再生剥片である。剥離面から細石刃の製作の途中で、新たな打面作成を目的として生じた剥片と考えられる。

#### ⑦ 石核 (18)

18は上牛鼻産黒曜石製の石核である。打面転移が繰り返されている。

#### ⑧ 叩石 (19)

19は最大長7cm、最大幅7.8cm、厚さ3cm、重さ236gで、砂岩製である。扁平な転石を利用し、一角に使用によるつぶれが確認される。欠損品である。

第8図 旧石器実測図2

## 2 縄文時代早期（Ⅴ～Ⅳ層）の調査

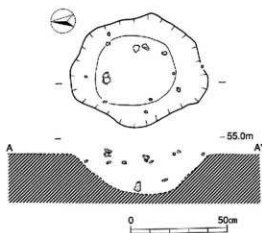
縄文時代早期は、Ⅳ層・Ⅴ層より土坑1基が検出され、土器111点、石器118点が出土した。

### (1) 遺構 (第9図)

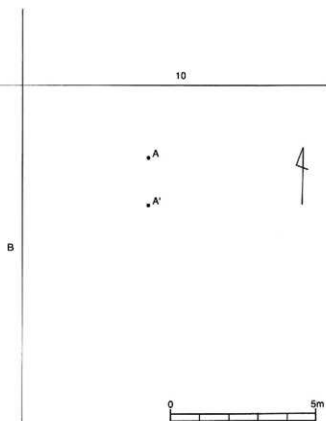
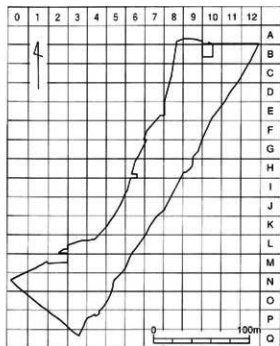
Ⅲ層上面で土坑1基を検出した。用途は判然としなかった。

#### ① 土坑

平面プランはほぼ円形で、長径71cm、短径60cmである。土器片数点と若干の炭化物が遺構内から出土し、掘り込みラインは土坑検出時には確認できなかったが、ここでは推定ラインを復元した。

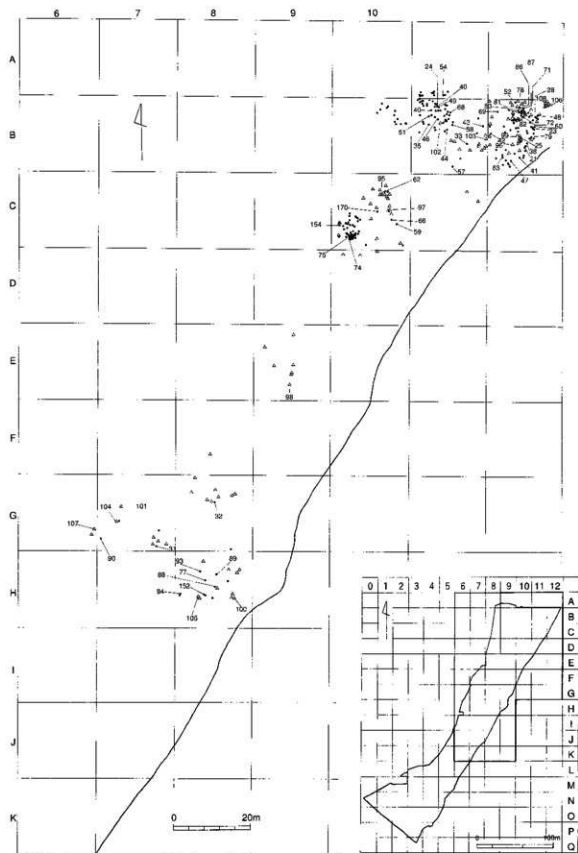


第9図 縄文時代早期土坑



第10図 縄文時代早期遺構配置図





第11図 縄文時代早期遺物出土状況

建石ヶ原遺跡 V～Ⅷ層土器分類表

分類	項目	概 要
Ⅰ類	器形	口縁部・胴部ともにほぼ直線的に立ち上がる円筒形を基本とする。
	文様	口縁部は斜位の貝殻条痕上に横位の貝殻刺突文が施される。胴部は斜位の貝殻条痕上に縦位もしくは、斜位の貝殻刺突文が施されている。更に、施文パターンがやや粗雑・簡略化し、整然さに欠けるものがある。
	調整	内面はナデおよびケズリ両方。外面はナデ。
	備考	時間的には貝殻条痕文が密→粗の編年が可能である。
	土器形式	前平式土器
	図番号	20～32
Ⅱ類	器形	円筒形・角筒形ともに底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。
	文様	円筒形のものには横位の貝殻条痕文上に流水状・直線状に貝殻条痕文が施されている。底部にかけては縦位の貝殻条痕文が施され、更に底部表面にも放射状の貝殻条痕文が施されている。角筒形のものには縦位の貝殻刺突文が口縁部を取り巻き、下位には横位の貝殻条痕文上に斜位もしくは、縦位の貝殻条痕文が施されている。
	調整	円筒形は外面ケズリ・内面ナデ。角筒形は内面に丁寧なナデ調整が見られるものがある。
	備考	底部が上げ底状のものと平坦なものがある。
	土器形式	志原頭タイプ
	図番号	33～44
Ⅲ類	器形	胴部はほぼ直線的に立ち上がる円筒形である。
	文様	斜位の貝殻条痕上に縦位2～3条もしくは斜位の2～3条の貝殻刺突文を施している。胴部貝殻刺突文は粗・密ともに観察でき、内外面の調整も文様の形状によって変化する。
	調整	内面調整は貝殻刺突文の粗なものはケズリ、密はナデ。
	備考	斜位の貝殻条痕上の貝殻刺突文の間隔が粗・密ともに観察できる。
	土器形式	加型式土器
	図番号	45～72
Ⅳ類	器形	口縁部はほぼ直線的に立ち上がる円筒形である。
	文様	口唇部にキザミ目が施され、口縁部上部に3条の横位貝殻刺突文が施されている。口縁下部には貝殻押引文が施されている。
	調整	内・外面ともナデによる調整である。
	備考	
	土器形式	吉田式土器
	図番号	73
Ⅴ類	器形	胴部はほぼ直立するが口縁部にかけては緩やかに外傾し、口縁上部は外反する。
	文様	口唇部に連続したキザミ目を施す。口縁部上に貝殻腹縁部による斜位の貝殻刺突文を施す。胴部全体に縹杉状の貝殻条痕文を施すものがあるが、瘤状の突起をもつものもある。
	調整	外面はナデによる丁寧な調整が観察できる。
	備考	胴部に貝殻条痕文が一切観察できないものもある。
	土器形式	石坂式土器
	図番号	74
Ⅵ類	器形	胴部は緩やかに外傾するが口縁部は内寄し、率を内側に傾けた形に似ている。
	文様	口縁部から胴部にかけて短い斜位の貝殻条痕が整然さに欠けるパターンで連続して施されている。施文は角度の増すものもある。
	調整	内・外面ともナデ。丁寧な調整が観察できる。
	備考	胎土はいずれも粗く、小礫を含むものが多いが内・外面とも丁寧な調整が施されている。
	土器形式	桑ノ丸式土器
	図番号	78～87
Ⅶ類	器形	胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。
	文様	縦位の貝殻条痕文が施されているものと、貝殻刺突文のみが施されているものとに分類できる。
	調整	外面はナデによる丁寧な調整が観察できる。
	備考	
	土器形式	分類不能
	図番号	88～94

## (2) 遺物

出土状況から、Ⅳ～Ⅴ層は早期の遺物を中心である。それぞれ土器は同番種ごとにⅠ～Ⅴ類まで分類を試みた。

### Ⅰ類 (第12図 20～32)

20は口縁部である。直行する形で立ち上がる。斜位の貝殻条痕上に横位の貝殻刺突文が施される円筒であるが、口唇部付近にキザミ目は施されていない。21～32は同じく円筒の胴部である。21～28は太口の斜位の貝殻条痕上に、縦位もしくは斜位の貝殻刺突文が連点状に施されている。29は横位の貝殻条痕上に縦位の沈線文が施されている。30～32は貝殻条痕がやや粗雑・簡略化している。

### Ⅱ類 (第13図 33～44)

33～37は円筒胴部、38～42は円筒底部、43は角筒口縁部、44は角筒胴部である。

33～37は横位の貝殻条痕文上に流水状、もしくは点線的な貝殻条痕文を重ねる。36・37は斜位の貝殻条痕文がやや粗に施され、その上に直線的な貝殻条痕文が重ねられている。38～42は底部にかけて、縦位の貝殻条痕文が施され、39は更に底面に放射状に貝殻条痕文が施されている。また、38・42は底面が平坦であるのに対し、39・40は底面側面付近が上げ底状になり、41は中央部に向かって上げ底状になっている。43は角筒口縁部だが、口縁部上部に横位の貝殻刺突文が施され、その下に横位の貝殻刺突文が施される。更に胴部にかけて、縦位の貝殻条痕状に直線状の貝殻沈線文が施される。

### Ⅲ類 (第14・15図 45～72)

加深山式土器の円筒が45～66、角筒が67～72である。内面の調整で顕著な特徴は貝殻刺突文の粗なものほどケズリが観察され、密なものほどナデが観察される。胴部文様は斜位の貝殻条痕上に縦位2～3条もしくは斜位2～3条の貝殻刺突文を重ねている。なお、編年の指標となる貝殻刺突文の間隔は疎・密ともに観察できる。

斜位の貝殻条痕状の貝殻刺突文の間隔は45～55が比較の粗であり、56～57が密、58～72は粗である。

### Ⅳ類 (第15図 73)

吉田式土器の口縁部である。口唇部にキザミ目が施

され、口縁部には3条の横位の貝殻刺突文が施されている。口縁部から胴部にかけての部分には貝殻押引文が密に施されている。

### Ⅴ類 (第16図 74～77)

74～77は外反する口縁部である。74・75ともに、口唇部にキザミ目と口縁部上部は貝殻刺突文が施されている。胴部は綾形条痕文が施されている。

76は口縁部付近の胴部であると考えられる。貝殻条痕は一切観察できなかった。78は斜位の貝殻条痕文がかなりはっきり施されている。

### Ⅵ類 (第18図 78～87)

底部から胴部にかけては外傾をなすが、口縁部にかけては内寄し、傘を内側に傾けた形に似ている。胴部文様は斜位の粗雑な貝殻条痕が施され、全体的にかなり厚みのある土器である。

78は口縁部で、直行し、口唇部はやや内傾する。口縁部から下部にかけて短い斜位の貝殻条痕が整然さに欠けるパターンで施されている。同様の施文パターンは79～82にかけて見られ、85・87は施文の角度がやや鋭くなる。83・84・86は縦位の貝殻条痕文が施される。胎土はいずれも粗く、小塵を含むが、内面・外面ともミガキを入念に施しているが、83は胎土・調整とも粗で内面はケズリによる調整である。

### Ⅶ類 (第19図 88～94)

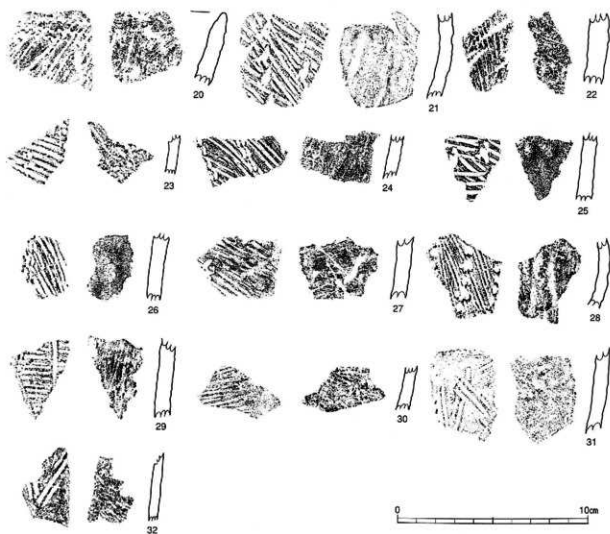
縄文時代早期の範疇にはいると思われるが、現段階では分類不可能な土器である。88・89・91には縦位の貝殻条痕が施されているが、90・92～94は刺突文のみが施されており、いずれも分類不能である。

### 縄文時代早期の石器 (第20・21図 95～108)

#### ① 石鏃 (95～99)

95は頁岩製の石鏃未製品である。形状は丸く最大長4.2cm、最大幅2.6cm、重さ11.1gで、厚さ1.0cmとやや分厚い。長幅比1.61である。

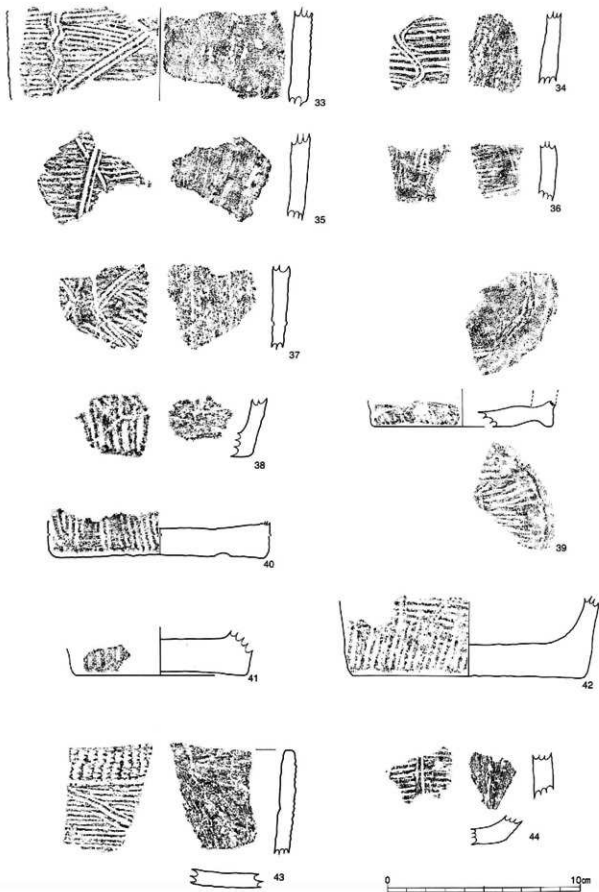
96は安山岩製の石鏃未製品である。最大長2.9cm、最大幅1.75cm、長幅比1.65で二等辺三角形である。側縁部に鋭利状の仕上げが見られる。先端部のみ細かい調整刺磨が施されている。



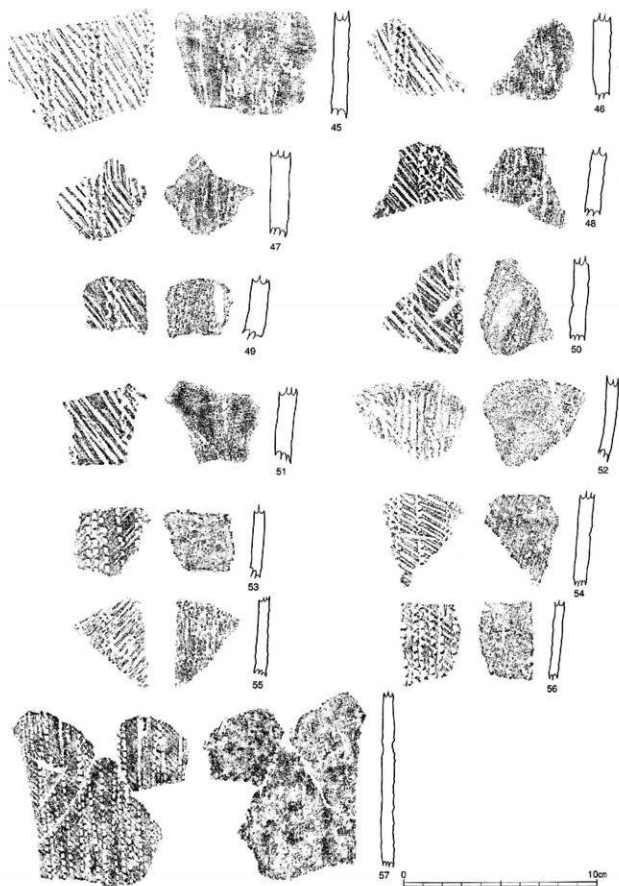
第12図 I類土器

縄文土器 I 類観察表

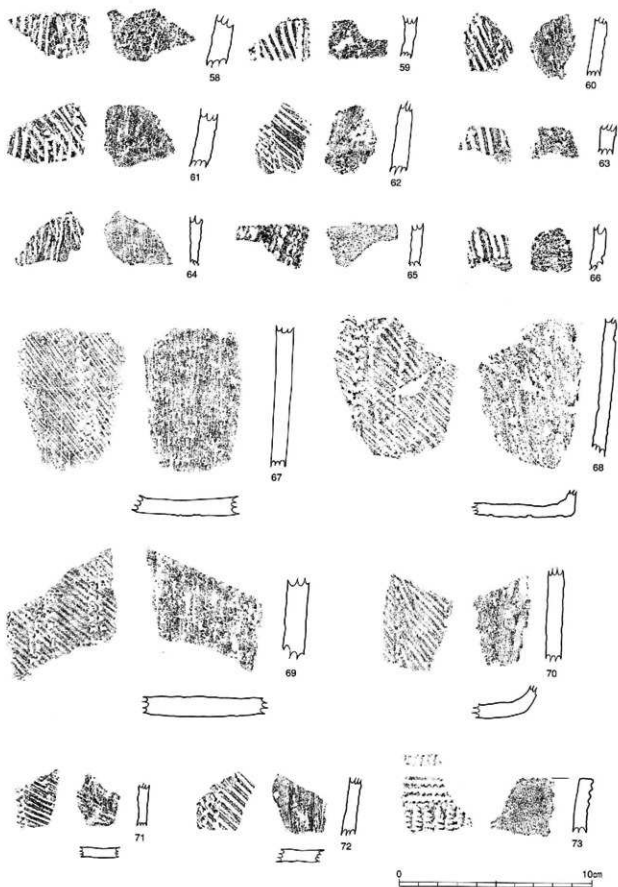
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	燧石	その他				
第 12 図	20	B-12	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	○		良	貝殻刺突・貝殻条痕	口柄部ナデ+亀ケズリ	
	21	B-12	V	淡茶褐色	暗茶褐色			◎		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	22	B-9	Ⅱ	淡茶褐色	淡黒褐色	◎	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	23	B-12	Ⅳ	暗茶褐色	茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	24	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	淡黒褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	25	B-12	Ⅳ	茶褐色	淡茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	26	B-12	Ⅲ	茶褐色	淡黒褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	27	C-8	Ⅱ	淡茶褐色	黒褐色	○	○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	28	B-12	Ⅳ	黒褐色	黒褐色	○	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	29	B-11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕	ナデ	
	30	H-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	31	G-7	Ⅳ	淡黒褐色	黒褐色	○	○			〃	貝殻条痕	ナデ	
	32	G-8	V	白濁	淡黒褐色	○	○			〃	貝殻条痕	ナデ	



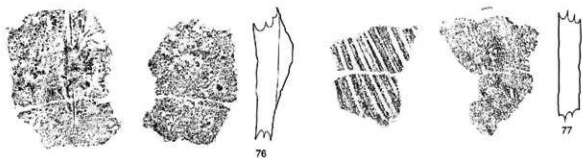
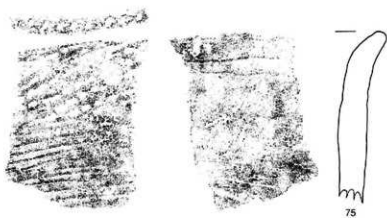
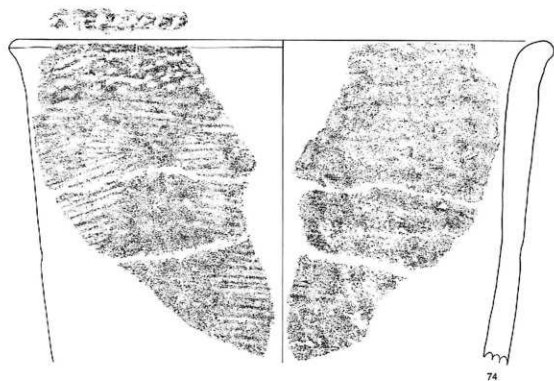
第13图 II類土器



第14圖 III類土器 1

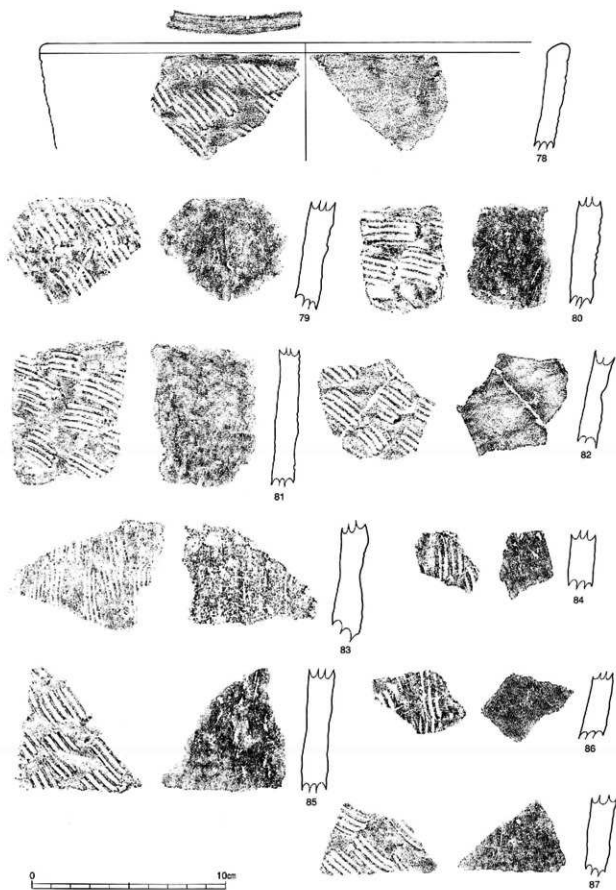


第15图 III類土器 2・IV類土器

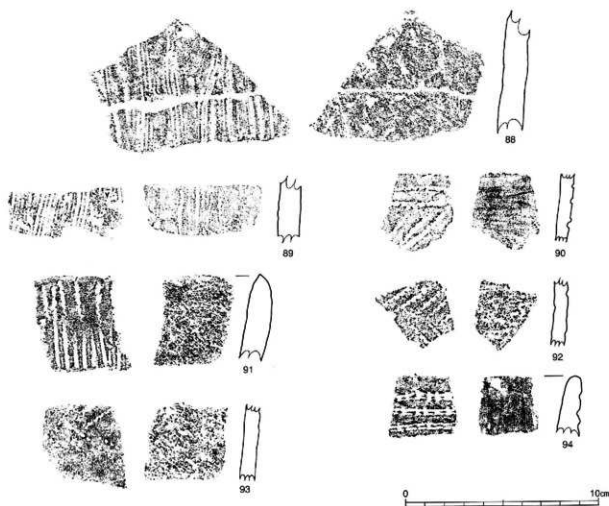


第16图 V类土器





第17図 VI類土器



第18図 VII類土器

縄文土器Ⅱ類観察表

神宮 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考	
				外	内	石英	長石	角閃石	その他					
第13 図	33	B-11	Ⅳ	茶 褐 色	茶 褐 色		○	○			良	貝殻条痕	ケズリ	
	34	B-10	Ⅲ	茶 褐 色	暗茶褐色	○	○	○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	35	A-9	Ⅱ	茶 褐 色	暗茶褐色		○	○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	36	B-11	Ⅳ	茶 褐 色	暗茶褐色		○				〃	貝殻条痕	ケズリ	
	37	B-11	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	38	B-12	Ⅳ	茶 褐 色	暗茶褐色		○				〃	貝殻条痕	ケズリ	
	39	B-10	Ⅲ	茶 褐 色	暗茶褐色		○	○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	40	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	暗茶褐色		○		金雲母		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	41	B-12	Ⅴ	淡茶褐色	白 濁	○	○				〃	貝殻条痕	ケズリ	
	42	B-12	Ⅳ	茶 褐 色	淡茶褐色	○	○	○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	43	B-11	Ⅳ	茶 褐 色	明茶褐色		○	○			〃	貝殻条痕	ケズリ	角筒
	44	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	茶 褐 色		○				〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角筒

縄文土器Ⅲ類観察表

種別 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	燧石	その他				
第14 図	45	B-11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	46	B-11	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	47	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	48	B-12	Ⅳ	明茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	49	B-11	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	50	B-11	Ⅲ	茶褐色	淡茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	---
	51	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	淡黒褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	---
	52	B-12	Ⅳ	淡茶褐色	白濁	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ナデ	---
	53	C-10	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突	ケズリ	---
	54	A-11	Ⅳ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	55	B-12	Ⅲ	白濁	濁茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	---
	56	B-11	Ⅲ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	57	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	淡茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	58	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	濁茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
第15 図	59	C-10	Ⅳ	淡茶褐色	白濁	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	---
	60	B-12	Ⅴ	明茶褐色	白濁	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	61	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	62	C-10	Ⅳ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	---
	63	B-12	Ⅳ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ナデ	---
	64	A-9	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	---
	65	N-4	Ⅲ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	---
	66	C-10	Ⅳ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	---
	67	B-12	Ⅳ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角部
	68	B-11	Ⅳ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角部
	69	B-12	Ⅳ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	内面
	70	H-8	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角部
	71	B-12	Ⅳ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角部
	72	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角部

縄文土器Ⅳ類観察表

種別 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	燧石	その他				
第14 図	73	B-9	Ⅲ	黒褐色	茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ナデ	---

縄文土器Ⅴ類観察表

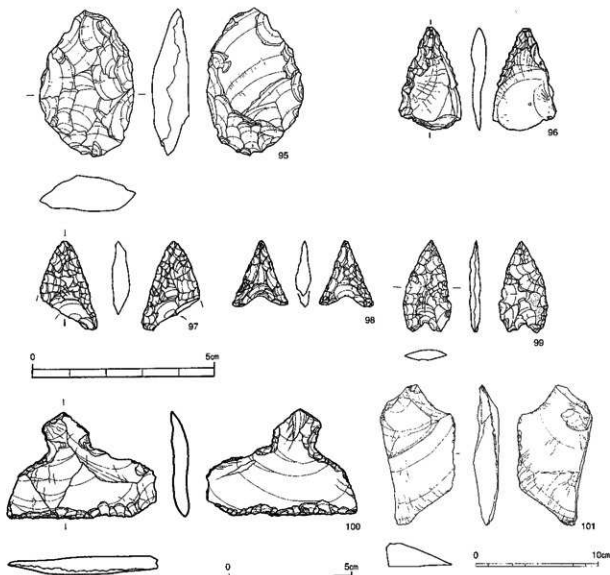
種別 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	燧石	その他				
第16 図	74	C-10	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・線状貝殻条痕	ナデ	---
	75	C-10	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・線状貝殻条痕	ナデ	---
	76	C-11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	無文	ケズリ	---
	77	H-8	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	線状貝殻条痕	ケズリ	---

縄文土器Ⅵ類観察表

種別 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	燧石	その他				
第17 図	78	B-12	Ⅳ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
	79	B-12	Ⅳ	茶褐色	白濁	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
	80	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
	81	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
	82	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
	83	A-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
	84	G-8	Ⅲ	茶褐色	淡黒褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ケズリ	---
	85	C-9	SR1	茶褐色	白濁	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
	86	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---
87	B-12	Ⅳ	茶褐色	淡黒褐色	○	○	○	○	良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	---	

縄文土器Ⅶ類観察表

種別 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	燧石	その他				
第18 図	88	H-8	Ⅳ	白濁	白濁	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	---
	89	H-8	Ⅳ	淡茶褐色	白濁	○	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	---
	90	G-7	Ⅳ	白濁	淡茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突	ナデ	---
	91	G-8	Ⅲ	濁茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突・明部貝殻条痕	ケズリ	---
	92	H-8	Ⅲ	白濁	淡黒褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突	ケズリ	---
	93	H-8	Ⅳ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻刺突	ケズリ	---
	94	H-8	Ⅳ	淡黒褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	良	貝殻押し引き	ナデ	---



第19図 縄文時代早期出土石器 1

97は上牛鼻産黒曜石製の石鏃の基部欠損品である。最大長2.9cm、最大幅は予測で1.75cmである。長幅比1.65でほぼ二等辺三角形を呈する。

98は安山岩製の石鏃である。最大長1.8cm、最大幅1.4cmの長幅比は1.28で、器形はほぼ二等辺三角形を呈している。側縁部に鋸歯状の仕上げが施されており、基部の挟りがやや深い。

99は、瑪瑙製の石鏃である。最大長2.6cm、最大幅

1.35cm、長幅比1.92で、ほぼ縦長の二等辺三角形を呈する。側縁部に鋸歯状の仕上げを施しており、基部はすぼまり挟りはやや浅いがU字状を呈する。

② 石匙 (100)

100は硬質頁岩製の石匙である。横形で素材薄片の剥離面を大きく残すつまみ部付近の右側縁部に集中的な加工が施され、刃部にかけて大剥離が観察できる。刃部は剛縁に形成される。



第20図 縄文時代早期出土石器 2

③ 微細剥離痕のある剥片 (101)

101は頁岩を用いた最大長12cm、最大幅6.2cm、厚さ2.1cm、重さ124gで、大型剥片の右側縁部に削器様の刃部が形成されている。右側縁部には、中央部から上部にかけて微細な剥離痕が複数観察される。

④ 打製石斧 (102・103)

102・103は頁岩製の短冊形の打製石斧である。

102は最大長9.6cm、最大幅6.6cmで、両面に自然面を残しながら、側縁部を細かく調整し形状を整えている。103は最大長14cm、最大幅9cmで両面に自然面を多く残り、側縁部の抉りと刃部に若干の調整を入れている。使用痕が顕著であり、刃部及び側縁部の摩滅が激しい。しかし、全体的に作りが雑である。

⑤ 磨石、叩石、凹石 (104~107)

全て砂岩製である。重さは300~500gに集中してい

る。104・106・107は側縁部に敲打痕が多数観察できる。104は叩石である。風化が激しいため観察が困難であるが、下端部に著しい打痕が観察される。106は石楸状の磨石である。最大長10cm、最大幅7.9cm、厚さ4.3cmで、敲打によりやや楕円に近い形状である。裏面に使用痕と、側面に敲打痕を観察できるため、磨石兼叩石の両使用目的を達成していたものと思われる。

107は叩石である。最大長7.7cm、最大幅6.6cm、厚さ5.3cmと形状は球に近い。重さは300~500g後半に集中している。

108は短冊状を呈し上部・下部の先端部の敲打痕が集中している。

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第19図	95	IV	石 鎌	G-10	頁 岩	4.2	2.6	1.0	11.15	
	96	IV	石 鎌	B-12	安山岩	2.9	1.8	0.45	1.3	
	97	IV	石鎌未製品	G-10	黒曜石	2.9	1.8	0.45	1.33	上中層産
	98	IV	石 鎌	E-9	安山岩	1.8	1.4	0.5	0.62	
	99	IV	石 鎌	B-12	瑪瑙	2.6	1.4	0.3	0.78	
	100	IV	石 匙	H-8	硬質頁岩	4.5	6.3	0.75	17.2	
第20図	101	V	鏃 器	G-7	頁 岩	12.0	6.2	2.1	124.0	
	102	IV	打 斧	B-11	頁 岩	9.6	6.0	2.4	179.0	
	103	IV	打 斧	B-11	頁 岩	11.0	5.9	2.2	190.6	
	104	IV	叩 石		砂 岩	10.2	8.2	5.7	565.0	
	105	IV	凹 石	H-8	砂 岩	9.8	6.7	4.7	370.0	
	106	IV	磨石・叩石	B-12	砂 岩	10.0	7.9	4.3	458.2	
	107	IV	磨 石	G-7	砂 岩	7.7	6.6	5.3	342.2	
	108	IV	叩 石	B-12	砂 岩	11.0	4.6	2.45	167.4	

### 3 縄文時代前期～晩期(Ⅱ～Ⅲ層)の調査

縄文時代前期～晩期の遺構・遺物はⅡ～Ⅲ層で発見された。

#### (1) 遺構

##### ① 溝状遺構(SR-1)(第22図)

A～H-8～10区にかけてⅢa層で検出された。南北約70mに渡って中世溝跡に沿う様な形で見つかった。北側部分が、中世溝跡に切られている。幅は最大幅約3m60cm、最小幅2m程度で、深さはⅢa層上面から18cm以上である。形状は西側にやや膨らみをもたせながらカーブしている。遺構の全体は地形の平坦な面に沿って検出された。E・F-8・9区では硬化面のみ確認できたが、本来は同様の深さがあったものと思われる。底面にテフラが固着していた。これは、後述するように、分析の結果「灰ゴラ」であることが判明した。また、埋土中から入土式土器が出土していることから縄文時代晩期と考えられる。

#### (2) Ⅱ～Ⅲ層の遺物

Ⅱ～Ⅲ層の遺物総数は1,121点であった。特に縄文時代晩期の遺物が大半を占めた。

#### Ⅷ類(第23・24図 109～117)

109は口縁部である。外面は斜位の、内面は横位の貝殻条痕文がナデ・ケズリの調整後施されている。胎土は粗く、小礫を多数含む。比較的薄手で、口縁部形状は直口する。110も口縁部だが、外傾し、横位の貝殻条痕文はややはっきりしない。胎土は比較的密で小礫が少ない。内面はナデ・ケズリによる調整が丁寧に施されている。111・112は胴部である。111は斜位の、112ははっきりとした横位の貝殻条痕文が施されている。いずれも小礫を多く含む。胎土は粗い。113は下部に補修孔が施される口縁部である。114～117はミミズバレ状の陰帯文から口縁下部と思われる。114～117はナデ・ケズリの調整後、横位の貝殻条痕が施され、ミミズバレ状の陰帯文が施される。内面は横位のケズリによる調整が施され、胎土は小礫が少なく比較的密である。

#### Ⅸ類(第25図 118～122)

118～122・124は円筒土器の口縁部である。口唇部には指頭またはヘラ状工具による凸凹文様が施されて

いる。口縁部から胴部にかけて118・119は同じく指頭による沈線が格子状の文様に施され、122はヘラ状工具による物と思われる横位の文様が断続的に施されている。118・120～122はいずれも土器の内外面ともナデによる調整が施され、特に内面には指の圧痕が顕著に観察される。胎土を顕微鏡観察で観察すると118～121には火山ガラスが多く含まれているのを観察できた。

#### X類(第26図 123～133)

123～126の口唇部にはキザミ目が施され、口縁部は波状を呈する。口縁部形状は123・126が口唇部付近にかけてやや内湾するが、124・125・127～131は外反する。胴部文様は123～126はヘラ状工具で幾何学文様が曲線的に描かれているが、127～133は平行沈線が直線的に施されている。

#### XI類(第27図 134～141)

134・135・137・139は口縁部で外反もしくは外傾する。134はやや細いヘラ状工具で口唇部全体にキザミ目が施される。134～138は口縁部から胴部にかけて波状文が施され、内外面ともケズリによる調整が施されている。また、胎土に多量の雲母を含む。

#### XII類(第28図 142～144)

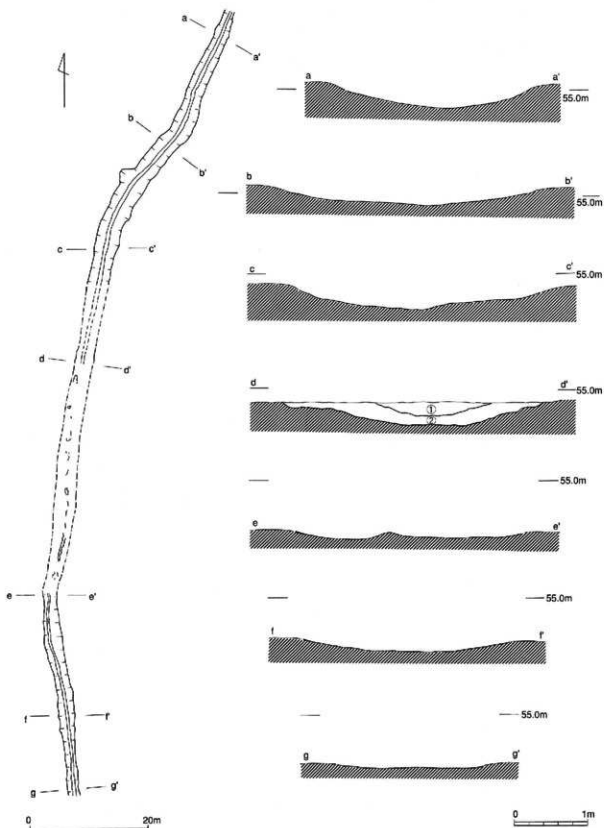
142～144は口唇部分にかけて2～3条の文様が施される。口縁部形状は大きく外反し、144は瘤状の突起がある。細粒が多く精製である。

#### XIII類(第28図 145)

145は磨り消し縄文の技法を用い、内外面ともナデを施している。立ち上がりはやや外反し、3条の沈線が施されている。

#### XIV類(第29図 146～172)

146～156は口縁部である。146～150は上部にかけて2～3条の横走沈線が施されている。151～154は沈線は施されていない。155～157ははっきりした横走沈線とは言い難いが、調整のナデ・ケズリの中で生じた文様を自然に生かしたと思われる。特に、156は横位のナデ上に斜位の比較的浅い横走沈線が施され、何らかの意図的な作業であったことを予想させるものとなっている。157～163は頸部である。157・159は上部に1～3条、164は比較的浅いが幅の広い横走沈線文が4条施されている。横走沈線文が施されているものには



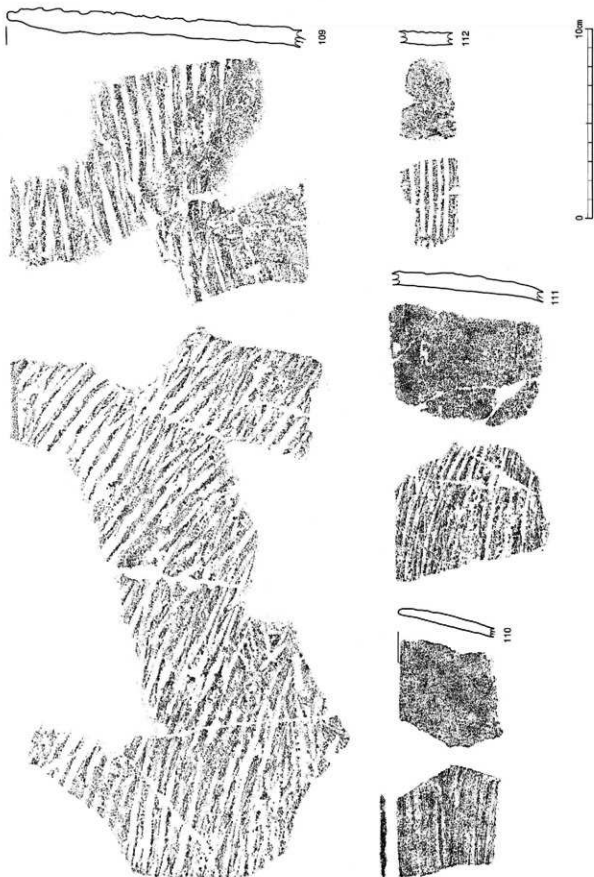
① 平削面 削面には黒い層が認められ、砂子が混入している。しまりがあって脆い、空が抜くんだものである。  
 ② 溝底面 断面には黒い層が認められ、砂子が混入している。しまりがあって脆い、空が抜くんだものである。  
 ③ 溝壁面 断面には黒い層が認められ、砂子が混入している。しまりがあって脆い、空が抜くんだものである。  
 ④ 溝底面 断面には黒い層が認められ、砂子が混入している。しまりがあって脆い、空が抜くんだものである。  
 ⑤ 溝壁面 断面には黒い層が認められ、砂子が混入している。しまりがあって脆い、空が抜くんだものである。  
 ⑥ 溝底面 断面には黒い層が認められ、砂子が混入している。しまりがあって脆い、空が抜くんだものである。  
 ⑦ 溝壁面 断面には黒い層が認められ、砂子が混入している。しまりがあって脆い、空が抜くんだものである。

第21図 縄文晩期遺構（溝状遺構）

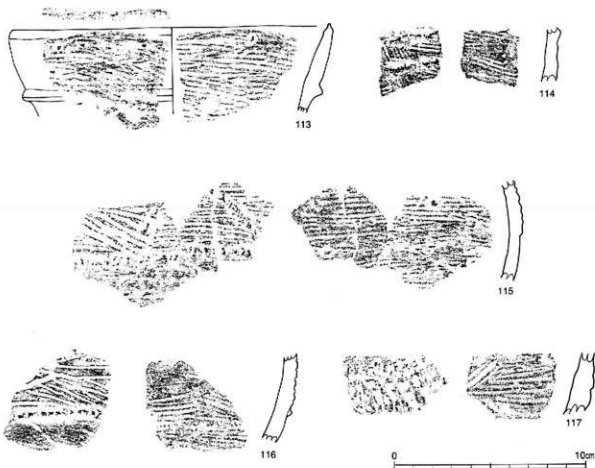


礎石ケ原遺跡 III～II層土器分類表

分類	項目	概 要
VII類	器形	口縁部はやや外傾する。比較的薄手で口縁部が直行する鐘罩型を呈する。底部は尖底・丸底を呈する。
	文様	全体に斜位・横位の貝殻条痕文が施される。口縁下部にキザミ目の入ったミズバレ状の隆帯文が施される。器面全体に大胆な貝殻条痕文が施されているものには胎土に多くの小礫を含むものがあるが、全体としては胎土は密である。
	調整	内外面ともナデ・ケズリによる調整が見られる。
	備考	
	土器形式 図番号	轟式I土器 109-117
IX類	器形	口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる円筒形である。
	文様	口唇部には指頭またはへら状工具による凹凸文様が施されている。口縁部から胴部にかけて同じく指頭やへら状工具によって格子状沈線もしくは横位の文様がまんべんなく施されている。ナデによる調整が施され、内面には指の圧痕が観察できる。
	調整	胎土を火体顕微鏡で観察したところ、火山ガラスを多く含むものもあることが確認できた。
	備考	阿高式I土器
	土器形式 図番号	118-122
X類	器形	口縁部は波状を呈する。口唇部にかけてほぼ直行するものと、緩やかに外傾するもの、口唇部にかけて外反するものがある。口唇部が波状を呈するものの中にはやや内反するものがある。
	文様	口唇部にはキザミ目が施され、口縁部から胴部にかけてへら状工具による、幾何学的文様が曲線的に施されるものと、平行沈線が直線的に施されるものがある。
	調整	ナデによる調整が施される。
	備考	
	土器形式 図番号	新宿式土器 123-133
XI類	器形	口縁部にかけてほぼ直行するもの、外反するもの、内湾するものがある。無文もしくは突帯のあるものは外反する。
	文様	やや細いへら状工具で、口唇部全体にキザミ目が施される。口縁部から胴部にかけては縄文が施される。
	調整	内外面ともナデ・ケズリによる調整が見られる。
	備考	
	土器形式 図番号	曾畑式土器に該当すると思われるが判然としない。 134-141
XII類	器形	口縁部が外反する。
	文様	口縁部に2～3条の文様が施される。瘤状の突帯も形成される。
	調整	ナデ・ケズリによる調整が見られる。
	備考	粗粒が多く、精製である。
	土器形式 図番号	市末式土器 142-144
XIII類	器形	直立する。
	文様	磨り消し縄文と3条の沈線文を施す。
	調整	内外面ともナデによる調整が見られる。
	備考	
	土器形式 図番号	西平式土器 145
XIV類	器形	深鉢に伴う形状を呈する。底部の立ち上がりから内傾し、胴部に向かって外反するものと立ち上がりから内傾するものがある。更に頸部で内湾し、口縁部にかけて外反する。
	文様	口縁上部に2～3条の横走沈線が施されているものと、文様が判然としないものがある。また、横位のナデ上に斜位の比較的浅い横走沈線文が施される。
	調整	横走沈線が施されていないものが精製である。
	備考	実体顕微鏡で全体的に比較的少量の火山ガラスが含有されていることが確認できた。
	土器形式 図番号	上加世田式土器 146-172
XV類	器形	浅鉢・マリ型を呈する。胴部・頸部に明瞭な稜をもち、口縁部にかけて外反もしくは、内湾するもの。また、緩やかな曲線を描きながら口縁部で内湾し、口縁上部で粗山外反するものがある。
	文様	口縁部に2条のへら沈線文が施されている。
	調整	緻密なへらナデによる調整が精密に施されている。ほとんどが精製であり、黒色磨研のものもある。胎土の状態も密である。
	備考	浅鉢は胴径と口径がほぼ一致するものと、口縁が胴径に対し、大幅に広がっているものがある。
	土器形式 図番号	入佐式土器・黒川式土器 173-186



第22图 VII类土器 1



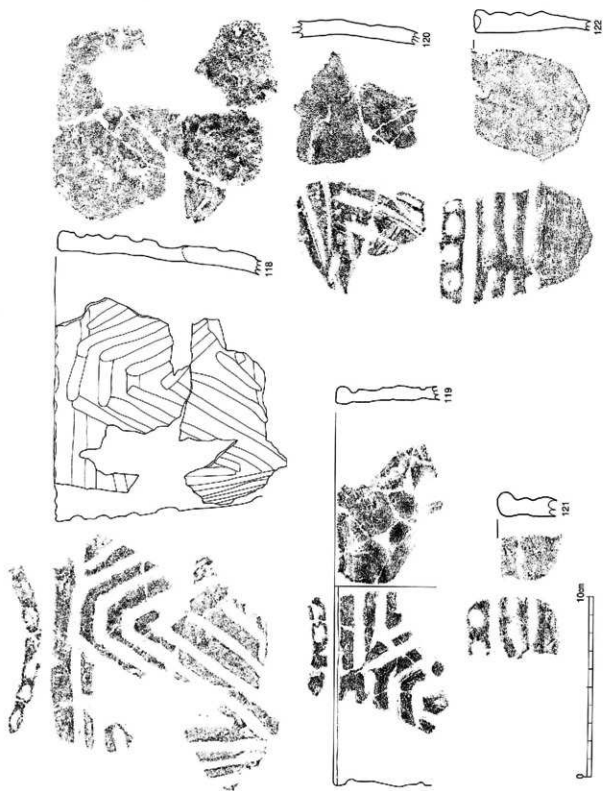
第23図 VIII類土器 2

縄文土器Ⅷ類観察表

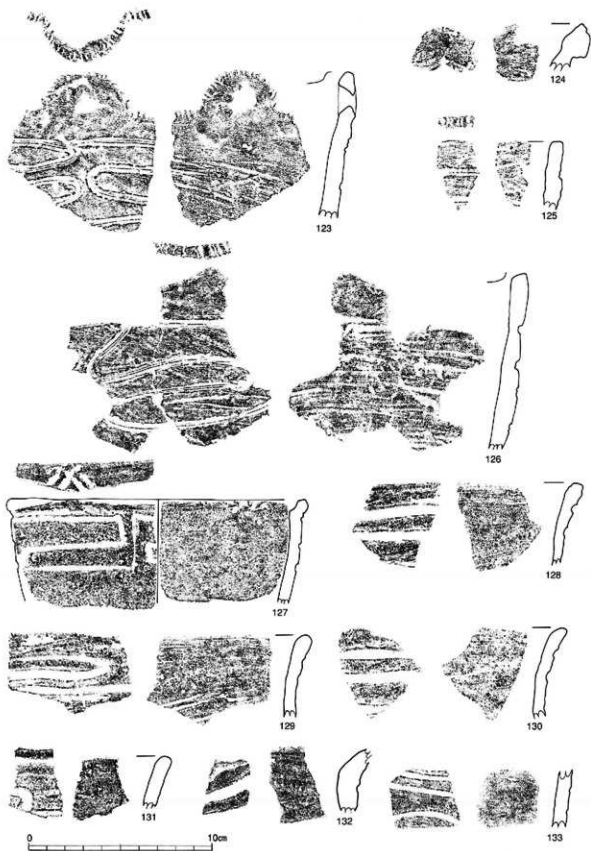
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土			焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	燧石				
第 22 図	109	B-9	Ⅲ	黒褐色	淡黒褐色	○	○	○	良	貝殻条痕	ケズリ	
	110	G-8	Ⅲ	黒褐色	淡黒褐色	○	○	○	～	貝殻条痕	ナデ	
	111	F-9	Ⅲ	黒褐色	淡茶褐色	○	○	○	～	貝殻条痕	ナデ	
	112	B-9	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色	○	○	丸山ガラス	～	貝殻条痕	ナデ	
第 23 図	113	H-7	Ⅲ	暗茶褐色	淡黒褐色	○	○	○	～	口縁部以上の軟変帯→貝殻条痕	ケズリ	
	114	F-10	Ⅲ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	～	口縁部以上の軟変帯→貝殻条痕	ナデ	
	115	B-12	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	○	～	口縁部以上の軟変帯→貝殻条痕	ナデ	
	116	B-12	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	丸山ガラス	～	口縁部以上の軟変帯→貝殻条痕	ナデ	
	117	O-3	Ⅱ	茶褐色	淡黒褐色	○	○	○	～	貝殻押し引き	ケズリ	

縄文土器Ⅸ類観察表

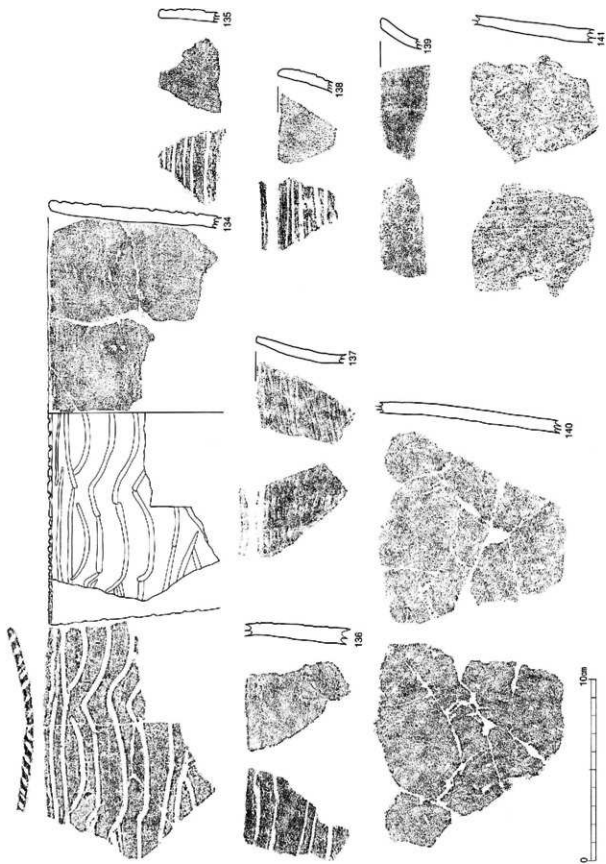
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土			焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	燧石				
第 24 図	118			暗茶褐色	淡茶褐色	○	○	丸山ガラス	良	指	ナデ	
	119			茶褐色	茶褐色	○	○	丸山ガラス	～	指	ケズリ	
	120	G-6	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色	○	○	丸山ガラス	～	指	ナデ	
	121		Ⅲ	淡茶褐色	淡黒褐色	○	○	丸山ガラス	～	指	ナデ	
	122	G-7	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○	～	指もしくはヘラ	ナデ	



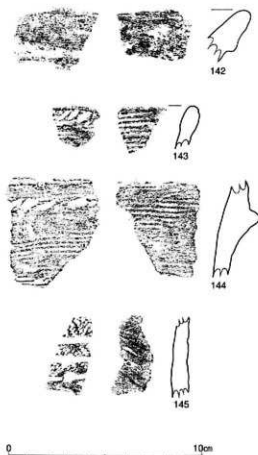
第24図 K類土器



第25図 X類土器



第26圖 XI類土器



第27図 X II・X III類土器

縄文土器X類観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土			焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	鱗石				
第25 図	123	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	黒褐色		○		良	指orへら沈線	ケズリ	
	124	F-8	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色	○	○		*	指orへら沈線	ナデ	
	125	F-8	Ⅲ	黒褐色	淡茶褐色	○	○		*	指orへら沈線	ケズリ	
	126	F-8	Ⅲ	淡茶褐色	淡黒褐色	○	○		*	指orへら沈線	ケズリ	
	127	H-8	Ⅲ	明茶褐色	淡茶褐色	○	○		*	指orへら沈線	ナデ	
	128	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○		*	指orへら沈線	ナデ	
	129	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○			*	指orへら沈線	ナデ	
	130	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○			*	指orへら沈線	ケズリ	
	131	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○		*	指orへら沈線	ナデ	
	132	B-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○		*	指orへら沈線	ナデ	
	133	B-11	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○		*	指orへら沈線	ナデ	

縄文土器X I類観察表

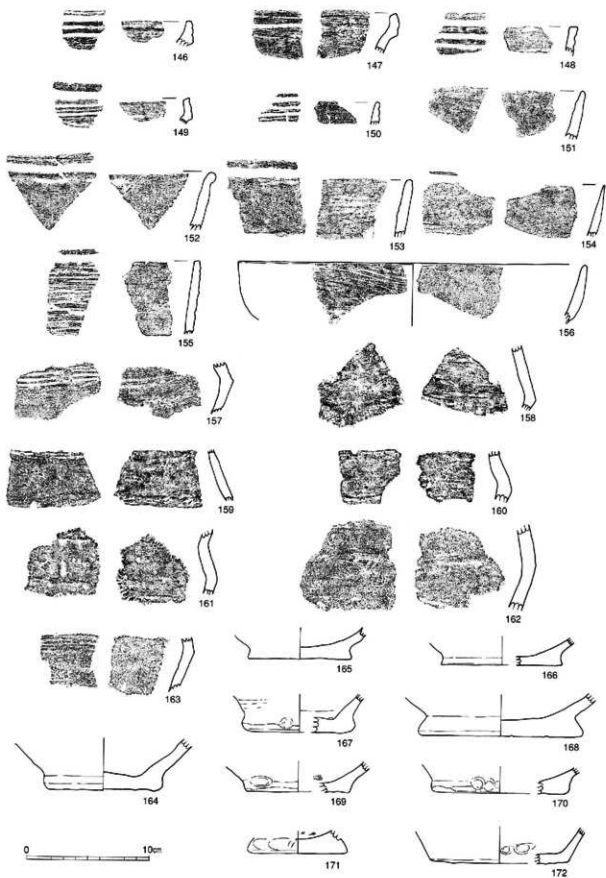
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土			焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	鱗石				
第26 図	134	B-11	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	○	良	へら沈線	ナデ	
	135	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○		*	へら沈線	ナデ	
	136	A-10	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	○	*	へら沈線	ナデ	
	137	B-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○		*	へら沈線	ナデ	
	138	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○		*	へら沈線	ナデ	
	139	A-9	Ⅲ	暗茶褐色	淡茶褐色		○		*	へら沈線	ナデ	
	140	G-6	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○		*	へら沈線	ナデ	
	141	H-8	Ⅲ	淡茶褐色	淡黒褐色	○	○		*	へら沈線	ナデ	

べ、施されていないものの方が精製である。165～172は底部である。底部から屈曲外反し、側面に指圧痕が観察される。底面は、165・166・171・172が比較的精製であり、164・167～170は比較的粗製である。なお、172は浅鉢であるが、165～171は深鉢である。実体顕微鏡で胎土を観察したところ、160・161・167～169に多数の火山ガラスが含有していた。また、154・157・165・170・171は他の土器に比べ火山ガラスが比較的多く含まれていた。

XV類 (第30図 173～185)

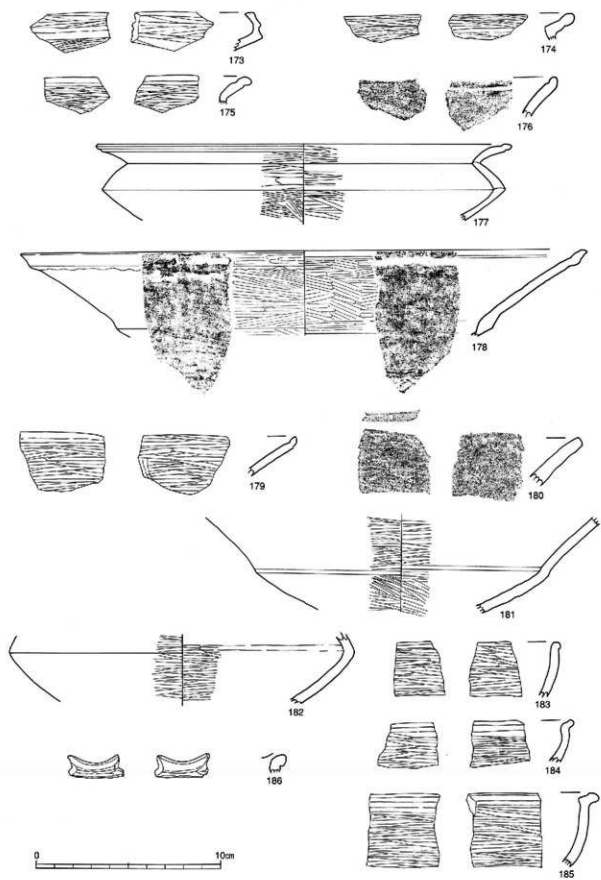
いずれも、173～182は晩期の浅鉢で、178が粗製である以外、全て精製である。180以外はすべて緻密なへらナデ・へらミガキが施されており、174・177・179は黒色磨研である。いずれも精製である。173～180は口縁部で、167・168には口縁上部にかけて2条のへら沈線文が施されている。173・174・177・178・181・182は胴部もしくは口縁部に明瞭な稜をもつ。

177は胴径と口径がほぼ一致するのに対し、178は口径が胴径に比較し、大幅に広がっている。186は口唇部付近の粗製の突帯である。



第28图 XIV类土器





第29圖 XV類土器

縄文土器Ⅱ・ⅩⅢ類観察表

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	顔石	その他				
第 27 図	142	E-9	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色					良	指	ナデ	
	143		表採	明茶褐色	明茶褐色					〃	口縁部割突	ナデ	
	144	E-9	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色					〃	口縁部割突+貝殻朱痕	ナデ	
	145	C-8	Ⅱ	明茶褐色	黒褐色					〃	磨消縄文?	ナデ	

縄文土器ⅣⅣ類観察表

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	顔石	その他				
第 28 図	146	G-9	Ⅲ	暗茶褐色	淡黒褐色					良	ヘラ沈線	ナデ	
	147	C-12	Ⅲ	茶褐色	茶褐色			○		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	148	A-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	149	A-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色			○	○	〃	ヘラ沈線	ナデ	
	150	K-4	Ⅲ	黒褐色	黒褐色					〃	ヘラ沈線	ナデ	
	151	B-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色					〃	無紋	ナデ	
	152	H-8	Ⅳ	茶褐色	濁茶褐色			○	○	〃	無紋	ナデ	
	153	B-9	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色			○		〃	無紋	ナデ	
	154	C-10	Ⅳ	白濁	白濁			○		釉付	〃	無紋	ナデ
	155	H-8	Ⅲ	濁茶褐色	茶褐色			○	○	〃	ヘラ沈線	ナデ	
	156	C-10	Ⅲ	淡茶褐色	濁茶褐色	○	○	○		〃	ヘラ沈線	ナデ+ケズリ	
	157	D-9	SR1	茶褐色	濁茶褐色					釉付	〃	ヘラ沈線	ケズリ
	158	B-11	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		〃	無紋	ケズリ	
	159	C-10	Ⅲ	白濁	白濁					〃	無紋	ナデ	
	160	B-9	Ⅲ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		有砂珠	〃	無紋	ナデ
	161	B-9	Ⅲ	暗黄褐色	暗黄褐色			○	○	丸砂珠	〃	無紋	ナデ
	162	D-10	Ⅲ	淡黒褐色	暗茶褐色	○	○			〃	無紋	ナデ	
	163	L-4	Ⅲ	暗黄褐色	淡黒褐色			○		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	164	B-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色			○	○	〃	無紋	ケズリ	裏面朱痕
	165	K-7	Ⅲ	明茶褐色	淡黒褐色	○	○	○		釉付	〃	無紋	ナデ
	166	J-6	Ⅲ	淡黄褐色	淡黒褐色	○	○			〃	無紋	ナデ	
	167	B-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色			○	○	〃	無紋	ナデ	
	168	G-8	SR1	茶褐色	白濁	○	○			丸砂珠	〃	無紋	ナデ
	169	C-10	Ⅲ	茶褐色	淡黒褐色	○				丸砂珠	〃	無紋	ナデ
	170	C-10	Ⅳ	淡茶褐色	暗茶褐色	○	○			丸砂珠	〃	無紋	ナデ
	171	G-8	Ⅲ	淡茶褐色	暗黒褐色	○	○			丸砂珠	〃	無紋	ナデ
	172	H-8	Ⅲ	茶褐色	茶褐色			○	○	〃	無紋	ナデ	

縄文土器ⅣⅤ類観察表

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	顔石	その他				
第 29 図	173	B-9	Ⅱ	茶褐色	茶褐色			○	○	良	ヘラ沈線	ヘラナデ	
	174	G-9	Ⅲ	黒褐色	黒褐色					〃	ヘラ沈線	ヘラナデ	
	175	H-9	Ⅲ	黒褐色	黒褐色					〃	黒色磨研	ヘラナデ	
	176	H-7	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	○		〃	無文	ヘラナデ	
	177	C-9	SR1	黒褐色	黒褐色	○	○			〃	無文	ヘラ磨き	
	178	F-9	Ⅱ	淡黒褐色	淡黒褐色			○		〃	無文	ヘラ磨き	
	179		表採	黒褐色	黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	180	E-9	Ⅲ	濁黒褐色	明茶褐色			○	○	〃			
	181	B-9	Ⅲ	茶褐色	明茶褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	182	G-7	Ⅱ	茶褐色	明茶褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	183		表採	黒褐色	淡黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	184	C-10	Ⅲ	黒褐色	淡黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	185	C-10	Ⅲ	淡茶褐色	黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	186	C-9	SR1	暗茶褐色	暗茶褐色					丸砂付	〃	ヘラ磨き	

① 石鏃 (第31図 187~208)

Ⅲ 層出土の石鏃は22点である。

分類は窪見ノ上遺跡の第57図石鏃分類表に準じて、石鏃の形状、長幅比、基部をもとに下記の通り類別に分けた。

I 類: 187 (A-a-a)

187は安山岩製で裏面に主刺離面を残す。長幅比が1.05である。基部が平基となる正三角形鏃である。

Ⅱ 類: 188~193 (A-a-b)

188はチャート製、189は黒色ガラス質で良質の黒曜石製、190・191・193は安山岩製、192は硬質頁岩製である。長幅比が1~1.5でほぼ正三角形を呈し、基部は浅い抉り加工されている。

190・192・193は側縁部が鋸歯状に加工されている。

Ⅲ 類: 194~197・199 (A-a-c)

194・196・199は黒色ガラス質で良質の黒曜石製、195は頁岩製、197は安山岩製である。長幅比が1~1.5でほぼ正三角形を呈し、基部の抉りがやや深く加工されている。

199は表面右側部付近に気泡による孔がある。

Ⅳ 類: 200 (A-a-d)

200は黒色ガラス質の黒曜石製である。長幅比は1.25である。

V 類: 201・202 (A-b-b)

201~202は黒色ガラス質の黒曜石製である。

202は側縁部が鋸歯状に加工されている。207は馬蹄製である。長幅比1.92である。

Ⅵ 類: 198・206 (A-b-c)

198は安山岩製で、206は土牛尊産の黒曜石製である。長幅比1.5~2でほぼ二等辺三角形を呈し、基部の抉りが比較的深い。

198は基部にかけて膨らむように整形されている。双方とも側縁部が鋸歯状に加工されている。

Ⅶ 類: 205 (A-b-d)

205は頁岩製で基部に深い抉入部をもつ。長幅比1.11である。先端部にかけて加工が人念に施された鋸歯状の側縁部をもつ。

Ⅷ 類: 203 (A-c-b)

203は馬蹄製で滯手を呈する。長幅比は2.0である。

Ⅷ 類: 204 (B-b-d)

204は三船産の黒曜石製である。長幅比は1.07であ

る。先端部と基部の間に肩部をもつような形になっている。先端付近の側縁部には細かい調整が入る。

X 類: 208 (B-b-b)

208は安山岩製で204と同様の形状だが、先端部がやや長めで抉入部が浅い。長幅比1.11で五角形を呈し、基部の抉りはやや浅い。

② 石鏟 (ドリル) (第32図 209)

209はチャート製のドリルである。右側縁部の大刺離面をつまみ部として意識している。先端部は欠損しているが、押圧刺離で粗身に整形し、側縁部の加工も念入りに施されている。特に先端部が強調される形状である。

③ 作業面再生剥片 (第32図 210)

210は土牛尊産の黒曜石を素材とした石核の作業面再生剥片である。打面は半段で、自然面をそのまま利用している。

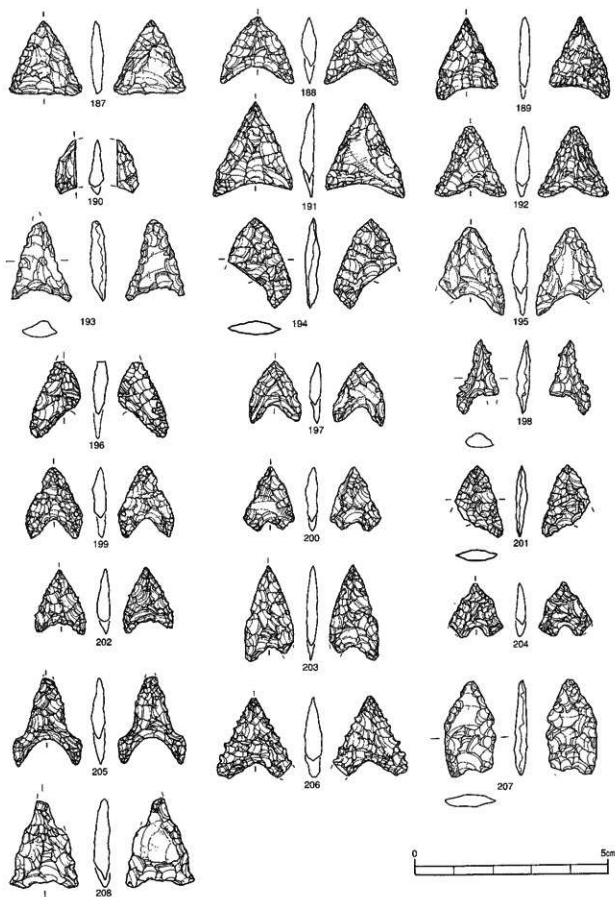
④ 石器 (第33図 211~215)

211~215は頁岩製の鏟器である。211は表裏に節理面が観察できる。両面に刺離面を残す細かい調整がなく、使用痕が観察できないため、製作途中で遺棄したものである。

212は円縁の一端から両面に大刺離を施し、刃部を形成している。刃部には使用に伴うと考えられる細かい刺離が観察される。裏面の一部に崖減痕が認められる。213は最大長21cm、最大幅9.75cm、重さ628gと大型の鏟器である。片面に大刺離が数回にわたって繰り返され、反対の面は自然面である。側縁部に調整が見られるが、使用痕は確認できなかった。石斧の素材の可能性もある。214は川礫から得られた剥片を素材とし、背面の右側縁に数回の二次加工が施される。215は転石の一端から大きな刺離を一回加えたものである。

⑤ 磨石・敲石 (第33~34図 216~219)

216は安山岩製の磨石・敲石である。用途の主な目的は敲石としてのものであるが、表面に磨石としての使用痕が観察できる。また、中央部から側縁部全体にわたって敲打痕が多数観察される。使用途中に欠損したものである。



第30図 縄文時代前期~晚期 (Ⅲ~表層) 出土石器 1

217・218は安山岩製の、219は砂岩製の磨石・敲石である。

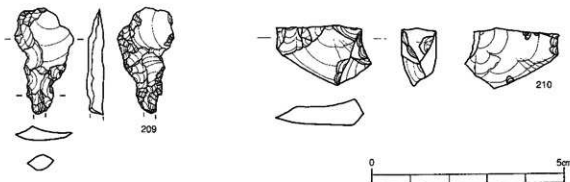
217・218は欠損品で摩耗痕が全体的に観察され、頂点部と側縁部の一部に敲打痕がわずかに残る。

219は表面中央及び側縁部に敲打痕が集中する。

⑥ 石皿・台石 (第34図 220)

220は砂岩製の欠損品である。表面は平滑面をなし、

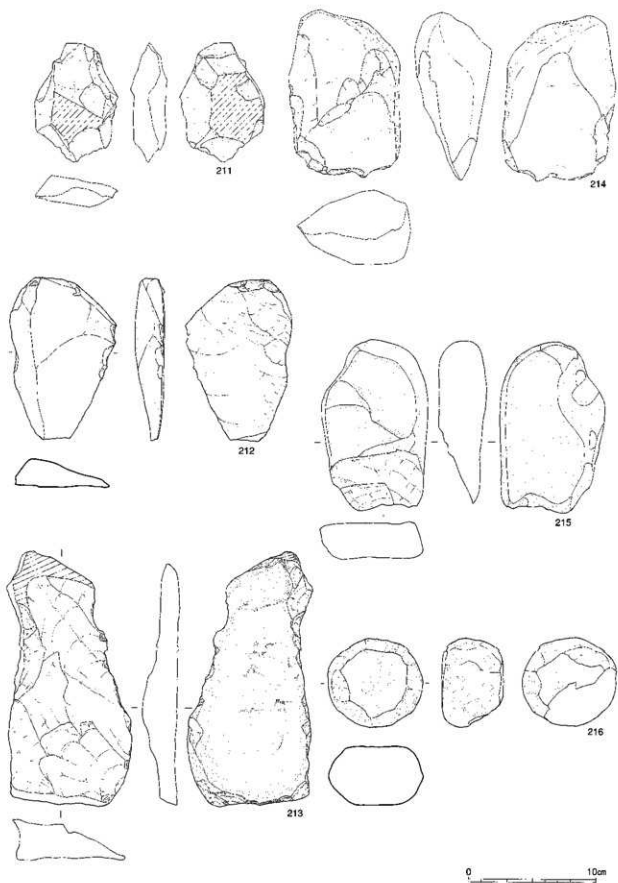
裏面は敲打痕が残ることから、石皿と台石の両機能を兼ねたものである。6 cm前後のほぼ均一する辺をもつ立方体を呈し、重さが612gと同器種の中では比較的軽量であるため、携帯用に加工した可能性も考えられる。



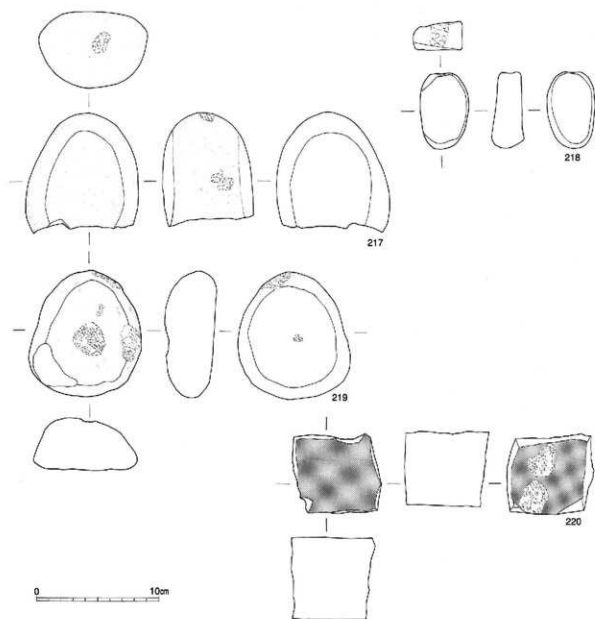
第31図 縄文時代前期～晩期(Ⅲ～表層)出土石器2

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第30図	187	SR-2	石鏃	D-9	安山岩	2	1.9	0.35	0.19	
	188	攪乱	石鏃		チャート	1.8	1.95	0.4	0.75	
	189	攪乱	石鏃		黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.64	
	190	Ⅲ	石鏃	B-9	安山岩	1.5	0.6	0.4	0.23	
	191	Ⅲ	石鏃	C-10	安山岩	2.55	2.05	0.4	1.03	
	192	Ⅲ	石鏃	I-8	頁岩	1.9	1.85	0.4	0.83	
	193	Ⅲ	石鏃	H-8	安山岩	2.15	1.6	0.4	0.83	
	194	Ⅲ	石鏃	F-8	黒曜石	2.4	1.7	0.4	0.8	
	195	Ⅲ	石鏃	A-9	頁岩	2.4	2.1	0.45	1	
	196	Ⅲ	石鏃	B-12	黒曜石	2	1.3	0.4	0.73	
	197	Ⅲ	石鏃	B-9	安山岩	1.7	1.4	0.3	0.39	
	198	Ⅲ	石鏃	G-8	安山岩	2.05	1.1	0.35	0.34	
	199	Ⅲ	石鏃	B-12	黒曜石	1.9	1.5	0.35	0.56	
	200	Ⅲ	石鏃	H-8	黒曜石	1.7	1.35	0.35	0.47	
	201	I	石鏃	C-9	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.6	
	202	Ⅱ	石鏃	B-9	黒曜石	1.8	1.35	0.35	0.41	
	203	Ⅲ	石鏃	C-11	瑪瑙	2.6	1.3	0.3	0.75	
	204	Ⅲ	石鏃	F-8	黒曜石	1.45	1.4	0.3	0.36	三輪産
	205	Ⅲ	石鏃	G-8	安山岩	2	1.8	0.4	0.72	
206	Ⅲ	石鏃	G-7	黒曜石	2.2	2	0.45	1.23	上牛鼻産	
207	Ⅲ	石鏃	B-11	瑪瑙	2.6	1.35	0.35	1.04		
208	Ⅲ	石鏃	F-8	安山岩	2	1.8	0.45	1.42		
第31図	209	Ⅲ	ドリル	B-12	チャート	3	1.65	0.45	1.37	
	210	Ⅲ	作業面再生剥片	B-10	黒曜石	1.6	2.55	0.9	3.31	上牛鼻産



第32図 縄文時代前期～晩期（Ⅲ～表層）出土石器 3



第33図 縄文時代前期～晩期(Ⅱ～表層)出土石器4

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第32図	211	Ⅲ	鏃器	B-10	頁岩	9.6	6.6	3.0	167.0	
	212	Ⅲ	鏃器	B-11	頁岩	14.0	9.0	6.15	787.0	
	213	Ⅲ	鏃器	A-12	頁岩	13.0	8.4	2.35	245.4	
	214	Ⅲ	鏃器	B-11	頁岩	21.0	9.8	3.25	628.0	
	215	Ⅲ	鏃器	B-11	頁岩	14.0	8.4	3.75	597.0	
	216	Ⅲ	磨石	G-7	安山岩	7.2	7.5	4.8	355.6	
第33図	217		磨石	表採	安山岩	10.2	9.5	7.3	999.0	
	218	Ⅲ	磨石	C-10	安山岩	6.4	4.0	2.8	95.0	
	219		磨石	表採	砂岩	10.5	9.3	5.0	559.0	
	220	表採	石皿(未製品)	B-11	砂岩	6.7	7.2	7.2	612.0	

#### 4 弥生時代～古代（Ⅲ～表層）の調査

弥生時代～古代はⅢ～表層にかけて出土するもので、軽穴住居跡等が検出された。

##### (1) 遺構

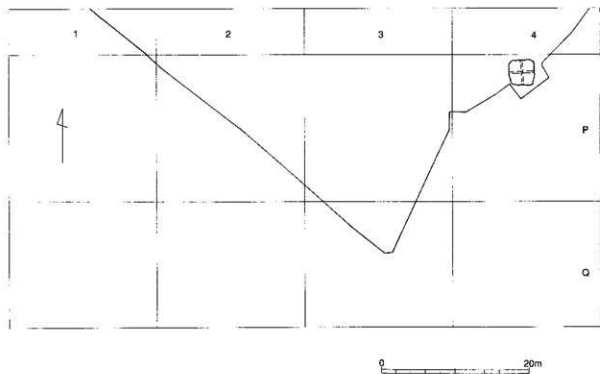
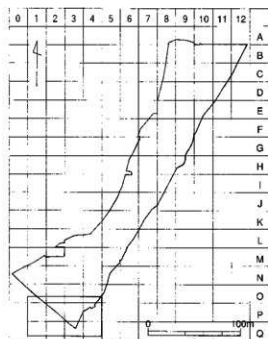
##### ① 竪穴住居跡（第35図）

P-4区、Ⅲa層上面から軽穴住居跡と思われる遺構を1基検出した。平面プランはほぼ方形を呈しており、南北3.5m、東西3.4mである。後世の削平により大半を失ったと考えられ、確認された掘り込みの深さは2～4cmで、深い場所でも7～8cmと検出面はほぼフラットである。柱穴は特定できなかった。住居跡の時期は遺構内から成川式土器が2点出土したことから、古墳時代と考えられる。

##### (2) 弥生時代の遺物

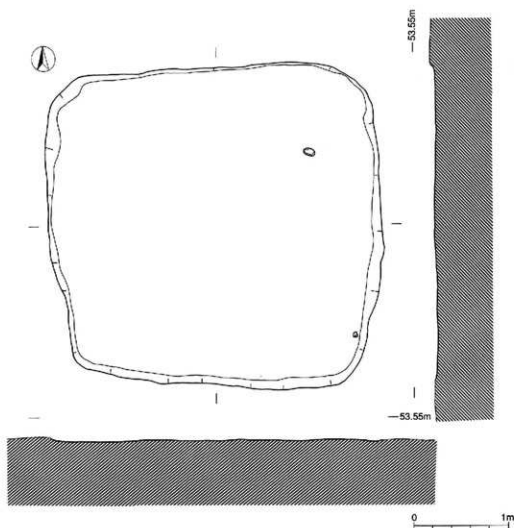
##### ① 土器（第36図 221・222）

221は壺形土器の口縁部である。口縁端部は浅く凹み、外面に暗文が見られる。222は壺の口縁部である。口縁部の上面が浅く凹んでいる。ともに弥生時代中期頃のものとされる。



第34図 古墳時代遺構配置図





第35図 古墳時代住居

② 石器

磨製石織 (第37図 227)

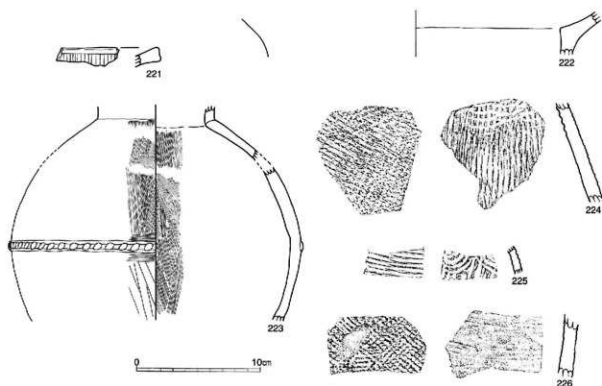
227は頁岩製の磨製石織である。最大長3.5cm、最大幅2.25cm、厚さ0.35cm、重さ2.64gである。扁平無茎で、基部が凹む。左側縁部が欠損するが、ほぼ二等辺三角形を呈する。裏面は全体的に研削され、側縁部に鑄が先端部から基部にまで続く。右側縁部は両面に研削痕が観察できる。側縁部は若干丸味を帯びる。先端には使用時のものと思われる折れが観察でき、中央部にかけて右側縁部には微細剝離痕が観察できる。

(3) 古墳時代の遺物 (第36図 223)

223は壺の胴部である。胴部中央に棒状工具による刻目突帯文を施す。内外面ハケ目後、ナデ。

(4) 古代の遺物 (第37図 224~226)

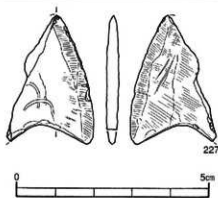
224~226は須恵器の瓶である。224は外面に格子目状のタタキを施し、内面には同心円状と平行線状の当て具痕が残る。226は外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。227は外面に格子目状のタタキ、内面は平行線状の当て具痕をナデ消している。



第36図 弥生～古墳時代土器及び古代の須恵器

弥生・古墳時代土器 須恵器

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	部位	出土	区	色調		調整		焼 成	備考
							外面	内面	外面	内面		
第 36 図	221	弥生中期		口縁部	B-9	Ⅱ	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	良	
	222	弥生中期		胴部	B-11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ	〃	
	223	古墳成川	成川	胴部	B-9	Ⅱ	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ	〃	
	224	須恵器		胴部	溝		茶褐色	灰褐色	格子目タタキ	同心円タタキ	〃	
	225	須恵器		胴部	G-8	Ⅱ	灰褐色	灰褐色	格子目タタキ	同心円タタキ	〃	
	226	須恵器		胴部	表採		灰褐色	灰褐色	格子目タタキ	ナデ	〃	



第37図 弥生時代石器

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物 番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第37図	227	Ⅱ	磨製石鏃	K-6	頁岩	3.5	2.3	0.35	2.64	

### 3 中世(Ⅱ～表層)の調査

遺構は溝状遺構12条と方形周溝(竪)1基が検出され、遺物は青磁・白磁等が出上した。

#### (1) 遺構

##### ① 溝状遺構(SD-1～12)

本遺跡ではⅡa層上面において溝状遺構が12条検出されている。溝状遺構の中には波板状凹凸面特有の浅い窪み、もしくは底面と思われる硬化面が連続して残っている部分がある。

##### 溝状遺構1 第38図(SD-1)

A～P-2～8区で検出された。溝状遺構の中で最も長く、全長約320mである。

I、Ⅰ区で西側に延びる部分と北に延びる部分の二股に分かれる。西側に延びる部分は波板状凹凸面であるSD-1に切られる形で検出され、古里遺跡の溝状遺構につながる。最大幅1m70cm程度で深さ約30cmである。

①層に白色軽石を含み、埋土中にはわずかではあるが、中世の青磁・須恵器が出上した。

##### 溝状遺構2 第39図(SD-2)

A～M-6～9区にかけて検出された。南北約235m程度で、検出された溝状遺構の中で2番目に長く、最南端でややカーブを描くが、全体的にほぼ南北に一直線である。最大幅60cm程度で深さは約20cmである。埋土は2層に分かれる。①層はしまりがあって硬く、ラミナが見られないことから、常時水が流れていた可能性は低いと考えられる。さらに、①層に白色軽石が含有されていないため、溝状遺構2は中世以前の可能性がある。

##### 溝状遺構3 第40図(SD-3)

ほぼSD-2に平行する形でA～D-6～9区において約10m、最大幅1m程度である。A-9区では底面上に35cm×40cmの波板状凹凸面が芯々距離にして平均50～60cmおきに連続して検出された。波板状凹凸面の底面は硬くしまっていた。

##### 溝状遺構4 第41図(SD-4)

L-4区でSD-1を切る形で検出された。最大幅50cm程度で長さ約10mの波板状凹凸面であると思われる連続した硬化面が検出された。床面上に40cm前後×35cm前後の波板状凹凸面の底面と考えられる遺構が、芯々距離で平均50～65cmおきに連続して検出された。

##### 溝状遺構5 第42図(SD-5)

A・B-10区においてSD-6と二股に分かれる形で検出された。晩期の溝状遺構(SR-1)を切っている。最大幅50cm程度、長さ約8.3m、深さ約10cmである。

##### 溝状遺構6 第42図(SD-6)

A・B-10区においてSD-5から二股に分かれる形で最大幅70cm程度、長さ約14.5m、深さ約20cmである。

##### 溝状遺構7 第42図(SD-7)

A・B-10区においてSD-6に切られる形で検出された。最大幅50cm程度、長さ約6m、深さ約11cmである。

##### 溝状遺構8 第42図(SD-8)

A・B-10区においてSD-6を切る形で検出された。最大幅90cm、長さ約10.62m、深さ約20cmである。途中で途切れているが、本来は同一であると思われる。

##### 溝状遺構9 第42図(SD-9)

A・B-10区においてSR-1を切る形で検出された。長さ2.56mにわたって、26～40cm×22～24cmの連続した硬化面が検出された。連続した硬化面の芯々距離平均約60cmである。

##### 溝状遺構10 第43図(SD-10)

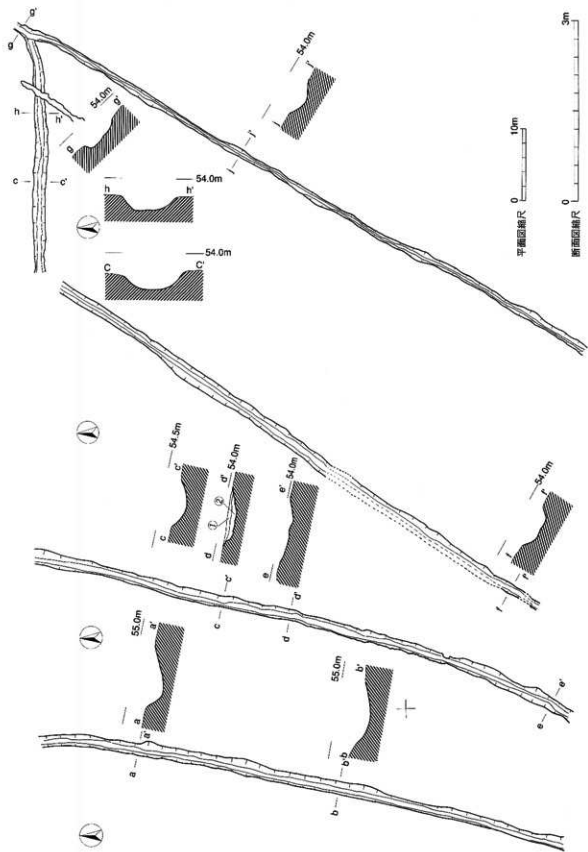
I・M-6区においてSD-2に平行する形で検出された。最大幅30cm、長さ約12mである。L-6区では底面上に40cm×35cm、深さ5.9cmの波板状凹凸面が平均約60cmおきに連続して検出された。

##### 溝状遺構11 第44図(SD-11)

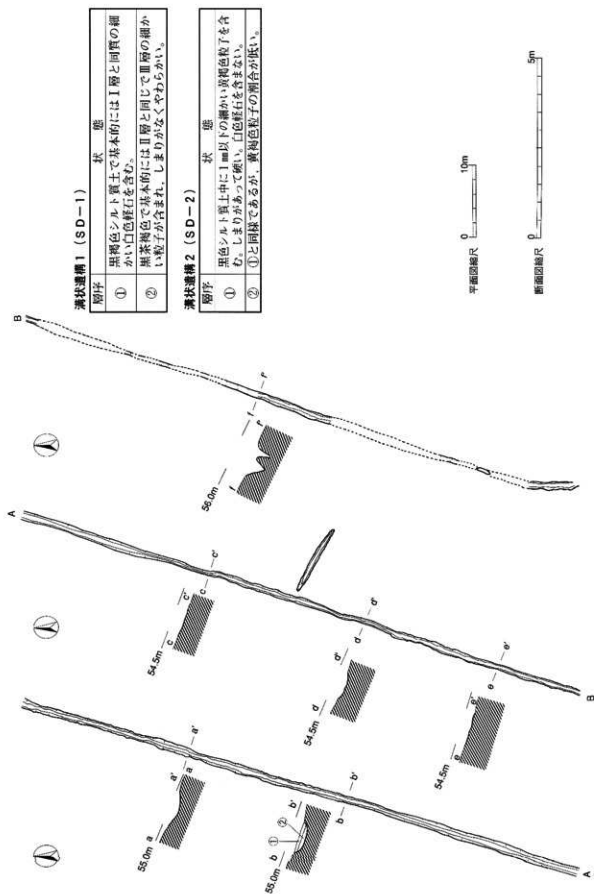
P-2区においてSD-1の最南端に位置する形で検出された。南北7m90cmにわたって、35cm×40cm、深さ25～50cmの波板状凹凸面が芯々距離90・50・90・100・80・350cmとやや間隔をあけて連続しており、他と性格を異にする。

##### 溝状遺構12 第45図(SD-12)

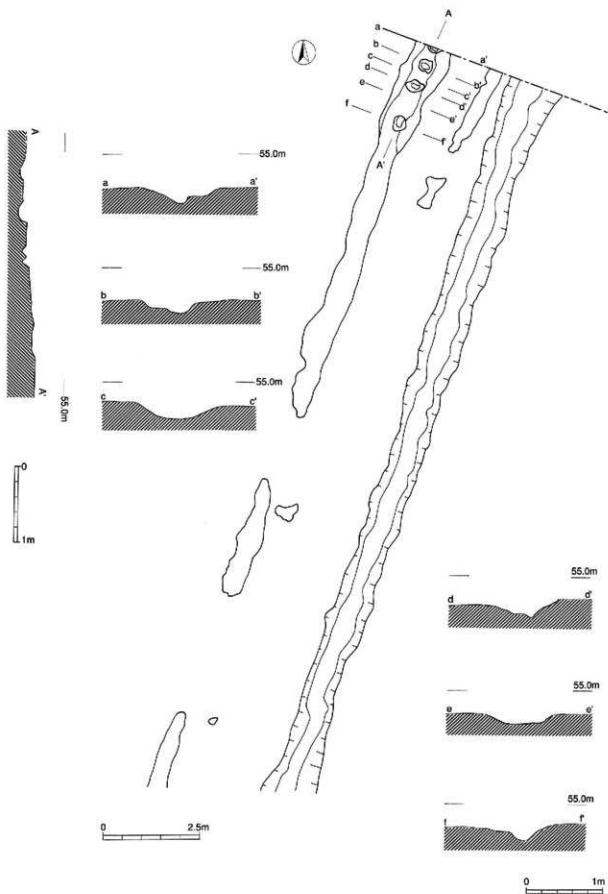
G・H-7区において波板状凹凸面および底面と思われる連続した硬化面が出上した。SD-1内でG-7区においてはやや不規則に並んでいるが、H-7区の南側では波板状凹凸面が規則的に出上した。芯々距離は50・75・65cmである。



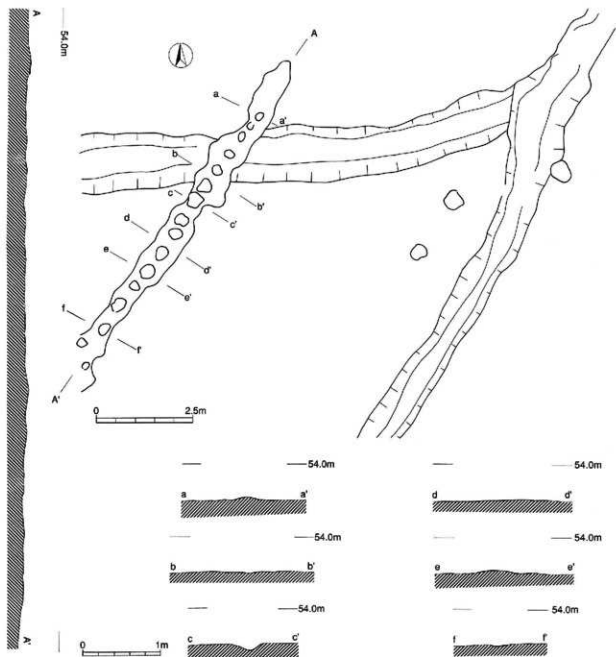
第38圖 中世溝状遺構 1 (SD-1)



第39図 中世溝状遺構 2 (SD-2)



第40図 中世溝状遺構3 (SD-3)



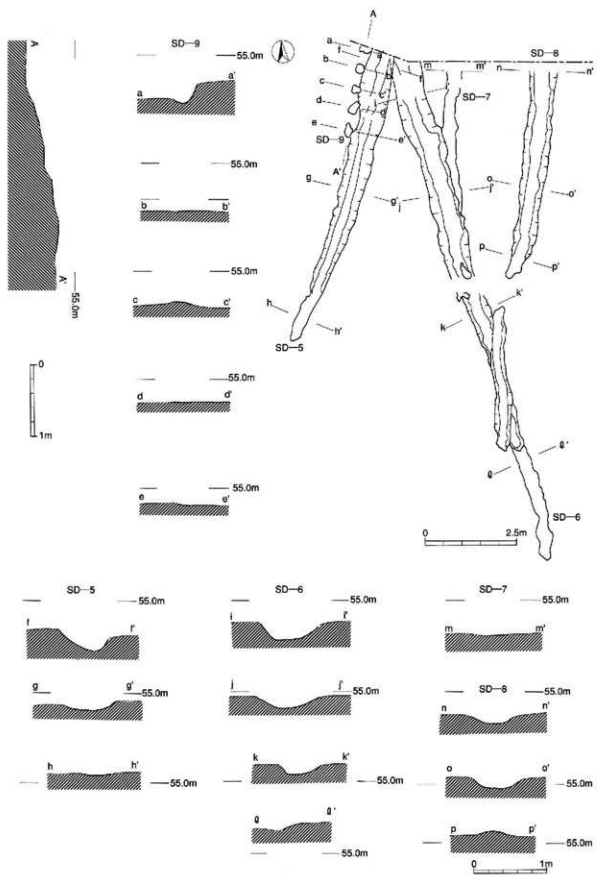
第41図 中世溝状遺構 4 (SD-4)

② 方形周溝(墓)第46図 (ST-1)

H-9区Ⅲ a 層上面において調査範囲東側の壁に切られる形で検出した。検出当初、調査範囲を広げ確認したが、崩落により全体を確認することはできなかった。東側を削平されているが、周溝は1条で1辺の長さが6 m 20cm、最大幅1 m 26cm、深さは浅い部分で約10cm、深い部分で約40cm程度である。周溝の断面はV字状を呈し、主体部を包圍していたと思われる。主体部は単体で長軸1 m 40cm、残存している短軸は50cmで

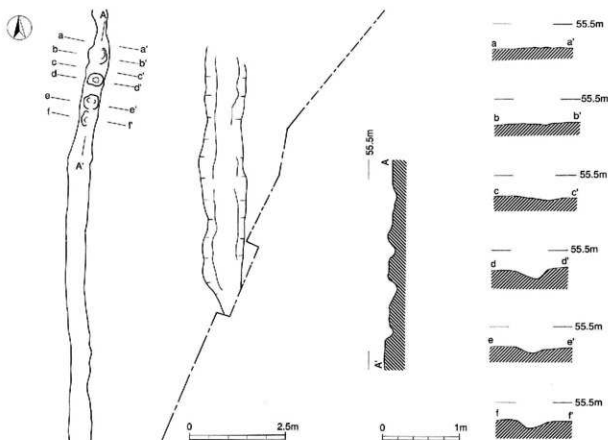
ある。深さは36cmで平面形状は不定形の楕円を呈する。

主体部内は多数の小礫を含むが、礫以外の遺物は見られなかった。周辺に小礫の検出される層が無いことから、河原あるいは礫層のある場所から、ある程度意図的に持ち込まれたものだと考えられる。また、主体部の下面には、樹痕かと思われる深い穴の中にも小礫が落ち込んでいた。SD-1・2に比べ長軸が北東に向いているため関連は判然としなない。



第42図 中世湖状遺構 5～9 (SD-5～9)





第43図 中世溝状遺構10 (SD-10)

周溝内からは帯金具の一部と思われる青銅製品が出土した。青銅製品(第46図)は破損しており、風化が進んでいる。残存部分の長軸は2.1cm、重さ2.75gである。中央部の二つの孔の直径は2mmで、並列して施されている。

#### 集石 第47図

G-8区で検出した。拳大の安山岩の円礫を主体としている。長径30cm、短径20cmのやや楕円形を呈する。礫上面から深さ11cmの掘り込みが確認できた。被熱の状況はほとんどうかがえなかった。礫は小さいもので3~5cm、大きいものでも7~10cmで比較的小型の礫で構成される。

#### (2) 中世の遺物

##### ① 白磁・青磁(第49図 229・230)

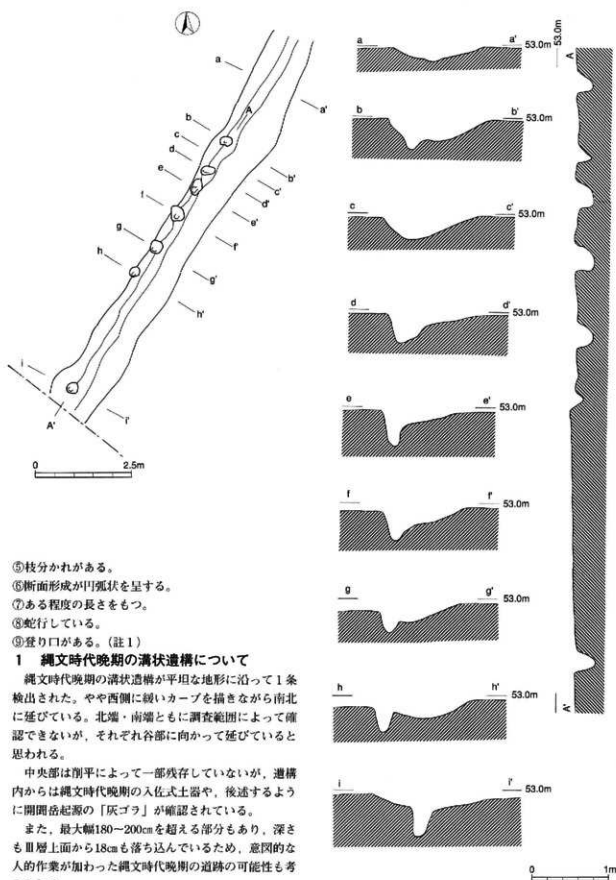
229は白磁の口差皿である。復元口径12.4cmである。230は青磁で椀花皿である。復元口径13cmである。内面に文様が見られる。

#### 第3節 小結

本遺跡は、出土遺物総数が約3,000点であったが、出土範囲が広く、溝跡などの遺構も検出された。

調査の結果、本遺跡は旧石器時代から中世までの複合遺跡であり、遺構・遺物の主体となるものは縄文時代早期・縄文時代晩期・中世であった。特に注目すべきは縄文時代晩期のもと思われる溝状遺構1条と、中世の溝12条(波板状凹凸面を含む)、方形周溝(竈)1基である。これら縄文晩期の遺構と、中世の遺構を中心として調査の成果と今後の課題を述べ、まとめとする。また、中世溝状遺構を「遺跡」と判断する基準を下記のように設定し、以下当てはまる項目については番号で記述する。

- ①硬化面を伴う。
- ②波板状凹凸面を伴う。
- ③直角に曲がる部分がカーブを切っている。
- ④バイパスを設けている。



- ⑤枝分かれがある。
- ⑥断面形成がU弧状を呈する。
- ⑦ある程度の長さをもつ。
- ⑧蛇行している。
- ⑨登り口がある。(註1)

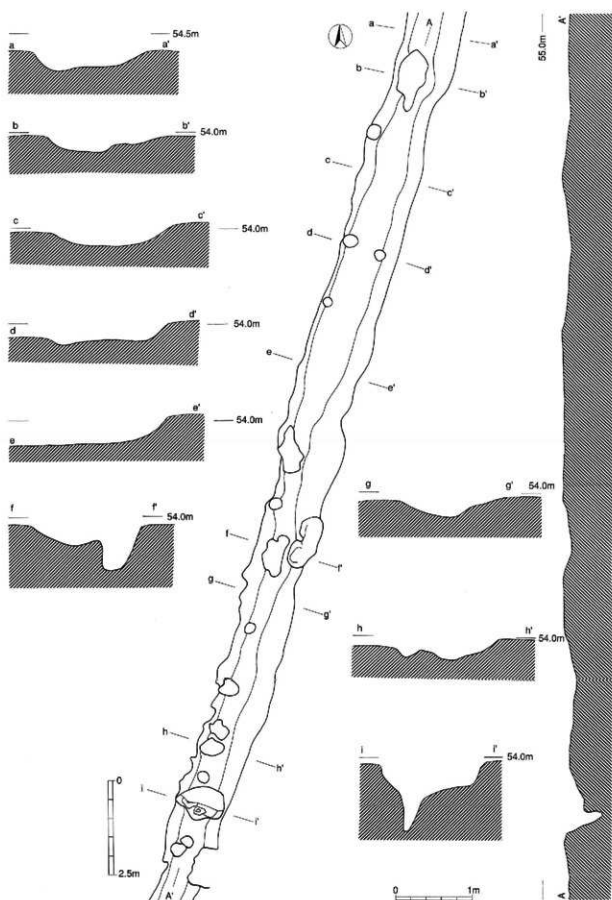
#### 1 縄文時代晩期の溝状遺構について

縄文時代晩期の溝状遺構が平坦な地形に沿って1条検出された。やや西側に緩いカーブを描きながら南北に延びている。北端・南端ともに調査範囲によって確認できないが、それぞれ谷部に向かって延びていると思われる。

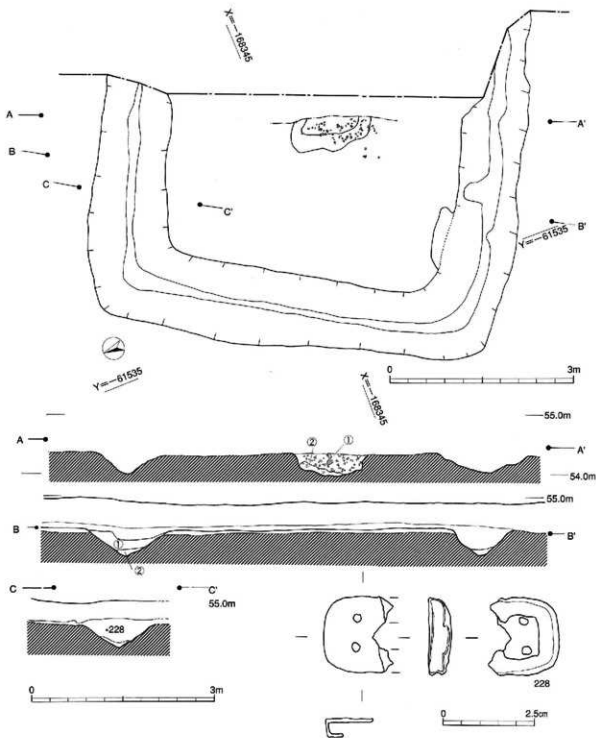
中央部は削平によって一部残存していないが、遺構内からは縄文時代晩期の入缶式土器や、後述するように開聞岳起源の「灰ゴラ」が確認されている。

また、最大幅180~200cmを超える部分もあり、深さもⅢ層上面から18cmも落ち込んでいるため、意図的な人的作業が加わった縄文時代晩期の道跡の可能性も考えられる。

第44図 中世溝状遺構11 (SD-11)



第45図 中世溝状遺構12 (SD-12)



方形周溝墓主体部内 小塚重量計測表

高さ (g)	0-10	10-20	20-30	30-40	40-50	50-60	60-70	70-80	80-90
個数	261	241	80	20	7	4	1	0	4

方形周溝墓 (主体部) 土層観察表 (A-A')

層序	状態
①	黒褐色土で黒色土をベースにし、目録のブロックが入る。しまりがなく、やわらかい。
②	黄茶褐色土で①よりも黄色味が強い。

方形周溝墓 (周溝部) 土層観察表 (B-B')

層序	状態
①	黒色土。しまりがありやや硬い。白色軽石は全く含まず。通常の目録と全く同じである。
②	しまりがあり、かなり硬い。目録の土に目録の土や2cm大のブロックが多く混じっている。

第46図 中世方形周溝 (墓) 及び遺構内出土遺物

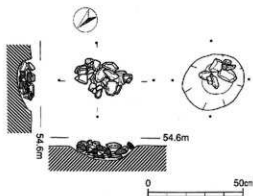
本遺跡においては晩期のものと考えられる遺構はその他に発見されておらず、比較・傍証する資料に乏しい。そのため、検出された溝状遺構が遺跡群全体の中で、どのような意味をもつのかは、現段階では不明である。今後、遺構の性格については、農業開発総合センター遺跡群の報告書刊行を経て明らかになっていくと思われる。

## 2 中世溝状遺構について

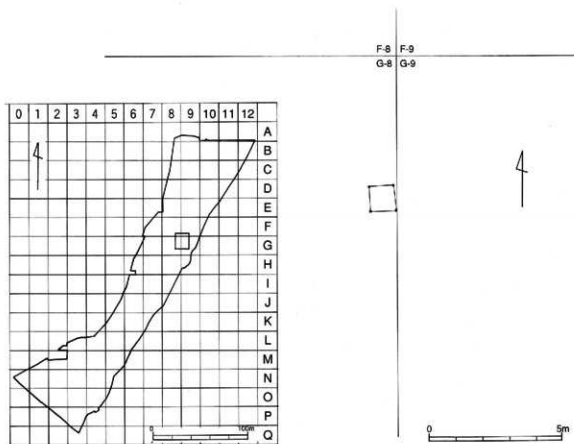
中世の溝状遺構が比較的フラットな地形の上で12条検出された。このうち6条が波板状凹凸面及び硬化面を伴う形で検出された。また、一部の溝状遺構は古里・西原遺跡とつながっている事も確認された。遺構内からは中世青磁・白磁の小破片が検出されており、Ⅲ層上面で検出されたことから中世のものとしてとらえた。また、それぞれが前述の①・②・③・⑤・⑥・⑦の条件を満たしており、遺跡の可能性が高いと考えられる。

隣接する古里遺跡における掘立柱建物跡の中で、2号・9号・10号の主軸がSD-1・2と平行を呈しており、何らかの関係が考えられる。特にSD-1は古里遺跡における溝状遺構とつながっている。

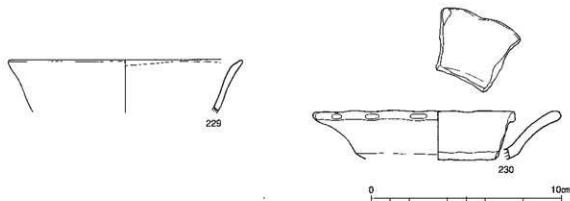
SD-1は南側において枝分かれをしているが、注目すべきは枝分かれ部分が北寄りに位置し、当時の人々の流れが北へ向かっていたことが予想できる点で



第47図 集石遺構



第48図 中世集石遺構配置図



第49図 中世白磁・青磁

白磁・青磁遺物観察表(中世)

採掘番号	遺物番号	種別	部位	出土区	層	法量 (cm)			胎土	備考
						口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
第49区	229	白磁	口縁部		表採	12.4	—	—	灰褐色	口ハゲ
	230	青磁	口縁部	H-9	表採	13	—	—	灰褐色	稜花皿

ある。「吹上郷十史」によると本遺跡周辺は中世薩摩国伊作荘にあたる。平安末期から高津莊藤原方伊作荘・口置南郷・日置荘などは平姓一族が支配しており、なかでも伊作平氏系一族は下司職という役職を保持し、南薩の各地域で土地や農民を治めていた。(註2) 南薩における政治経済の中心が伊作荘であり、SD-1は物資や人の流れが周辺地域から集まる幹線道路であったと考えられる。

SD-2は硬化面と波板状の凹凸面を含むSD-3と約50.5mにわたりほぼ並行して検出されており、これらは元来同一であったとすれば、芯々距離で平均約3m幅の道であった可能性もある。また、埋土が黒色で白色軽石を含んでいないためSD-1よりも時代はさかのぼると思われる。

SD-3・4・9・10・11・12において硬化面及び波板状凹凸面が検出された。特にSD-3・4・12において硬化面及び波板状凹凸面は比較的規則的に連続して並んでいる。その芯々距離は50cm~70cmおきに集中して規則的に連続しており、牛馬歩行痕の可能性が考えられる。(註1)

### 3 方形周溝(墓)

中世の方形周溝(墓)が一基検出された。長軸がSD-1・2に比べ、若干北東よりに開いている。しかし、SD-2のG-8区において検出されたやや短い溝状遺構との関連も考えられる。周溝の形態としては周溝数、葬法、主体部数により分類できる。(註3) 本遺跡における方形周溝(墓)は周溝が1条である。主体部は単体で小塚が確認されるのみで、元米の形態、葬法などは確認できない。また、後述するように主体

部内の埋土分析からも生物遺体の存在は確認できなかったため、本遺跡の方形周溝(墓)の用途は判然としないところがある。しかし、中世における溝状遺構、隣接する古里遺跡の中世掘立柱建物跡などの遺構から当時の人々の生活空間と何らかの関連があったと考えられる。(註4)

今後、農業開発総合センター遺跡群の報告書の刊行により本遺跡と本遺跡遺構の全貌が明らかになることを期待する。

(註1)

東 和幸 2003 「波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論」  
「縄文の森から」 創刊号 鹿児島  
県立埋蔵文化財センター  
2004 「溝状遺構の性格」 「縄文の森から」  
第2号 鹿児島県立埋蔵文化財セン  
ター

(註2)

吹上郷十誌 2003 「遺史編一」

(註3)

太田三喜 1993 「中世の周溝集」 豊田先生古希記念  
論文集 豊田直先生古希記念論  
文集刊行会 莫陽社 1992

(註4)

上床 真 2002 「九州における古代・中世の周溝(墓)  
遺構の構成と着下層の検討」  
一鹿児島県周溝集を中心として一  
「小倉畑遺跡」鹿児島県立埋蔵文  
財センター報告書 (34)

付 編

## I. 農業開発総合センター遺跡群における 火山灰分析

注 今回は礎石ヶ原遺跡における遺構内火山灰及び  
り線の分析にあたり、比較試料として同じ農  
業開発総合センター遺跡群の諏訪前遺跡の成分  
分析の結果を掲載した。

### 1. はじめに

鹿児島県域に分布する後期更新世以降に形成された  
地層の中には、始良カルデラや鬼界カルデラなど多く  
の火山から噴出したテフラが数多く認められる。テフ  
ラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフ  
ラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、  
遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることが  
できるようになっている。

農業開発総合センター遺跡群の発掘調査では、「灰  
コラ（縄文時代晩期～弥生時代前期、開闢火山起  
源；成尾ほか、1997）」と呼ばれているテフラに同定  
される可能性の高いテフラが認められた。そこで重鉱  
物組成分析と屈折率測定を行って特徴の記載を行い、  
試料間の比較検討を行うことになった。分析の対象と  
なった試料は、礎石ヶ原遺跡の縄文時代晩期溝状遺構  
（以下SR1）と諏訪前遺跡のSK28-6、および知覧町浮  
辺において採取された灰コラの標準試料（鹿児島県立  
博物館、成尾英仁学芸員による）の合計3点である。

### 2. 重鉱物組成分析

#### (1) 分析試料と分析方法

重鉱物組成分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去
- 3) 80°Cで恒温乾燥
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別
- 5) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱  
物組成を求める。

#### (2) 分析結果

重鉱物組成分析の結果をダイヤグラムにして図1  
に、その内訳を表1に示す。試料中に含まれる重鉱物  
の量は、いずれの試料においてもさほど多くはなかつ  
た。SR1に含まれる重鉱物は、量の多い順に単斜輝

石(53.2%)、磁鉄鉱(20%)、斜方輝石(16.4%)、カ  
ンラン石(6%)、角閃石(3.6%)である。

SK28-6に含まれる重鉱物も、量の多い順に単斜輝石  
(43.6%)、磁鉄鉱(23.2%)、斜方輝石(23.2%)、カ  
ンラン石(8.4%)、角閃石(1.2%)である。

灰コラに含まれる重鉱物は、量の多い順に単斜輝石  
(55.2%)、カンラン石(21.2%)、磁鉄鉱(14%)、斜  
方輝石(8%)、角閃石(0.8%)である。いずれの試  
料も、単斜輝石やカンラン石が多く含まれていること  
や、角閃石が少量含まれている点で共通した特徴が認  
められる。

### 3. 屈折率測定

#### (1) 測定方法

温度一定型相率法(新井, 1972, 1993)により、  
上述3試料に含まれる屈折率の測定を行った。

#### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。SR1に含まれる  
斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は、1.710-1.730である。また  
SK28-6に含まれる斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は、1.706-  
1.711である。さらに灰コラに含まれる斜方輝石の屈  
折率( $\gamma$ )は1.702-1.710である。3試料に含まれる斜  
方輝石の屈折率には、さほど類似した値は得られなかつ  
た。ただし、SK28-6と灰コラの斜方輝石の屈折率に  
は重複する部分がある。

なお、SR1に含まれる斜方輝石については、その  
値から約2.4～2.5万年前に始良カルデラから噴出した  
始良入火砕流堆積物(A-Ito, 荒牧, 1969)や始良  
Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松木ほか,  
1987, 池田ほか, 1995)に由来するものと考えられる。  
以上のように、灰コラとそれに類似した特徴をもつ開  
闢火山起源のテフラについては、屈折率による同定  
はかなり難しい可能性があると思われる。

### 4. 小結

重鉱物組成分析と屈折率測定により、鹿児島県農業  
開発総合センター遺跡群において採取されたテフラ試  
料と、開闢火山起源の灰コラの同定を試みた。その結果、  
重鉱物組成において共通した特徴が認められた。



文献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148

荒牧重雄 (1969) 鹿兒島県分地域地の地質と火砕流堆積物。地質雑, 75, p.425-442.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西山史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の14C年代。第四紀研究, 26, p.79-83.

成尾英仁・永山修一, 下山 覚 (1997) 開聞島の古墳時代噴火と平安時代噴火による災害—遺跡発掘と史料からの検討。月刊地球, no.214, p.215-222

表1 農業センター遺跡群における重鉱物組成分析結果

地点	試料	o l	o p x	c p x	h o	b i	m t	その他	合計
建石ヶ原	SR1	15	41	133	9	0	50	3	250
諏訪前	SK28-6	21	58	109	3	0	58	1	250
知覧町浮辺	灰コラ	53	20	138	2	0	35	0	250

※表中の数字は粒子数 o l : カンラン石, o p x : 斜方輝石, c p x : 単斜輝石, h o : 角閃石  
b i : 黒雲母, m t : 磁鉄鉱

表2 農業センター遺跡群における屈折率測定結果

地点	試料	斜方輝石
建石ヶ原	SR1	1.710-1.730
諏訪前	SK28-6	1.706-1.711
知覧町浮辺	灰コラ	1.702-1.710

※屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1973) による

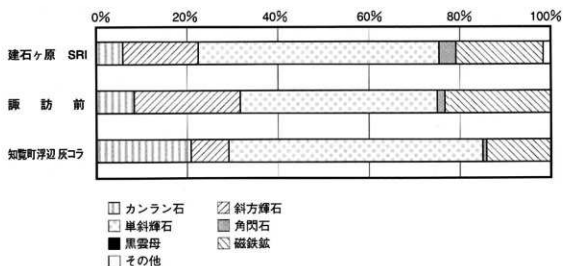


図1 農業センター遺跡群の重鉱物組成ダイヤグラム

## II. 農業開発総合センター遺跡群（諏訪前遺跡）における放射性炭素年代測定

### 1. 試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SK27内出土 入佐式土器 (14435)	土器付着煤	酸・7%の酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

### 2. 測定結果

試料名	$\delta^{13}C^{(1)}$ (‰)	補正 $^{14}C$ 年代 $^{(2)}$ (年BP)	暦年代 (西暦) $^{(3)}$	測定No.
No.1	-25.5	2970 $\pm$ 85	1 $\sigma$ : BC1300~1280, BC1270~1040	NUTA-6419

\*NUTAは、名古屋大学年代測定資料研究センターの測定番号

### 1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

### 2) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。 $^{14}\text{C}$ の半減期は、5,568年を用いた。

### 3) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値を使用した。 $1\sigma$ (68%確率)は、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を暦年代補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の $1\sigma$ 値が表記される場合もある。

## Ⅲ. 農業開発総合センター遺跡群

### (諏訪前遺跡)における植物珪酸体分析

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸( $\text{SiO}_2$ )が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

#### 2. 試料

分析試料は、諏訪前遺跡で検出された土坑(SK28, SK29)の埋土から採取された7点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対して直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加  
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10 $^{-6}\text{g}$ )をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ススキ属(ススキ)の換算係数は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75は0.30である。

#### 4. 分析結果

##### (1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

##### [イネ科]

キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ属A(チガヤ属など)

##### [イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク

節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、多角形板状(ブナ科コナラ属など)、その他

## (2) 植物珪酸体の検出状況

### 1) SK28 (図1)

上部を灰コラ層で覆われた十坑の埋土(試料1~3)について分析を行った。その結果、各試料からクスノキ科が多量に検出され、ウシクサ属Aや棒状珪酸体も比較的多く検出された。また、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型、ブナ科(シイ属)なども少量検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過人に評価する必要がある(1999, 杉山)。

なお、イネ、オオムギ属(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は、SK28およびSK29のいずれの試料からも検出されなかった。

### 2) SK29 (図2)

上部を灰コラ層で覆われた十坑の埋土(試料1~4)について分析を行った。その結果、各試料からクスノキ科や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ属Aも比較的多く検出された。また、ススキ属型、クマザサ属型、ブナ科(シイ属)なども少量検出された。

## 5. 植物珪酸体分析から推定される種生と環境

縄文時代晩期とされる上坑の埋没当時は、遺跡周辺にクスノキ科を主体としてブナ科(シイ属)なども生育する照葉樹林が分布していたと考えられ、部分的に

ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところも見られたものと推定される。

## 文献

- 杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点, 植生史研究, 第2号, p.27-37.  
藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一數種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.  
杉山真二(1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史, 第四紀研究, 38(2), p.109-123.

## IV. 農業開発総合センター遺跡群におけるリン・カルシウム分析

### 1. はじめに

上坑中のリン酸とカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、農耕地では施肥による影響が大きい。したがって、目的とする試料の分析結果だけから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難であり、比較試料(遺物・遺構外の試料)との対比を行うことが必要である。なお、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は通常0.1~0.5%程度、耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。

農業開発総合センター遺跡群の発掘調査では、方形周溝とされる遺構や幼児の墓とされる埋設土器が検出された。ここでは、これらの遺構や遺物の性格を把握する目的で分析を行った。

### 2. 試料

試料は、礎石ヶ原遺跡の方形周溝(墓)(ST1)および諏訪前遺跡の埋設土器(SJ2)から採取された計19点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

### 3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム(日本電子

併製、JSX3201)を用いて、ファンダメンタルパラメータ法(PF法)による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

- 1) 試料を絶乾(105°C・24時間)
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉碎
- 3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/cm<sup>2</sup>プレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。

#### 4. 分析結果

各元素の定量分析結果を表1、表2に示し、リン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)とカルシウム(CaO)の含量を図1に示す。

#### 5. 考察

##### (1) 礎石ヶ原遺跡の方形周溝(墓)(ST1)

主体部(土坑)の埋土におけるリン酸含量は、0.8~1.5%であり、下部(底部)に向かって減少傾向を示している。比較試料(表土層)では、リン酸含量が2.1%とかなり高い値であることから、表土層の耕作による施肥の影響が埋土に及んでいる可能性が考えられる。カルシウム含量については、比較試料よりも低い値である。

以上のことから、方形周溝(墓)(ST1)の主体部(土坑)にリン酸やカルシウムを多量に含む生物遺体が存在していたと判断することは困難である。

##### (2) 諏訪前遺跡の埋設土器(SJ2)

土器内土壌(上部、中部、下部)におけるリン酸含量は、1.1~1.4%であり、下部(底部)に向かって増加している。これは、比較試料の0.9~1.1%よりもやや高い値である。なお、カルシウム含量については、比較試料よりも低い値である。

以上のことから、埋設土器(SJ2)の内部にはリン酸を多く含む生物遺体が存在していた可能性が考えら

れる。

#### 6. まとめ

以上のように、諏訪前遺跡の埋設土器(SJ2)については、土器の内部にリン酸を多く含む生物遺体が存在していた可能性が認められた。礎石ヶ原遺跡の方形周溝(墓)(ST1)の主体部(土坑)については、リン酸やカルシウムを多量に含む生物遺体の存在を確認するには至らなかった。

#### 文献

竹道紘(1993)リン分析法, 日本第四紀学会編, 四紀試料分析法, 2, 研究対象別分析法, 東京大学出版会, p.38-45.

## 第Ⅵ章 古里遺跡・西原遺跡

### 第1節 古里遺跡

#### 1 遺跡の立地及び調査概要

##### (1) 遺跡の立地 (第1図)

古里遺跡は吹上町大字和田字古里に所在するもので、農業大学校の教育管理棟・学生食堂・体育館・武道館等の建設地である。遺跡の東側は碓石ヶ原遺跡、西側は西原遺跡に接し、南側は金峰町との町境にあたり大野原台地へと続いている。

##### (2) 調査概要

調査は、平成10年度にⅡ層及びⅢa層の調査を実施した。その結果、中世以降のものと思われる11棟の掘立柱建物跡と4条の溝状遺構が検出されたほか、土師器・須恵器・滑石製石鍋の破片・中国製の青磁などが出土した。

平成11年度は、掘立柱建物跡の調査を実施するとともに、農業大学校建物予定地にトレンチを設定し下層

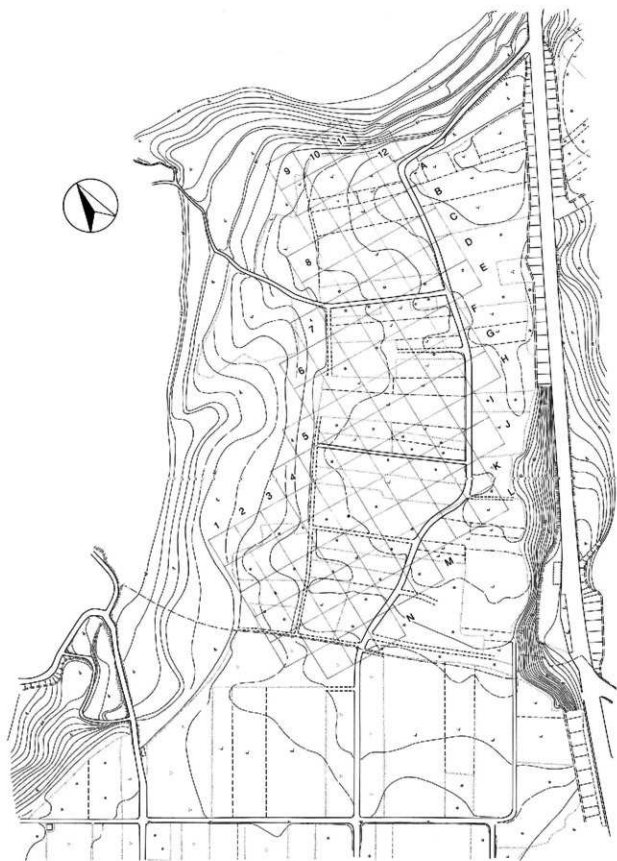
の遺構及び遺物包含層の確認を行った。その結果、新たに掘立柱建物跡が1棟検出され、計12棟になった。また、Ⅳ層から縄文時代早期の上器や黒曜石製石鏃やチップ等が出土したので拡幅調査を行った。拡幅調査の結果、黒曜石チップ等の散布状況は確認できた。しかし、それ以上の包含層の広がりはなく、遺構の検出や遺物の出土がなかった。

##### 2 遺跡の層序

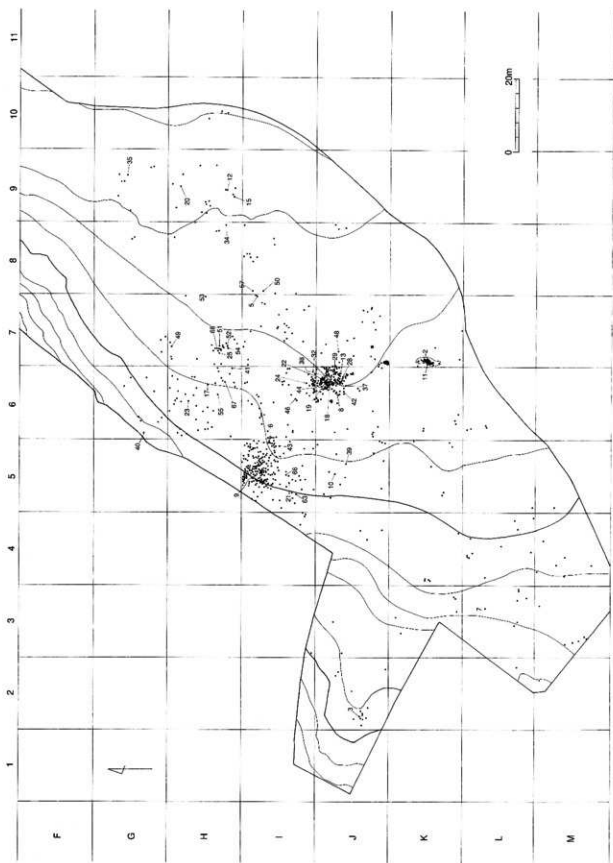
本遺跡の層位は、農業開発総合センター遺跡群全体の基準となっている台地部分の層位と基本的には変わらない。第3図はG-8区、H-6区、I-6区、J-6・7区の北側の土層断面図で、色の付いた部分はⅢ層・Ⅳ層・Ⅴ層である。表上は耕作または樹木の伐根の影響によりかなり攪乱されており、部分的にはⅤ層まで達している。Ⅱ層は削平のためほとんど残存しておらず、Ⅲa・Ⅲb層は部分的に残存していた。本調査は、Ⅲa層まで行い、下層確認調査をⅤ層まで行った。



第1図 古里遺跡・西原遺跡位置図 (1 : 25,000)

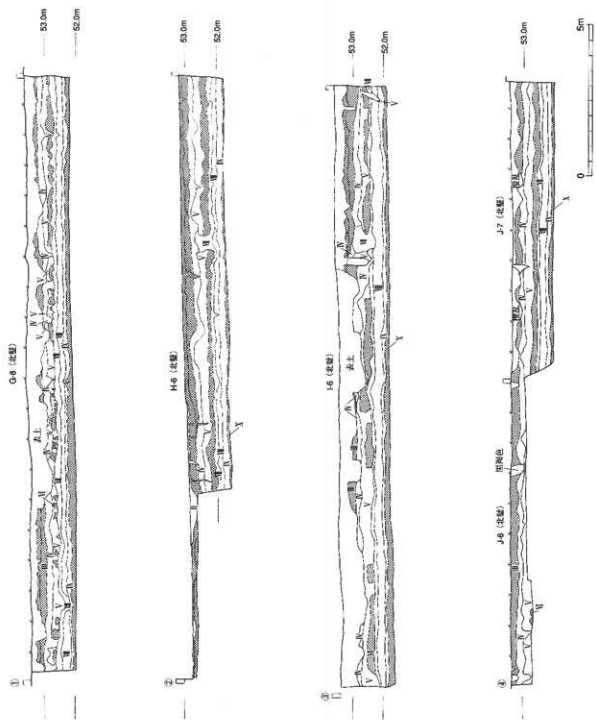


第2図 古里遺跡・西原遺跡周辺地形図及びグリッド図

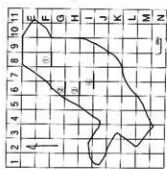


第3圖 古里遺跡全遺物出土狀況圖





第4図 古里遺跡土層断面図(抜粋)



- I層：耕作土（部分的にV層まで達するものもある）
- II層：黒色土（ほとんど残存せず）
- III層：アカキヤ相当層だがはつきりしない。
- a：こげ茶褐色。
- b：茶褐色に棕色のパミスが点在。
- IV層：アカキヤ下の茶褐色系の細粒土で層厚より目が細かい。
- V層：南平大仏遺上部の黒色の細粒土でこの層の底辺が見られる。
- VI層：南平大仏遺で黄褐色のパミスを多く含む。
- VII層：チャッコ層上部の堅粘性の土
- VIII層：チャッコ層で非常に粘性が強い。
- IX層：チャッコ層よりやや色が黒い。粘性が強い。
- X層：黄色シラスで黒色軽石を含む。

### 3 発掘調査の成果

#### (1) 縄文時代の調査

##### ① 調査の概要

6つのトレンチを設定し確認調査を行った結果、縄文時代早期～晩期の上層、黒曜石製石鏃やチップ等が出土した。その後、各トレンチ周辺を拡編調査したが、遺構・遺物は発見されなかった。

##### ② 遺物

#### 縄文時代早期・前期の土器 (第6図)

縄文時代早期・前期のものと思われる土器がⅢb層及びⅡ層から4点出土したが本来の層ではない。1は口縁部がやや外反している。口唇部にはキザミ目を有し、口縁部には斜位の貝殻刺突文が施される。石版式土器に比定できるものと思われる。2は胴部から底部にかけての破片である。胴部には貝殻条痕が不規則に施される。石京西タイプの土器に比定できるものと思われる。3は地文の条痕が浅く、口縁部下位に2条のミズメノミ状突帯をめぐらす。口縁部は先細りである。森B式1類に属する土器に比定できるものと思われる。4は底部である。側面には横位・斜位の貝殻条痕文がわずかに施され胴部に向け外傾している。土器の型式は不明だが、出土した層から前期の上層と考えられる。

#### 縄文時代晩期の土器 (第7図)

縄文時代晩期のものと思われる土器がⅢa層及びⅡ層から11点出土し、2点は表層で取り上げた。

5～11は粗製深鉢と思われる土器である。5は口縁部、6は頸部、7は胴部でいずれも小破片で、全体の器形等は明らかではない。調整はいずれもナデであるが、5は丁寧で器面の条痕がはっきりと残っている。実体顕微鏡で胎土を観察したところ、5と7は長石が多く含まれていた。

8～11は底部で、張り出しがわずかなものもあるが、底面が外側へ張り出している。8と11は平底で、9と10はやや上げ底ぎみである。調整は、8～10は外・内面ともナデ、11は外面はナデ、内面は磨きによって行われている。

12～17は精製深鉢と思われる土器の口縁部である。12は外反しており、外面に1条のヘラ沈線が施されている。13～16は明瞭な轡をもつが、13から16へ移るにつれて口縁部の間隔が狭くなっている。13は外面に2条のヘラ沈線が施されている。

17は底部で、丁寧なナデによる調整が施されている。

#### 縄文時代の石器 (第8・9図 18～26)

11・1-5～9区のⅣ層～Ⅱ層で縄文時代のものであると思われる石器が8点出土した。

#### A 石鏃・石核 (第8図)

18～23は石鏃である。18～19は上半鼻産黒曜石製である。

18は最大長が約1.4cm、最大幅が約1.5cmの小型の石鏃である。両側面は鋸歯状に仕上げられている。形状はほぼ正三角形で、抉りの浅い基部である。基部の片側が一部欠損している。

19は側面の中央部が鋸歯状に仕上げられている。半分が欠損しているため、形状・基部とも断定できないが、ほぼ二等辺三角形の形状で抉りの深い基部と推定できる。

20は厚さ0.5cmとやや厚手で、石材は頁岩である。鋸歯状の仕上げは見られない。形状はほぼ二等辺三角形で、抉りの深いU字形をした基部である。

21は灰色のチャート製である。鋸歯状の仕上げは見られない。基部は片側が欠損しているものの中央部付近から外側に開くような形状となっている。

22は良質の黒曜石製である。素材割片の腹面を中央に残し、両側面とも鋸歯状に仕上げられている。形状はほぼ二等辺三角形で、抉りの深い基部である。基部の片側が一部欠損している。

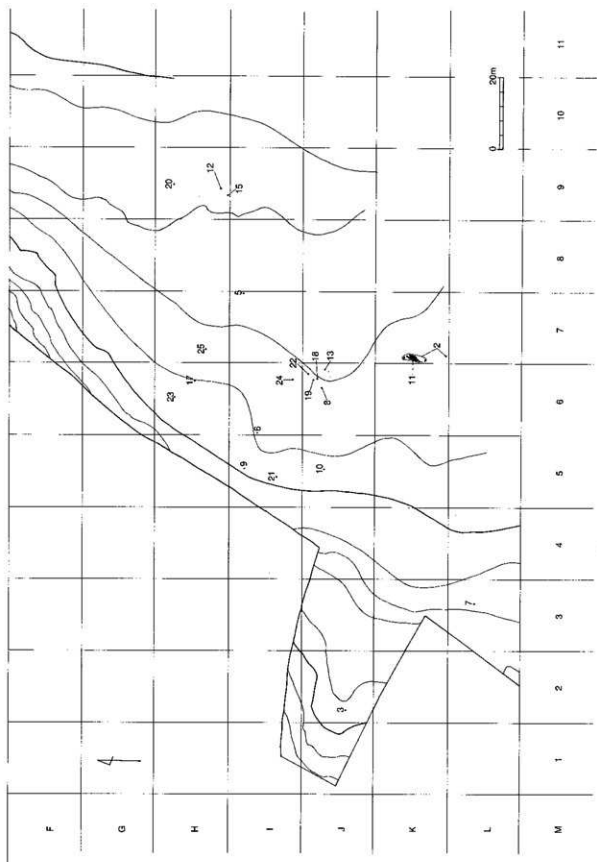
23は灰色がかった西北九州産の黒曜石を石材としたものである。鋸歯状の仕上げは見られない。形状はほぼ二等辺三角形で、抉りの深いU字形をした基部である。基部の片側が一部欠損している。

24は上半鼻産黒曜石製の石核である。厚さ約0.95cmとやや小さめだが石核とした。しかし、両面に加工の入った他の石器の可能性もある。作業面は単設の打面から連続で2枚の剥離痕が確認できる。背面は求心状の剥離により構成されている。

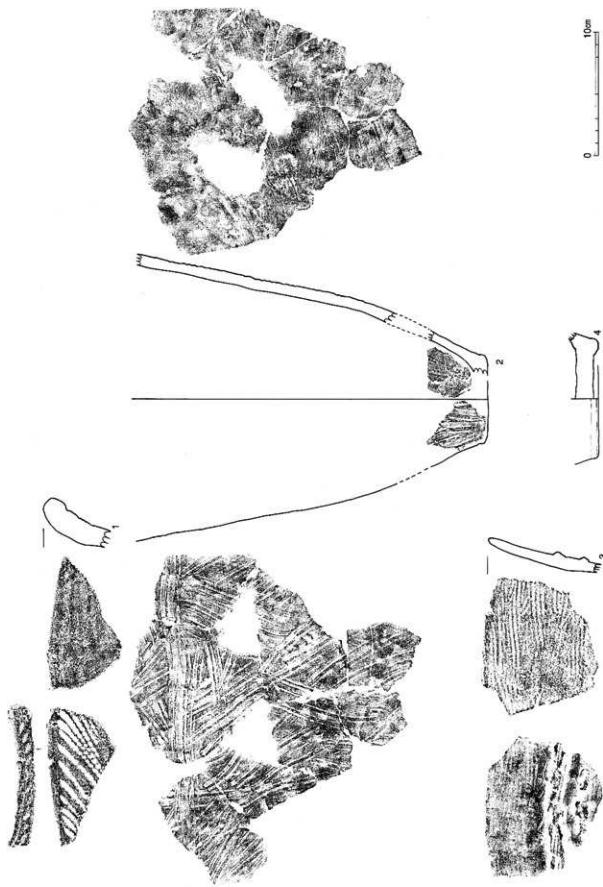
#### I 砥石・打製石斧 (第9図)

25は砂岩製の砥石である。磨面が4面確認され、いずれも使用による曲面を成している。一部欠損している。

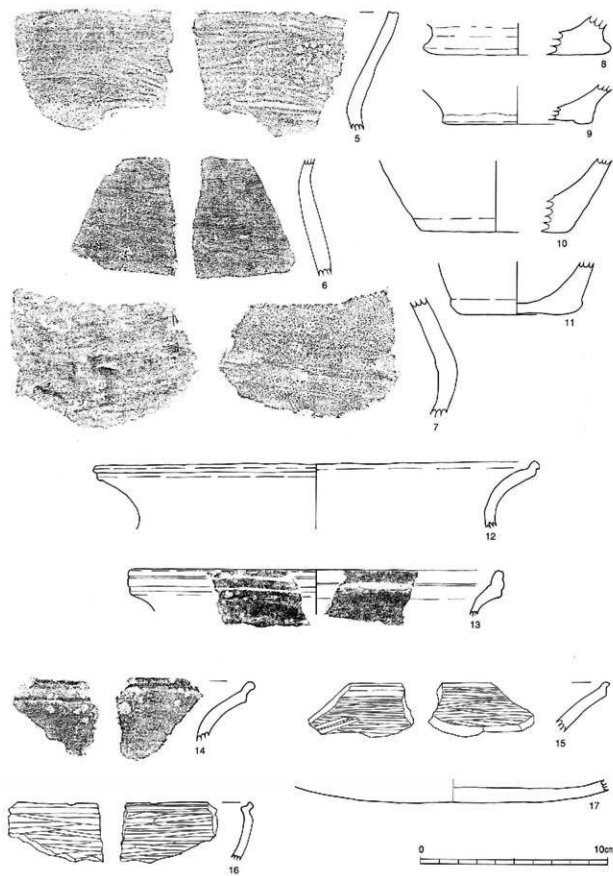
26は表層で取り上げた粘板岩質製の扁平打製石斧である。腹面はほぼ大割面構成され、周縁にのみ面的な加工が施されている。



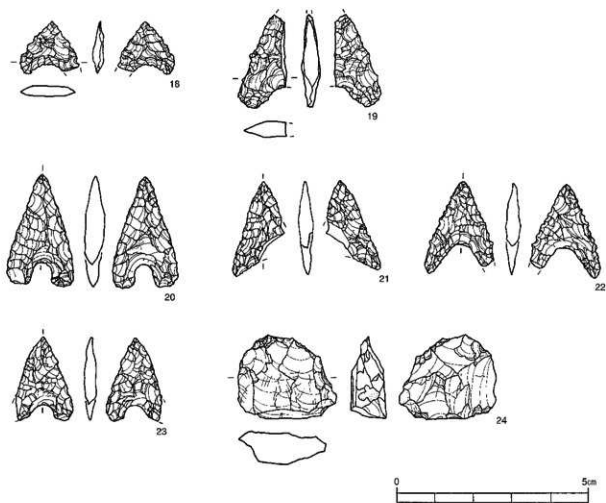
第5図 縄文時代遺物出土状況 (掘削分)



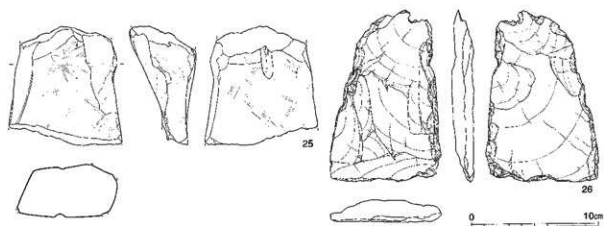
第6圖 縄文時代早期・前期出土土器



第7図 縄文時代晩期出土土器



第8図 縄文時代出土石器1 (石鏃・石核)



第9図 縄文時代出土石器2 (砥石・打製品石斧)

縄文時代早期・前期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区 遺構	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	蛭石	その他				
第6図	1	SB09P11		明茶褐色	淡茶褐色	○	○	○	—	良	貝殻刺突	ナデ	
	2	K-7	Ⅲ	淡茶褐色	茶褐色	—	○	○	—	々	貝殻条痕	ナデ	
	3	J-2	Ⅱ	淡黒褐色	淡黒褐色	—	○	—	—	々	突 帯	ナデ	頸はミズル法
	4	—	Ⅲ	淡黒褐色	淡茶褐色	—	○	—	—	々	貝殻条痕	ナデ	

縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区 遺構	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	蛭石	その他				
第7図	5	I-7	Ⅱ	暗茶褐色	明茶褐色	○	○	○	—	良	無 文	ナデ	
	6	I-6	Ⅱ	淡茶褐色	白濁	○	○	○	—	々	無 文	ナデ	
	7	L-3	Ⅱ	淡茶褐色	白濁	○	○	○	—	々	無 文	ナデ	
	8	J-6	Ⅱ	暗茶褐色	淡黄褐色	○	○	—	—	々	ナデ	ナデ	
	9	I-5	Ⅲ	暗茶褐色	淡黒褐色	○	○	—	—	々	ナデ	ナデ	
	10	J-5	Ⅱ	淡黒褐色	淡茶褐色	—	○	—	—	々	ナデ	ナデ	
	11	K-7	Ⅲ	茶褐色	黒褐色	—	○	—	—	々	ナデ	ナデ	
	12	H-9	Ⅲ	黄褐色	黄褐色	○	○	○	—	々	ヘラ沈線	ナデ	
	13	J-6	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	—	○	—	火山ガラス片	々	ヘラ沈線	ナデ	
	14	—	表採	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	—	—	々	ナデ	ナデ	
	15	H-8	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	—	○	—	—	々	ナデ	ナデ	
	16	—	表採	淡黒褐色	淡黒褐色	—	○	○	—	々	ナデ	ナデ	
	17	H-6	Ⅱ	白濁	淡黄褐色	—	○	○	—	々	ナデ	ナデ	

縄文時代石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第8図	18	Ⅳ	石鎌	J-6	黒曜石	1.4	1.5	0.3	0.4	上牛鼻産の黒曜石
	19	Ⅳ	石鎌	J-6	黒曜石	2.45	1.2	0.5	1	上牛鼻産の黒曜石
	20	Ⅱ	石鎌	H-9	頁岩	2.9	1.7	0.5	1.88	—
	21	Ⅲ	石鎌	I-5	チャート	2.45	1.2	0.3	0.73	灰色のチャート
	22	Ⅲ	石鎌	J-6	黒曜石	2.5	1.8	0.35	0.92	良質の黒曜石
	23	Ⅱ	石鎌	H-6	黒曜石	2.2	1.45	0.25	0.77	西北九州産の黒曜石
	24	Ⅲ	石枝	I-6	黒曜石	2.2	2.5	0.95	5.2	上牛鼻産の黒曜石
第9図	25	Ⅱ	砥石	H-7	砂岩	9.6	8.9	5.3	375.4	一部欠損
	26	表採	打製石斧	—	粘板岩質	12.9	8.95	1.8	226	—

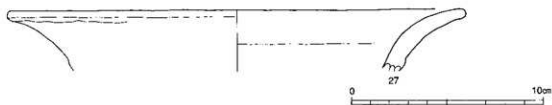
(2) 古墳時代の調査

古墳時代の土器がJ-6区のⅡ層から1点出土した。

遺物 (第10図)

27は、外反する口縁部を有する壺形土器である。

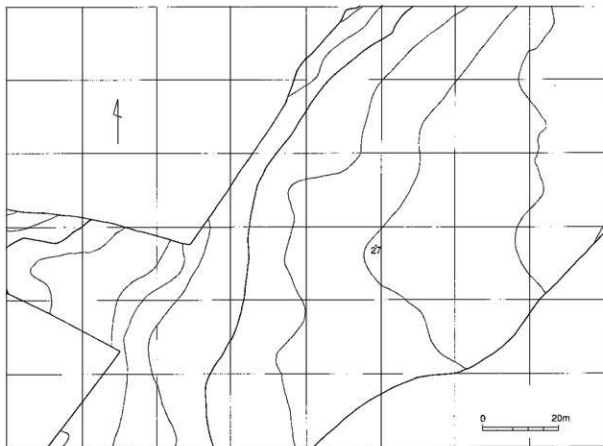
外面は横方向のハケナデ調整、内面はナデ調整である。胎土は、長石を多く含んでおり、角閃石、火山ガラスも数片見られた。成川式土器に比定できるものと思われる。



第10図 古墳時代出土土器

古墳時代土器観察表

押図 番号	遺物 番号	出土区 遺 構	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内面	備考
				外	内	石英	長石	燧石	その他				
第10図	27	J-6	Ⅱ	茶褐色	茶褐色	—	○	○	火山ガラス数片	良	ハケナデ	ナデ	



第11図 古墳時代遺物出土状況 (掲載分)



### (3) 中世の調査

#### ① 調査の概要

Ⅱ層及びⅢ層上面で、中世以降のものと思われる12棟の掘立柱建物跡と4条の溝状遺構が検出された。また、土師器・須恵器・滑石製石調の破片・中国製の青磁等が出土した。

#### ② 遺構

##### A 掘立柱建物跡 (12棟)

12棟からなる建物群は、溝状遺構で囲まれており、1つの集落を形成していたと思われる。建物跡は、建物の主軸方向や6～8号が重複した形で検出されたことから考えると3～5の時期にわたるとと思われる。3号は建物規模が1間×3間であるが、1間が2間分あるので2間×3間としてとらえることにした。2号・7号・8号・11号については、柱間芯間距離のみ観察表に掲載している。なお、数値は平均値で小致第1位を四捨五入して表してある。

##### 1号掘立柱建物跡 (第14図)

J-6・7区で検出された。2間×3間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。柱穴の長径は約40cm、短径は約31cm、深さは約56cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は、全柱穴とも非常にきめが細かく粘性が低い黒褐色砂質土とアカホヤで、中には粘性の低い暗灰褐色・暗茶褐色の砂質土を含むものもあった。柱穴8から東掘層系こね鉢が出土した。

##### 2号掘立柱建物跡

J-8区で検出された。2間×3間の大きさで主軸はほぼ南北方向と思われる。

##### 3号掘立柱建物跡 (第15図)

H・I-9区の区境で検出された。2間×3間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。北側に庇をもつ。柱穴の長径は約30cm、短径は約27cm、深さは約32cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は粘り気強い黒褐色のものが大部分で、下層部にアカホヤが混ざっているものがあった。

##### 4号掘立柱建物跡 (第16図)

H・I-8・9区の境目付近で検出された。2間×3間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。柱穴の長径は約32cm、短径は約29cm、深さは約27cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は、黒褐色土が主体で、中にはアカホヤが粒状に入っているものもあった。

##### 5号掘立柱建物跡 (第17図)

H-8区で検出された。2間×3間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。柱穴の長径は約49cm、短径は約34cm、深さは約62cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は、粘土質の黒い土が主体で、アカホヤが混ざっているものもあった。

##### 6号掘立柱建物跡 (第18図)

H-7区で検出された。2間×3間の大きさである。柱穴の長径は約34cm、短径は約27cm、深さは約41cmを測るが一定ではない。柱穴の埋土は、黒褐色土とそれにアカホヤが混ざったものがあった。また、西側では重複した形で大きさがいずれも2間×3間の7号、8号掘立柱建物跡も検出されたが、時期の新口については判断できなかった。

##### 9号掘立柱建物跡 (第19図)

H-7区で検出された。2間×3間の大きさで主軸はほぼ南北方向である。南側に庇をもつ。柱穴の長径は約44cm、短径は約30cm、深さは約51cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は、黒土にアカホヤが点在したものがあった。また、柱穴5から糸切庭の甕が、柱穴6から白磁の甕が、柱穴7から青磁の甕と白磁の皿が、柱穴11から石版式土器に比定できる縄文土器と土師器の甕が出土した。

##### 10号掘立柱建物跡 (第20図)

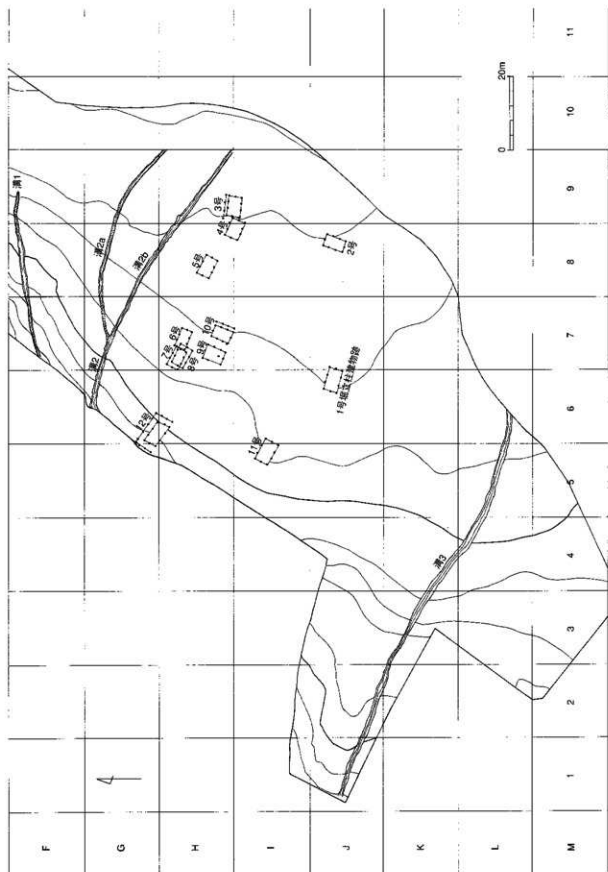
H-7区で検出された。2間×3間の大きさで主軸は南北方向である。東側に庇をもつ。柱穴の長径は約41cm、短径は約28cm、深さは約39cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は、黒褐色と黒褐色にアカホヤが点在しているものがあった。また、柱穴5から土師器の甕が1点出土した。

##### 11号掘立柱建物跡

I-5区で検出された。2間×3間の大きさである。主軸はほぼ東西方向である。

##### 12号掘立柱建物跡 (第21図)

H-6区で検出された。2間×3間の大きさで、南側を除く三面庇をもつ構造となっていた。柱穴の長径は約33cm、短径は約28cm、深さは約44cmであるが一定ではない。



第12图 中世遺構配置圖

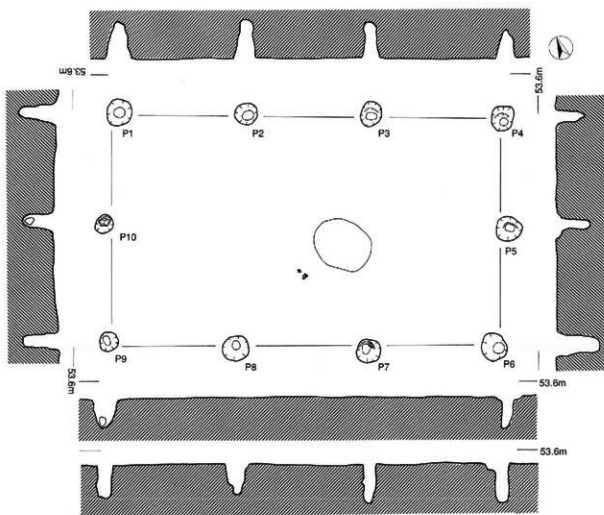


第13図 中世遺物出土状況（概観分）

1号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

柱穴 番号	柱穴痕 (単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	45	39	60
2	36	33	63
3	42	33	57
4	45	33	45
5	42	39	54
6	45	39	69
7	42	36	63
8	45	39	51
9	33	30	51
10	30	27	48

方向	柱穴 番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1~2	207
	2~3	198
	3~4	213
	1~4	621
	6~7	204
	7~8	213
	8~9	204
	6~9	621
	10~9	189
梁間 方向	1~9	375
	4~5	180
	5~6	192
	4~6	372

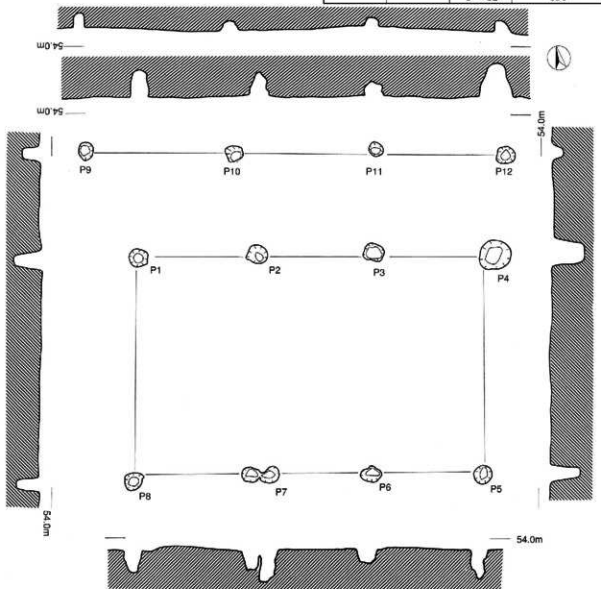


第14図 1号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

	柱穴番号	柱穴痕(単位:cm)		
		長径	短径	深さ(最深)
棟部	1	30	27	42
	2	33	30	39
	3	33	24	24
	4	51	45	51
	5	30	27	48
	6	33	24	24
	7	33	21	48
	8	33	27	36
庇部分	9	30	21	30
	10	30	24	12
	11	24	21	12
	12	30	27	18

	方向	柱穴番号	柱間(単位:cm)
		棟部	桁行方向
2~3	180		
3~4	186		
1~4	555		
5~6	174		
6~7	162		
7~8	210		
5~8	546		
庇部分	梁間方向	1~8	357
		4~5	354
庇部分	桁行方向	9~10	231
		10~11	219
		11~12	204
		9~12	654

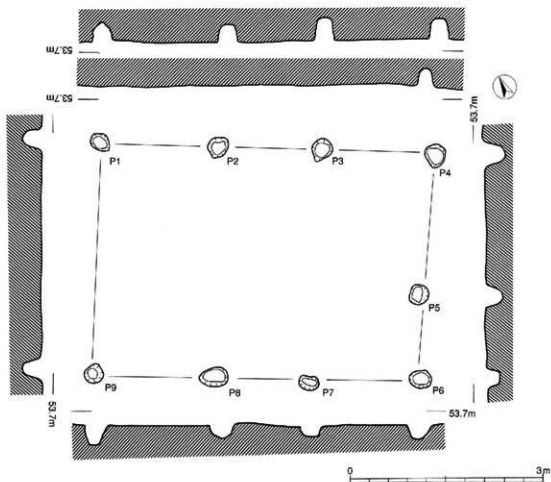


第15図 3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

柱穴 番号	柱穴痕 (単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	33	24	30
2	33	30	30
3	39	30	36
4	39	33	30
5	33	30	24
6	36	30	24
7	33	21	15
8	45	30	21
9	33	30	30

方向	柱穴 番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1~2	189
	2~3	159
	3~4	183
	1~4	521
	6~7	180
	7~8	150
	8~9	186
	6~9	516
	梁間 方向	1~9
4~5		225
5~6		138
4~6		363

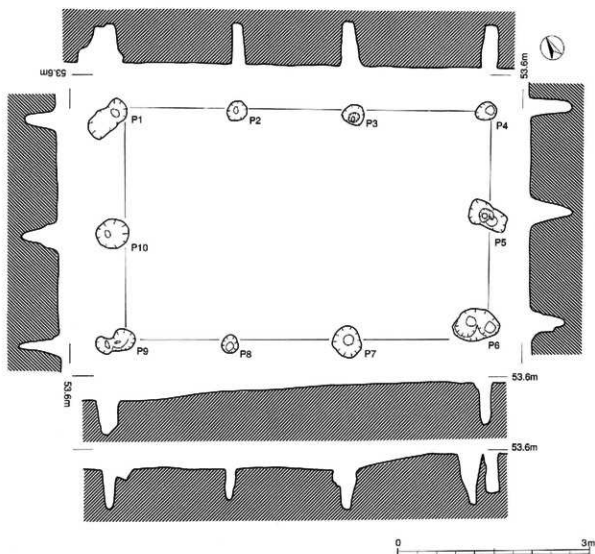


第16図 4号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

柱穴 番号	柱穴痕 (単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	72	33	60
2	33	30	66
3	33	30	72
4	33	30	69
5	69	33	66
6	72	45	54
7	51	42	66
8	30	24	48
9	42	27	66
10	51	42	54

方向	柱穴 番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1~2	189
	2~3	186
	3~4	213
	1~4	588
	6~7	219
	7~8	186
	8~9	192
	6~9	597
	1~10	195
梁間 方向	10~9	177
	1~9	372
	4~5	168
	5~6	180
	4~6	348

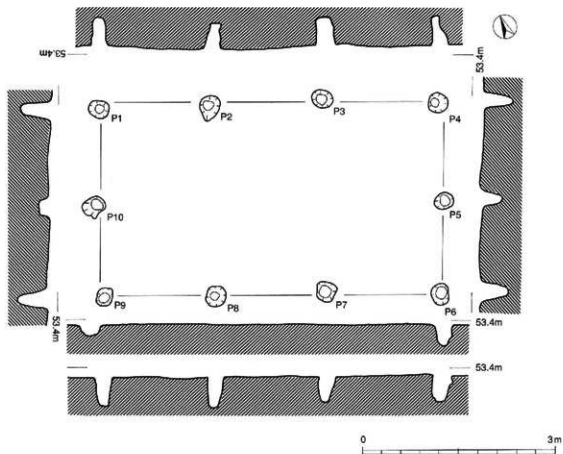


第17図 5号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

柱穴 番号	柱穴痕 (単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	33	27	48
2	39	30	42
3	33	27	45
4	30	27	45
5	30	27	33
6	36	27	42
7	36	27	42
8	33	27	48
9	33	24	45
10	36	27	15

方向	柱穴 番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1 ~ 2	171
	2 ~ 3	177
	3 ~ 4	180
	1 ~ 4	528
	6 ~ 7	183
	7 ~ 8	174
	8 ~ 9	177
	6 ~ 9	534
梁間 方向	1 ~ 10	153
	10 ~ 9	150
	1 ~ 9	303
	4 ~ 5	159
	5 ~ 6	147
4 ~ 6	306	



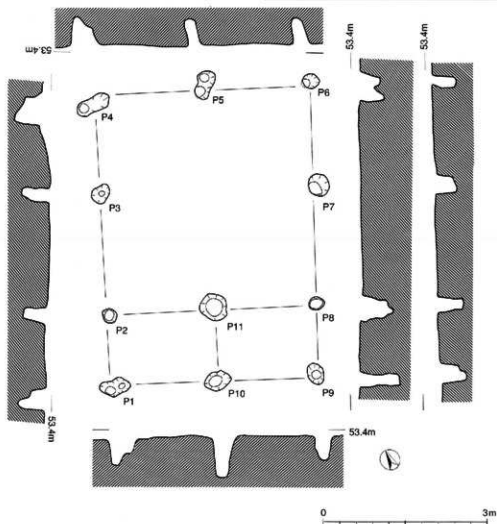
第18図 6号掘立柱建物跡



9号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

柱穴 番号	柱穴痕 (単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	54	33	48
2	30	24	42
3	39	30	51
4	66	27	48
5	51	27	54
6	27	24	54
7	42	36	36
8	27	24	48
9	42	24	48
10	51	36	72
11	54	42	60

方向	柱穴 番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1 ~ 2	138
	2 ~ 3	225
	3 ~ 4	165
	1 ~ 4	528
	6 ~ 7	192
	7 ~ 8	219
	8 ~ 9	138
	6 ~ 9	549
	10 ~ 11	135
	11 ~ 5	411
	10 ~ 5	546
梁間 方向	1 ~ 10	198
	10 ~ 9	186
	1 ~ 9	384
	4 ~ 5	219
	5 ~ 6	198
	4 ~ 6	417
	2 ~ 11	198
	11 ~ 8	186
	2 ~ 8	384

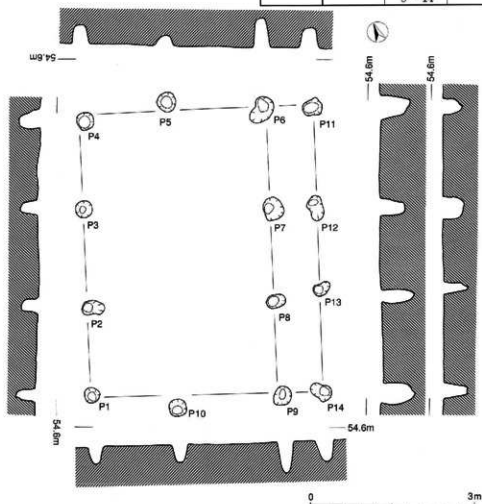


第19図 9号掘立柱建物跡

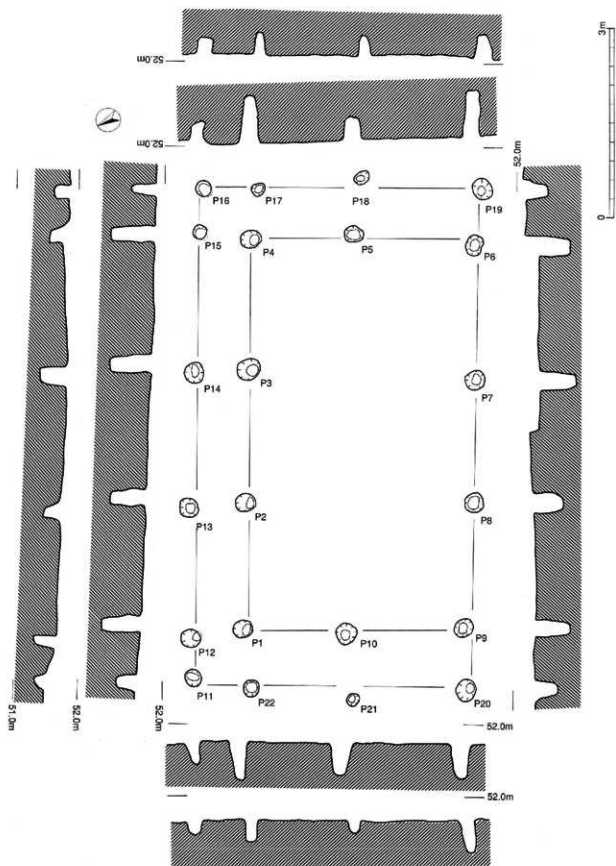
10号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

	柱穴番号	柱穴痕(単位: cm)		
		長径	短径	深さ(最深)
棟部	1	30	27	30
	2	42	24	30
	3	33	30	30
	4	33	30	36
	5	39	33	18
	6	54	30	54
	7	45	36	45
	8	36	24	57
	9	39	30	60
	10	33	30	30
庇部分	11	54	30	33
	12	48	24	36
	13	48	21	42
	14	42	24	42

	方向	柱穴番号	柱間(単位: cm)
2~3	186		
3~4	162		
1~4	513		
6~7	192		
7~8	174		
8~9	174		
6~9	540		
梁間方向	1~10	159	
	10~9	192	
	1~9	351	
	4~5	162	
	5~6	180	
庇部分	桁行方向	4~6	342
		11~12	180
		12~13	165
		13~14	189
	梁間方向	11~14	534
		6~11	90
		7~12	84
		8~13	90
9~14	81		



第20図 10号掘立柱建物跡



第21図 12号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡柱間芯距離

方向	柱穴番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1~2	160
	2~3	200
	3~4	200
	1~4	560
	6~7	200
	7~8	200
	8~9	160
	6~9	560
	4~5	160
梁間 方向	5~6	160
	4~6	320
	9~10	160
	10~1	160
	9~1	320

7号掘立柱建物跡柱間芯距離

方向	柱穴番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1~2	200
	2~3	200
	3~4	160
	1~4	560
	5~6	160
	6~7	200
	7~8	200
	5~8	560
梁間 方向	4~5	320
	8~1	320

8号掘立柱建物跡柱間芯距離

方向	柱穴番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1~2	168
	2~3	168
	3~4	224
	1~4	560
	6~7	224
	7~8	168
	8~9	168
	6~9	560
	4~5	200
梁間 方向	5~6	160
	4~6	360
	9~10	200
	10~1	160
	9~1	360

11号掘立柱建物跡柱間芯距離

方向	柱穴番号	柱間 (単位: cm)
桁行 方向	1~2	200
	2~3	200
	3~4	200
	1~4	600
	6~7	200
	7~8	200
	8~9	200
	9~1	600
	4~5	160
梁間 方向	5~6	200
	4~6	360
	9~10	200
	10~1	160
	9~1	360

12号掘立柱建物跡柱穴計測表

	柱穴番号	柱穴径 (単位: cm)				柱穴番号	柱穴径 (単位: cm)		
		長径	短径	深さ(最深)			長径	短径	深さ(最深)
棟部	1	30	27	60	庇部分	11	27	24	18
	2	33	27	54		12	33	30	36
	3	36	33	66		13	33	30	27
	4	33	27	72		14	33	30	42
	5	30	24	36		15	24	21	30
	6	33	24	72		16	24	24	24
	7	33	30	57		17	21	18	36
	8	30	27	48		18	24	18	33
	9	33	27	54		19	36	33	39
	10	36	33	48		20	36	33	51
					21	21	18	18	
					22	27	24	36	

12号掘立柱建物跡柱間芯距離

方向	柱穴番号	柱間 (単位: cm)	方向	柱穴番号	柱間 (単位: cm)
棟部	1~2	201	庇部分	11~12	66
	2~3	213		12~13	207
	3~4	207		13~14	219
	1~4	621		14~15	222
	6~7	219		15~16	69
	7~8	195		11~16	783
	8~9	201		11~22	93
	5~9	615		22~21	159
	1~10	162		21~20	183
	10~9	183		11~20	435
梁間 方向	1~9	345	梁間 方向	16~17	93
	4~5	159		17~18	159
	5~6	192		18~19	186
	4~6	351		16~19	438

### イ 溝状遺構 (第22図)

本遺跡では中世のものと思われる4条の溝状遺構が検出された。建石ヶ原遺跡の中世遺構配置図を参照すると、溝1と溝2(2a・2bに枝分かれする)は検出された位置・方向等から西は西原遺跡、東は建石ヶ原遺跡の溝1へぶつかるものと考えられるが確認されていないので断定はできない。溝3は、西側が西原遺跡へ続いていることが、東側は建石ヶ原遺跡の溝の一部とつながっていることが確認された。詳細は小図で述べるが、掘立柱建物跡と切り合っているものがないことなどから道跡としての性格をもつ可能性が最も高いものと思われる。

#### 溝1

F-7~9区で検出された。3号掘立柱建物跡の主軸とほぼ平行する位置関係にあると思われる。

#### 溝2

G-H-6~9で検出された。G-7区の途中で2条に分かれ、2aはG-9区まで、2bはH-9区まで確認できた。2bは1号・4~8号・11・12号掘立柱建物跡の各主軸とほぼ平行する位置関係にあると思われる。

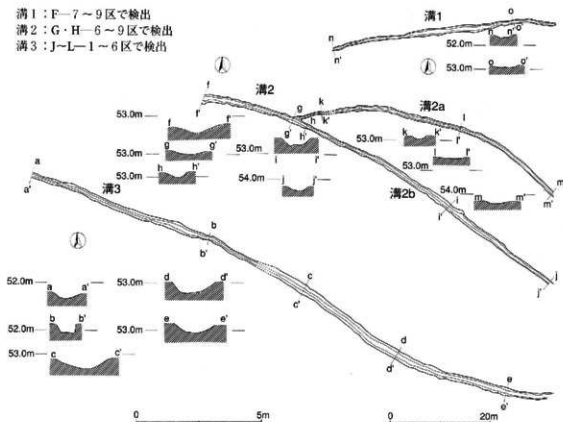
#### 溝3

J-L-1~6区にわたり検出された。ただし、J~K-1~3は西原遺跡の調査区内であり、溝がつながっていることが確認された。また、東は建石ヶ原遺跡の溝1とつながっていることも確認されており、合流の方向性から人々の流れが北へ向かっていることが予想できる。掘立柱建物跡との関係は判断できなかった。

溝1：F-7~9区で検出

溝2：G・H-6~9区で検出

溝3：J-L-1~6区で検出



第22図 溝状遺構及び断面図

### ③ 遺物

#### 土師器 (第23図)

28~37は糸切底の坏である。28は復元の口径は約11.2cm、器高は約3.6cmとやや大型である。外面・内面ともナデ調整による稜線が観察できる。外面の体部中位がやや丸みを帯びている。29は復元口径が約10cm、復元器高が約3cmとやや大型である。口縁部がやや外反している。外面・内面ともナデ調整が施されている。特に、体部下半が強くナデ調整が施されており、やや丸みを帯びている。30~35は復元器高が約1.2cm~1.6cmとやや低い。いずれも外面・内面ともナデ調整が施されている。また、30は10号掘立柱建物跡の柱穴1から、31は9号掘立柱建物跡の柱穴5から出土した。31・32は体部と底部の境目が窪んでおり、35は底部の内面の端がやや盛り上がっている。36・37は底部である。36は復元底径約8cmである。外・内面ともナデ調整が施されており、特に、外側面は強いナデ調整が施されている。37は復元底径約6.2cmである。指によるナデ調整が施されている。38は糸切底の皿である。底面の外側がやや窪んでいる。

#### 青磁 (第23図)

39~45はすべて能楽堂系の青磁碗である。39~43は鏡透弁を施すものである。39・40は全体的に貫入が見られ、41は口縁部に貫入が見られる。復元口径は40が約14cm、41が約16.6cm、42が約16.6cmである。44は無文で、口縁部が外反し半州な面をもつ。復元口径は約11.6cmである。45は碗の底部で、高台は断面四角形である。壺付と高台内部は露胎である。9号掘立柱建物跡の柱穴7から出土した。

#### 白磁 (第24図)

46~55は灰白色の磁胎に透明の釉が掛かった白磁の皿と思われる。46~52は口縁部の釉が掻き取られた口禿口縁の皿である。46・47は口縁部から底部までの破片である。46は復元の口径が約11.2cm、底径が約6.2cm、器高が約2.7cmで、47は9号掘立柱建物跡の柱穴7から出土したもので、復元の口径が約10.2cm、底径が約7cm、器高が約1.8cmである。48・49は口縁部が外反し、復元口径は48が約9.2cm、49が約11.4cmである。50は口縁部がやや外反し、復元口径は約11.6cmである。

51は口縁部は直行し、復元口径は約10.6cmである。52は口縁部が外反し、復元口径は11cmである。53~55は底部で、それぞれの底径は53が約6.6cm、54が約7.8cm、55が約5.2cmである。56は碗の底部と思われる。復元底径は約5.2cmである。5号掘立柱建物跡の柱穴4から出土した。

#### 染付 (第24図)

57は16世紀頃、58は近世の染付と思われる。白い素地に青色の顔料で絵付けを行い、その上に透明釉を掛け焼成した磁器である。57は口縁部から底部までの皿の破片で、壺付部は露胎である。外・内面とも貫入が見られる。復元の口径は約12cm、底径は約6cm、器高は約3.7cmである。58は皿の高台部に近い体部片と思われるもので、高台部付近に花文らしきものが描かれている。

#### 須恵器 (第25図)

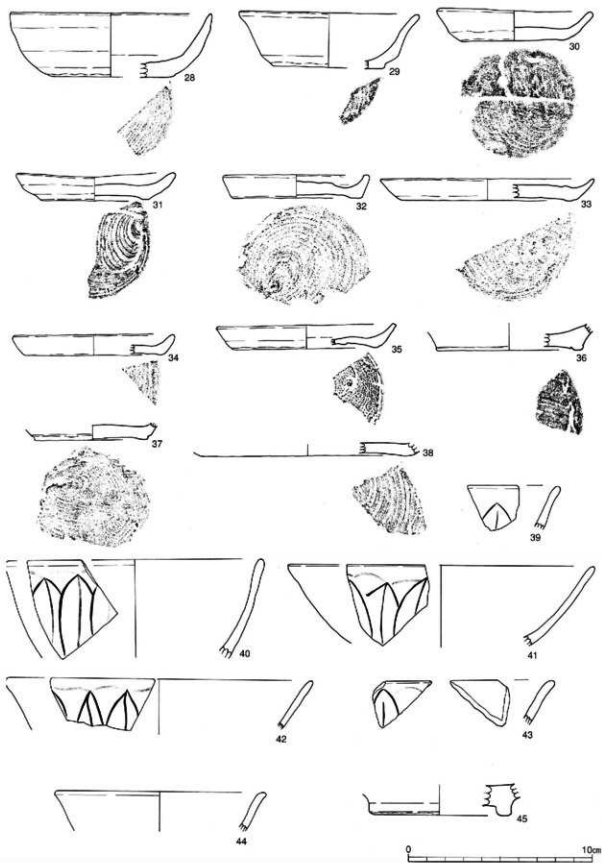
59~62は全て壺の胴部で、59~61は同一個体である。外面は格子目タタキ、内面はナデで器面が調整されている。62は、外面が平行タタキで器面が調整されており、内面は同心円状の当て具痕が見られる。

#### 陶器 (第25図)

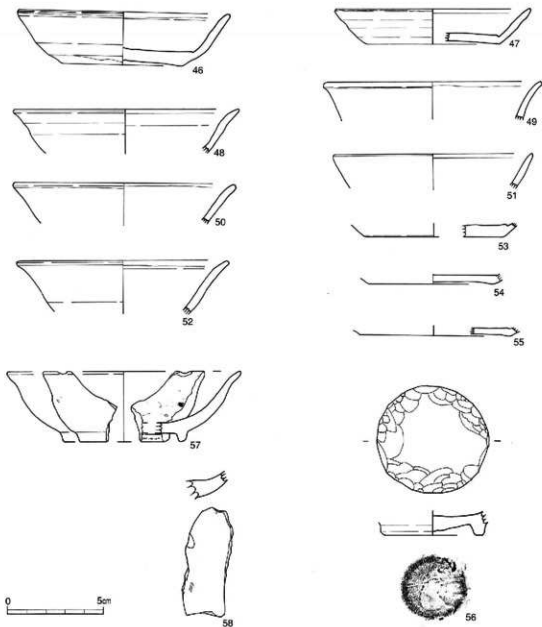
63は色調が灰褐色の鉢の口縁部で、復元口径が約17.1cmである。64は色調が茶褐色をした束播磨系こね鉢の口縁部で、復元口径が約26.6cmある。1号掘立柱建物跡の柱穴8から出土した。65は色調が茶褐色をした備前焼と思われる播鉢の底部で復元底径が約9cmである。

#### 土鎌・滑石製品 (第26図)

66はやや扁平な上製品で両面に紐かけと思われる溝を有するもので、土鎌と考えられる。67は外面にススが付着した滑石製石罫片、68は把手付の滑石製石罫の二次加工品である。いずれも掘立柱建物跡周辺のⅡ層から出土した。



第23図 中世出土遺物 1 (土師器・青磁)



第24図 中世出土遺物2 (白磁・染付)

土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区 遺構	層位	色調		調整		法量 (cm)			焼成	底部	備考	
				外	内	外面	内面	口径	底径	器高				
第23 図	28	J-6	Ⅱ	白	淡黄色	ナデ	ナデ(刷,ケズリ底)	11.2	7.2	3.6	良	糸切	環	
	29	J-6	Ⅱ	淡黄色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	10	6.4	3	〃	糸切		
	30	SB10P1	—	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	8.4	6	1.6	〃	糸切		
	31	SB09P5	—	明茶褐色	明茶褐色	ナデ(刷,ケズリ底)	ナデ	8.8	6	1.6	〃	糸切		
	32	I-6	Ⅲ	淡黑褐色	淡黑褐色	ナデ(刷,ケズリ底)	ナデ	8	7.2	1.2	〃	糸切		
	33	—	一括	淡黄色	淡黄色	ナデ(刷,ケズリ底)	ナデ	11.6	9.6	1.2	〃	糸切		
	34	H-8	Ⅲ	淡黄色	茶褐色	ナデ	ナデ(刷,ケズリ底)	8.8	7.6	1.2	〃	糸切		
	35	G-9	Ⅲ	淡黄色	茶褐色	ナデ	ナデ(刷,ケズリ底)	10	8	1.2	〃	糸切		
	36	SB09P11	—	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	—	8	—	〃	糸切		
	37	J-6	Ⅱ	茶褐色	茶褐色	底部ケズリ	ナデ	—	6.2	—	〃	糸切		
	38	J-6	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	底部ケズリ	ナデ	—	11.6	—	〃	糸切		皿